兵庫県文化財調査報告　第449冊

宍粟市

神谷戒現行遺跡

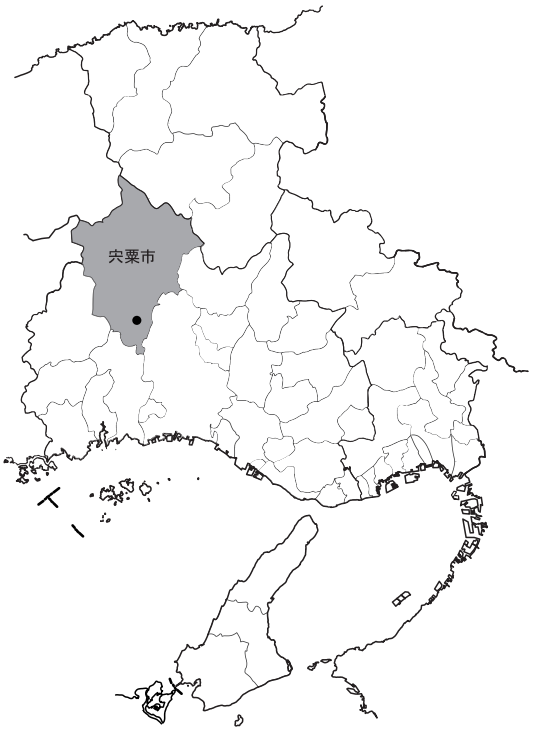
－（一）田井中広瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

神谷戒現行遺跡

－（一）田井中広瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

例　言・凡　例

1．本書は宍粟市山崎町神谷字戒現行に所在する、神谷戒現行（こうだにかいげんぎょう）遺跡の発掘調査報告書である。

2．神谷戒現行遺跡の調査は、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所宍粟事業所（発掘調査当時は山崎土木事務所）による一般県道田井中広瀬線道路改良事業に伴うものである。

3．発掘調査および出土品整理事業は、龍野土木事務所宍粟事業所（山崎土木事務所）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会を調査主体として兵庫県立考古博物館が実施した。

ただし、出土品整理事業（報告書作成）のうち、平成24年度の実施機関は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部である。

4．神谷戒現行遺跡の発掘調査は平成21（2009）年度に実施した。発掘調査期間・担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号は以下のとおりである。

平成21（2009）年７月９日～８月26日（本発掘調査）（遺跡調査番号：2009192）

兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　調査第１班　　岸本一宏・西口圭介

5．発掘調査にあたっては、株式会社大洋組に工事委託して実施し、調査区の基準点設置は株式会社サンコムに委託して実施した。また、実測に際しては有限会社松浦興業の多大なる協力を得た。

6．出土品整理（報告書作成）事業は平成23・24（2011・2012）年度に実施した。実施期間・機関は以下のとおりである。

平成23（2011）年４月１日～平成24（2012）年３月31日

兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

平成24（2012）年４月10日～平成25（2013）年３月31日

公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

7．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したものを、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。

8．神谷戒現行遺跡出土試料の自然科学分析のうち、炭化材の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託して実施した。

9．本書の執筆は、石器・石製品の部分を公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部の久保弘幸が行い、その他を岸本が執筆した。

編集は公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部非常勤嘱託員の栗山美奈の協力を得て岸本が行った。

10．発掘調査・報告書作成にあたり、神谷自治会をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表します（順不同、敬称略）。

小林　極・垣内　章・田路正幸・志水豊章

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

調査区南半部全景（北から）

SH−１全景（北から）

SX-６土器出土状況（東から）

SD-２内土器・礫出土状況（南西から）

SH-２全景（北から）

SH-２床面北西部土器出土状況（東から）

SH-２竈土層断面（東から）

SH-４床面土器出土状況（東から）

SH-４埋土土層断面（東から）

SH-２・４出土土器（左：SH-２、右：SH-４）

SX-６出土土器（壺）

SX-６等出土土器（甕ほか）

本 文 目 次

第１章　はじめに
第１節　遺跡をとりまく環境
１．地理的環境……1
２．歴史的環境……1
第２節　調査の経緯・経過
１．発掘調査……5
２．出土品整理……6
第２章　調査結果
第１節　調査区の概要と土層関係
１．調査区の概要……7
２．土層関係……7
第２節　検出遺構
１．弥生時代の遺構……8
２．古墳時代の遺構……10
３．中世前期の遺構……12
第３章　出土遺物
第１節　遺構出土遺物
１．弥生時代遺構出土遺物……13
２．古墳時代遺構出土遺物……19
３．中世前期遺構出土遺物……22
第２節　包含層出土遺物
１．縄紋土器・弥生土器……23
２．弥生時代等石製品……24
第４章　総　括
第１節　出土土器について……25
第２節　放射性炭素年代ＡＭＳ測定結果……27
第３節　総　括……30

巻 頭 写 真 図 版 目 次

巻頭写真図版１上　調査区全景（北から）
下　調査区全景（南から）
巻頭写真図版２上　調査区南半部全景（北から）
下　ＳＨ－１全景（北から）
巻頭写真図版３上　ＳＸ－６土器出土状況（東から）
下　ＳＤ－２内土器・礫出土状況（南西から）
巻頭写真図版４上　ＳＨ－２全景（北から）
中　ＳＨ－２床面北西部土器出土状況（東から）
巻頭写真図版４下　ＳＨ－２竈土層断面（東から）
巻頭写真図版５上　ＳＨ－４床面土器出土状況（東から）
中　ＳＨ－４埋土土層断面（東から）
下　ＳＨ－２・４出土土器
巻頭写真図版６上　ＳＸ－６出土土器（壺）
下　ＳＸ－６等出土土器（甕ほか）

挿図目次

第１図　周辺の遺跡……３
第２図　神谷自治会出版の記念誌……６
第３図　遺跡顕彰碑……６
第４図　西播磨弥生中期土器……26
第５図　［参考］暦年較正年代グラフ……29
第６図　神谷戒現行遺跡集落の推定範囲……30

表目次

第１表　遺跡名表……４
第２表　出土石器一覧……24
第３表　暦年較正年代（補正値）……28
第４表　暦年較正年代……29

図版目次

図版１　調査区位置図
図版２　調査区平面・断面図
図版３　ＳＨ－１平面図
図版４　ＳＨ－１断面図・出土土器
図版５　調査区中央部遺構群　平面図
図版６　調査区中央部遺構群　土層断面図
図版７　ＳＸ－６出土土器（１）
図版８　ＳＸ－６出土土器（２）
図版９　ＳＸ－６出土土器（３）
図版10　ＳＸ－６出土土器（４）
図版11　ＳＸ－６出土土器（５）
図版12　ＳＸ－６出土土器（６）
図版13　ＳＸ－６出土石製品
図版14　ＳＸ－１・７ 平面・断面図、出土土器
図版15　ＳＤ－１・２、ＳＸ－３出土遺物
図版16　ＳＨ－２平面図
図版17　ＳＨ－２断面図
図版18　ＳＨ－２出土遺物
図版19　ＳＨ－４平面・断面図
図版20　ＳＨ－４出土遺物
図版21　調査区北部中世遺構
図版22　包含層出土遺物

写真図版目次

写真図版１　航空写真
写真図版２上　調査区全景（北から）
　　下　調査区南部全景（北から）
写真図版３上　ＳＨ－１全景（北から）
　　①　ＳＨ－１全景（南から）
　　②　ＳＨ－１内屋内溝（北西から）
　　③　ＳＨ－１内地床炉断割断面（西から）
　　④　調査区南半部全景（北から）
写真図版４上　ＳＸ－６土器出土状況（東から）
　　下　ＳＤ－２土器・礫出土状況（南西から）
写真図版５上　ＳＸ－３土器出土状況（南から）
　　下　ＳＤ－１中央部土器出土状況（北から）
写真図版６①　ＳＸ－６埋土断面（北から）
　　②　ＳＸ－１埋土断面（南西から）
　　③　ＳＸ－１土器出土状況（北東から）
　　④　ＳＸ－３埋土断面（南から）
　　⑤　ＳＤ－１埋土断面（南から）
　　⑥　ＳＤ－２埋土断面（南から）
　　⑦　ＳＤ－２下層礫出土状況（北西から）
　　⑧　ＳＤ－２完掘状況（北から）
写真図版７上　ＳＨ－２全景（北から）
　　①　ＳＨ－２埋土断面（南東から）
　　②　ＳＨ－２内土壙埋土断面（西から）
　　③　ＳＨ－２埋土断面（東から）
　　④　ＳＨ－２柱穴部分土層断面（東から）
写真図版８上　ＳＨ－２床面北西部土器出土状況（東から）
　　下　ＳＨ－２床面中央部土器等出土状況（南から）
写真図版９上　ＳＨ－４床面中央部土器出土状況（東から）
　　①　ＳＨ－４全景（東から）
　　②　ＳＨ－４床面土器出土状況（南から）
　　③　ＳＨ－４埋土断面（東から）
　　④　ＳＨ－４北部埋土断面（東から）
写真図版10①　調査区北端部柱穴等（北から）
写真図版10②　調査区北端部柱穴等（南西から）
　　③　調査区全景（下層掘削後・北から）
　　④　調査区全景（下層掘削後・南から）
　　⑤　調査区西壁土層断面１（南東から）
　　⑥　調査区西壁土層断面２（南東から）
　　⑦　調査区西壁土層断面３（南東から）
　　⑧　調査区西壁土層断面４（南東から）
写真図版11上　ＳＨ－１出土土器
　　下　ＳＸ－６出土壺（１）
写真図版12　ＳＸ－６出土壺（２）
写真図版13　ＳＸ－６出土壺（３）
写真図版14上　ＳＸ－６出土壺（４）
　　下　ＳＸ－６出土壺（５）
写真図版15上　ＳＸ－６出土土器（外面）
　　下　ＳＸ－６出土土器（内面）
写真図版16　ＳＸ－６出土高坏・甕（１）・底部（１）
写真図版17上　ＳＸ－６出土底部（２）
　　下　ＳＸ－６出土甕（２）
写真図版18上　ＳＸ－６出土底部（３）
　　下　ＳＸ－６出土底部（４）
写真図版19上　ＳＤ－２・ＳＸ－３出土壺
　　下　ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＸ－３出土土器
写真図版20上　ＳＤ－１・２、ＳＸ－１・３出土土器
　　下　ＳＨ－２出土土器
写真図版21　ＳＨ２・ＳＨ－４出土土器（１）
写真図版22上　ＳＨ－２・ＳＨ－４出土土器（２）
　　下　ＳＨ－４出土土器
写真図版23上　包含層出土土器（外面）
　　下　包含層出土土器（内面）
写真図版24　ＳＸ－６出土石器類
写真図版25　ＳＤ－２・ＳＨ－２出土石器類
写真図版26　ＳＨ－４・包含層出土石器類

第１章　はじめに

第１節　遺跡をとりまく環境

１．地理的環境

神谷戒現行遺跡が所在する宍粟市は、兵庫県の中西部で旧国の播磨北西部に位置している。宍粟市の北東側は但馬の養父市･朝来市と接し、北西側は鳥取県南東部の八頭郡若桜町と岡山県北東部の美作市･英田郡西粟倉村に接している。宍粟市の南半分の東側は神崎郡神河町、平成の大合併以前は宍粟郡であった姫路市安富町と境をなし、南側はたつの市新宮町、西側は佐用郡佐用町と接している。

宍粟市の大半は中国山地の東端にあたる丘陵地帯が占め、宍粟市のすぐ北側には兵庫県最高峰の氷ノ山（標高1,509.6m）が位置するように、市北部では1,000mを超える山々が数多く存在している。したがって、宍粟市域の平野部は、これらの山々から流れ出す河川流域に細長く存在する谷状地形に限られている。それらの河川の中で長さ、流域面積ともに最も大きいのが揖保川である。揖保川は宍粟市北部の一宮町北部に源を発し、同じく宍粟市北端の波賀町を源流とする引原川と一宮町南部で合流し、幅広い河川となって南流する。中流域に存在する宍粟市山崎町市街地付近では、南東流する菅野川と合流して宍粟市内で最も面積が広い盆地状平野部（山崎盆地）を西岸側に形成している。宍粟市南部では、山崎盆地を横断する山崎断層によって東西にのびる地溝帯が形成され、東西を結ぶ交通路となり、山崎盆地は揖保川沿いが南北方向であるのと相まって、東西・南北交通の要衝となっている。

神谷戒現行遺跡は山崎盆地の北端から900m北側の揖保川東岸に位置し、揖保川の沖積作用によって形成された自然堤防上に存在している。付近は東側の三谷からの沖積作用とも相まって段丘状の地形となっており、揖保川西岸よりも標高がやや高くなっている。

２．歴史的環境

今回報告する神谷戒現行遺跡では弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が検出された。本遺跡が位置する山崎盆地を中心とした地域に所在する弥生時代～古墳時代の遺跡を概観して、当地域における本遺跡の環境を述べる。

弥生時代の遺跡

周辺に存在する弥生時代遺跡のうち、遺跡の内容が判明しているものは弥生時代中期中頃以降に限られる。本遺跡と同様に弥生時代中期の竪穴住居跡が判明している集落跡では、鹿沢本多町遺跡Ⅰ（82）をあげうるにすぎない。鹿沢本多町遺跡Ⅰでは円形と不整方形の２棟の竪穴住居跡が1982年に調査された。円形住居跡は長径8.3m、短径7.5mの楕円形を呈し、碧玉製管玉と鉄鏃が出土し、建て替えが認められる。他に、木棺墓と推定されるものも含め多数の土壙やピット、溝が検出されており、Ⅲ期の土器が多量に出土している。また、1981年に調査された鹿沢松原町遺跡（78）からは中期の土壙墓10基のほか多数の土壙やピットが調査されている。これらの遺跡群は鹿沢遺跡群と呼称することができ、河岸段丘上の縁辺部に位置する広範囲の集落跡と位置付けることができるであろう。なお、平成７年度の調査で中期後半（Ⅳ期）の掘立柱建物跡が検出されている。

本遺跡の北側約４㎞の田井遺跡では、1988年の圃場整備事業に伴う第６散布地の確認調査の際に銅鐸形土製品が出土した。銅鐸形土製品は高さ10.7㎝で、鐸身部を綾杉文で飾っている。地表下約70㎝のところから出土し、上層からⅢ～Ⅳ期の土器や石斧が出土している。その他、山崎盆地南端の川戸遺跡では第３散布地（26）にあたる部分で弥生時代中期の溝・流路が検出されている。

次の弥生時代後期では、本遺跡では遺構は検出されなかったが、山崎盆地内の集落跡の遺跡数は増加し、東側に存在する神谷山田遺跡（５）で1983年に竪穴住居跡が調査されている。一辺約４ｍの方形住居跡で、弥生時代末～古墳時代初頭の時期とされ、ほかに土壙２基も検出された。また、本遺跡の南側に位置する河東南遺跡（９）でも1982年度調査のＴ20で径８ｍの円形竪穴住居跡が調査され、後期とされている。前述の田井遺跡でも第３散布地で後期の円形竪穴住居跡が調査されている。本遺跡から揖保川を隔てた西側対岸のやや奥には生谷西垣内遺跡（91）があり、1995年度の調査で後期の２棟の竪穴住居跡が調査され、うち１棟は直径5.9ｍで、検出面からの深さが50㎝遺存していた。

山崎盆地南端の上比地森ノ上遺跡（38）では、公園進入路敷設に伴う調査が2005年度に行われた。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて竪穴住居が連続して営まれていたことが判明した。竪穴住居跡は地形的に２地区に分かれて存在しているが、合計11棟で、拡張分も含めると15棟とされている。竪穴住居跡平面形の内訳は円形３棟、方形６棟、長方形が１棟で、時期が降ると矩形化している。円形住居跡の中央土壙はすべて複合タイプで、うち１棟からベンガラと思われる赤色顔料生産に使用された石臼が出土した。また、掘立柱建物跡が２棟存在している。

川戸遺跡（24の東側）では、道路改良に伴う2000年度の調査で、後期の円形竪穴住居跡の一部と判断されている遺構や、弥生時代後期～古墳時代初頭の流路があり、流路からは多量の土器が出土している。

なお、盆地東端の須賀沢と、盆地西端の青木では銅鐸が出土している。須賀沢銅鐸は新しいタイプの突線鈕袈裟襷文銅鐸で、鰭部に双頭渦文の飾耳がつく。現在所在不明であるが、高さ１ｍとされている。青木銅鐸は外縁付鈕４区袈裟襷文銅鐸とやや古いタイプで、高さは約31㎝である。

古墳時代の遺跡

盆地内では、前期に遡る古墳は知られておらず、中期古墳も未確認である。ただし、古墳時代前期の集落跡である上比地森ノ上遺跡が発見されたことにより、その近辺に前期古墳が存在する可能性がある。

その他の集落跡は古墳時代中期末以降に限られる。本遺跡では６世紀中葉の竪穴住居跡を２棟検出したが、本遺跡南側の河東南遺跡では1982年の調査で７棟もの竪穴住居跡が検出されており、住居跡は微高地の東および南側縁辺に位置して、一つの集落を形成していると判断されている。時期が未確定な住居跡も存在するが、概ね５世紀末～６世紀初頭頃と考えられる。平面が隅丸方形のものはＴ20で４棟、Ｔ42で１棟の計５棟、平面方形がＴ20で１棟、不整形のものがＴ10で１棟検出されている。竈をもつ住居跡が４棟あり、焚口に門石を有するものが２例認められた。さらに、1982年度調査区の南側にあたる1983年度調査区でも、６世紀中頃と推定される一辺約4.4ｍの方形竪穴住居跡が検出された。

ほかに、山崎盆地南端の上比地森ノ上遺跡では古墳時代後期の６世紀後半の竪穴住居跡が尾根突端の地区に存在していた。なお、川戸遺跡で古墳時代中期後半の竪穴住居跡が想定されているが、確実性に乏しい。川戸遺跡では古墳時代後期の溝が検出されている。

横穴式石室を採用した後期古墳のうち、群集するものは、北から五十波（113）・矢原（123）・三津（102）・加生（74）・春安（68）・須賀沢（19・22）・金谷（45）などの古墳群・群集墳があるが、いずれも数基で構成される小規模なもので、大規模な集落を背景としたものではないようである。これらのうち三津

第１図　周辺の遺跡

第１表　遺跡名表

1	神谷戒現行遺跡	33	上比地第４散布地	65	段第１散布地	97	宇野遺跡
2	神谷第１散布地	34	上比地第３散布地	66	春安第４散布地	98	宇野古墳
3	河東条里	35	上比地１号墳	67	春安第３散布地	99	片山遺跡
4	神谷第５散布地	36	上比地第１散布地	68	春安１～５号墳	100	生谷古墳
5	神谷山田遺跡	37	金谷第８散布地	69	春安第１散布地	101	生谷１号墳
6	神谷第３散布地	38	上比地森ノ上遺跡	70	春安第２散布地	102	三津１～５号墳
7	中第２散布地	39	中比地第１散布地	71	木谷第１散布地	103	生谷第２散布地
8	神谷第４散布地	40	中比地第２散布地	72	市場第２散布地	104	三津第４散布地
9	河東南遺跡	41	比地条里	73	市場第１散布地	105	三津第１散布地
10	中第１散布地	42	金谷第７散布地	74	加生１～７号墳	106	三津第２散布地
11	中１号墳	43	金谷第３散布地	75	門前・加生第１散布地	107	三津第３散布地
12	中第３散布地	44	金谷第５散布地	76	門前１号墳	108	三津古墳
13	高所第１散布地	45	金谷１～４号墳	77	門前・加生第２散布地	109	五十波遺跡
14	高所古墳	46	金谷第４散布地	78	鹿沢松原町遺跡	110	五十波第３散布地
15	高所第２散布地	47	金谷山部古墳	79	鹿沢本多町遺跡２	111	五十波第２散布地
16	高所第３散布地	48	金谷第２散布地	80	鹿沢城跡（武家屋敷跡）	112	五十波第１散布地
17	高所第４散布地	49	金谷第１散布地	81	鹿沢城跡（御勘定所周辺）	113	五十波１～７・９号墳
18	出石第１散布地	50	千本屋第２散布地	82	鹿沢本多町遺跡Ⅰ	114	五十波第４散布地
19	須賀沢３・４号墳	51	千本屋第３散布地	83	鹿沢城跡（西御屋敷跡）	115	五十波第５散布地
20	須賀沢第１散布地	52	御名第１散布地	84	段第５散布地	116	岸田第２散布地
21	須賀沢第２散布地	53	野第１散布地	85	中広瀬第１散布地	117	野々上塚谷古墳
22	須賀沢１・２号墳	54	千本屋第１散布地	86	山田第１散布地	118	野々上天神谷古墳
23	川戸山１～６号墳	55	播磨千本屋廃寺跡	87	上寺第３散布地	119	岸田第３散布地
24	川戸第１散布地	56	船元第１散布地	88	上寺１・２号墳	120	岸田遺跡
25	川戸第２散布地	57	下広瀬第１散布地	89	上寺第１散布地	121	岸田第１散布地
26	川戸第３散布地	58	中井第２散布地	90	生谷第１散布地	122	矢原遺跡
27	川戸第４散布地	59	中井条里	91	生谷西垣内遺跡	123	矢原１～５号墳
28	川戸第５散布地	60	中井第１散布地	92	横須古墳	124	矢原第１散布地
29	川戸条里	61	段第４散布地	93	横須第１散布地	125	矢原第２散布地
30	宇原10・12～14号墳	62	段第３散布地	94	下町第２散布地		
31	宇原第１散布地	63	段１号墳	95	下町第１散布地		
32	中比地第３散布地	64	段第２散布地	96	下町遺跡		

群集墳では、1985～1986年に中学校建設に先立って１～５号墳が調査された。すべて横穴式石室で、６世紀後半から７世紀初頭にかけて築造・埋葬され、多数の須恵器が出土し、５号墳からは大刀・鉄鏃・耳環・玉類といった副葬品も多量に出土している。横穴式石室墳以外に古墳の内容が判明しているものは認められないが、本遺跡や河東南遺跡といった、後期中頃までの集落に関連する古墳が存在する可能性を指摘しておきたい。また、瑞雲双鸞八花鏡が大正時代に金谷１号墳から出土したとされている。

なお、神谷戒現行遺跡が所在する一帯には条里地割が存在しており、圃場整備などによってかなり改変されたが、かろうじて残存している状況が確認できる。

参考文献

一宮町史編集委員会　1985『一宮町史』一宮町
宇野正碵ほか　1977『山崎町史』山崎町役場
亀井義彦　1986「河東南遺跡（第４次）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度　兵庫県教育委員会
亀井義彦　1987『三津群集墳』山崎町教育委員会
亀井義彦　1992「河東南遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県
亀井義彦　1992「鹿沢本多町遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県
垣内　章　1986「神谷山田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度　兵庫県教育委員会
垣内　章・亀井義彦　1985「河東南遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度　兵庫県教育委員会
垣内　章・亀井義彦　1985「鹿沢本多町遺跡Ⅰ」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度　兵庫県教育委員会
片山昭悟　1999『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様（続編）』
篠宮　正　2007『川戸遺跡』兵庫県文化財調査報告　第314冊　兵庫県教育委員会
村川行弘編　1996『兵庫県の考古学』地域考古学叢書　吉川弘文館
吉識雅仁編　2010『上比地森ノ上遺跡』兵庫県文化財調査報告　第373冊　兵庫県教育委員会

第２節　調査の経緯・経過

１．発掘調査

兵庫県西播磨県民局山崎土木事務所（発掘調査当時）による、一般県道田井中広瀬線道路改良事業（発掘調査当時は地域自立活性化交付金事業）の予定範囲のうち、宍粟市山崎町神谷～中地区内の広範囲には河東条里遺跡をはじめ、河東南遺跡や中第１散布地などが存在し、河東小学校の南側には神谷第２散布地が周知の埋蔵文化財包蔵地として存在している。

事業予定範囲のうち、これらの遺跡にあたる部分の確認調査を、平成19年１月に兵庫県立考古博物館が実施した（遺跡調査番号2006164）結果、神谷第２散布地にあたる部分において柱穴状遺構と土師器片が検出されたものの、その数は僅かであった。なお、その際に河東南遺跡の1982年度調査区のうち、Ｔ20を中心とした部分の東隣を調査し、２基のピットを検出したが、本発掘調査はおこなわれなかった。

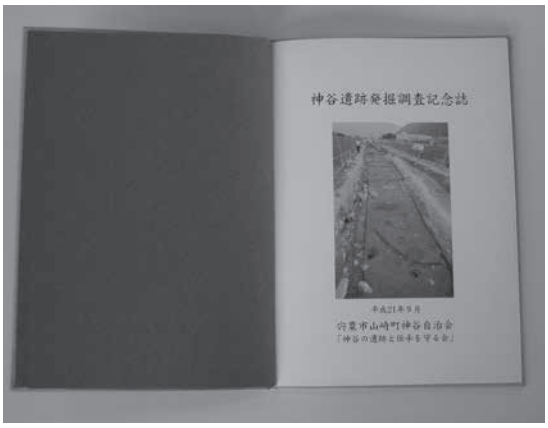
一方、平成21年３月に、神谷第２散布地範囲内の道路東側用排水路部分について文化財の工事立会を実施した（遺跡調査番号2008247）。その部分は神谷第２散布地範囲内の北部であり、遺構・遺物は確認されなかった。ところが、その南側の神谷第２散布地範囲内中央にあたる部分において、工事掘削による水路断面に柱穴･土壙･遺物包含層が確認された。この部分はすでに埋蔵文化財無しの回答をおこなっていたが、山崎土木事務所（当時）と協議した結果、道路工事により地盤改良をおこなう部分のうち、遺構が確認された部分の西側について記録保存の本発掘調査を実施することとなった。

調査にあたっては、地表面から遺物包含層上面までは重機により掘削し、その下の遺物包含層から遺構面上面までは人力により掘削した。同時に、包含層に含まれる遺物について回収に努めた。遺構面まで掘削した後、表面を精査して遺構検出をおこない、検出した遺構については人力による遺構掘削をおこなった。また、遺構面以下にも遺物が包含されていたことから、調査区の約半分についてさらに掘削して遺物の回収をおこなった。調査面積は241㎡であった。なお、掘削した際の残土はすべて調査区北側の道路際残地に仮置きした。

検出した遺構については、調査区全体の平面図実測および個別遺構の平面と埋土断面の写真撮影・実測をおこない、広範囲の写真については足場を設置して撮影をおこなった。また、測量のための基準点設置については、株式会社サンコムに委託して実施した。以上の記録を作成したのち、全体の埋め戻しをおこなった。

なお、発掘調査進行上の適期である８月12日に地元住民を対象とした説明会を実施した結果、炎暑の中、約80名の方々が見学に来られた。興味を持たれた方々が多かったことに加え、特記すべきことに、２千年以上も前から地元神谷の地に祖先の人たちが生活していたことが確認された遺跡の発掘調査が、神谷地区住民の郷土の歴史への興味を誘う契機となって、郷土愛をより一層深めていく一助となるように、また、その歴史的遺産を記録して、将来の発展のために伝えるべき責務を持つとの理由から、神谷自治会長の小林 極氏が中心となって、神谷自治会の、神谷の遺跡と伝承を守る会により『神谷遺跡発掘調査記念誌』が平成21（2009）年12月に刊行されたことがあげられる。さらに、河東小学校の南西際に遺跡顕彰の石碑が自治会により建立され、平成22（2010）年10月31日に除幕式が執り行われた。

このような、地元自治会による記念誌の発刊や顕彰碑建立の例はめったにないことであり、遺跡を保護し、後世に伝えてゆく立場から、小林氏に感謝の意を表すると同時に、発掘調査の成果を公表して、



第２図　神谷自治会出版の記念誌

第３図　遺跡顕彰碑

地元に還元することの重要性をあらためて知らされた貴重な出来事となった。

なお、調査直後には神谷第２散布地の遺跡名は、遺構が検出されたことにより、宍粟市教育委員会と協議の結果、所在地の字名である「戒現行」の名を連ねて、神谷戒現行遺跡と改称された。

２．出土品整理

出土品整理事業は平成23・24（2011・2012）の２箇年にわたって実施した。

平成23（2011）年度は兵庫県立考古博物館が実施したが、平成24（2012）年度は兵庫県立考古博物館の埋蔵文化財調査部門が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に移ったため、その機関で実施したが、実施場所は兵庫県立考古博物館であった。

年度ごとの作業内容・担当者は以下のとおりである。

平成23（2011）年度　　実施機関：兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　整理保存課

作業内容：接合・補強、復元、実測・拓本

作業担当職員：山本　誠・深江英憲（作業進行管理）、岸本一宏（作業指示）

作業担当非常勤嘱託員等：眞子ふさ恵・島村順子・吉田優子・三好綾子・藤池かづさ・嶺岡美見・吉村あけみ・藤尾裕子・佐々木愛・平宮可奈子・上田沙耶香（接合・補強、復元）

栗山美奈・川村由紀・久保夏美（土器実測）、佐々木誓子（石器実測）

平成24（2012）年度　　実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部　整理保存課

作業内容：分析鑑定、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷

作業担当職員：篠宮　正・深江英憲（作業進行管理）、岸本一宏（作業指示・編集・原稿執筆）、久保弘幸（石器・石製品原稿執筆）

作業担当非常勤嘱託員：栗山美奈（図面補正、トレース、レイアウト）、榎真奈美（写真整理）

第２章　調査結果

第１節　調査区の概要と土層関係

１．調査区の概要

調査区はほぼ南北方向で幅4.2～4.7m、延長52mの長方形に近い形状で、調査面積は241㎡である。

調査区内の中央部には長さ９m以上、幅3.5m以上の大きな攪乱壙が南北に２基存在し、遺構を損壊していた。攪乱壙の深さは検出面から50㎝であるが、盛土層の下面から掘り込まれており、内部には土のほか圃場整備前に石垣として利用されていたと思われる大きな礫などが多く入っていた。また、調査区南部の東壁には上水道管が敷設されており、調査区内では最大幅1.5m、長さ約21mにわたって存在していた。この上水道管の掘り込みも遺構を破壊していたため､管をむき出して調査することは控えた。

本発掘調査の結果、調査区の中央部から南側にかけて弥生時代中期と古墳時代後期、調査区北部では中世前期の遺構および遺物を検出し、調査区全域の遺物包含層から土器が出土した。

これらの遺構は、上記のように、圃場整備の工事の際に掘削された攪乱や道路下に埋設された上水道管によって破壊されている部分が多く認められたものの、竪穴住居跡や溝・土壙といった遺構や、遺構内の大量の土器が遺存している部分も多く存在した。検出した遺構には竪穴住居跡や溝・土壙・柱穴などがあり、それらは時期的に弥生時代中期中葉（Ⅲ期）と古墳時代後期前半（６世紀中頃～後半）および平安時代末～鎌倉時代初頭（13世紀頃）の３期に分けることができる。

弥生時代の遺構は竪穴住居跡１棟のほか、土壙・溝がある。遺構から出土した土器はすべて弥生時代中期中葉にあたるⅢ期に限定されることから、それらの遺構も同時期であると判断される。古墳時代の遺構は、調査区南部で検出された方形竪穴住居跡２棟に限られ、13世紀頃にあたる時期の遺構は、調査区北端付近で検出された柱穴および調査区北東隅の溜り状遺構に限られる。柱穴および柱穴状遺構は10基程度検出されたが、調査区内では建物跡として組み合うものは認められず、調査区北端一帯に当該時期の掘立柱建物跡が存在していたことが窺える。柱穴内より若干の土器片が出土している。

２．土層関係

調査区は全域にわたって盛土層が80㎝～1.2mの厚さで堆積しており、その下面には旧耕土（第２層）や旧床土（第３層）が薄く残っている部分も認められるが、大半が削られている。圃場整備時点の工事によるものと思われる。第２・３層には若干の遺物を含んでいた。その下層（第５層）は遺構検出面で、各時期の遺構を同一面で検出した。ただし、北端部では砂質に近い第４層が中世の遺構検出面で、第５層は認められない。また、弥生・古墳時代の遺構は調査区中央部以南に存在し、その遺構面は旧揖保川の氾濫原のうち、礫が堆積したことによる微高地（第11層）上にあたることから、高所を利用して住居が営まれたことがわかる。層中に含まれる礫の大きさから、その微高地は東西に近い方向で細長いものと推定される。一方、調査区北半部では第６層から若干の土器が出土したものの、縄紋土器片以外は詳細時期が不明である。ただし、中世遺構が存在する部分は東側の谷からの堆積であることが土層断面観察から窺うことができ、弥生・古墳時代の遺構が立地する地盤とは成因を異にしていると判断できる。東側からの土砂堆積によって湿地でなくなったのは、平安時代末頃以降と推察される。

第２節　検出遺構

検出した遺構の時期は、弥生時代中期と古墳時代後期および平安時代末～鎌倉時代初頭の中世前期の３時期のものがある。主要遺構では、弥生時代は竪穴住居跡・土壙・溝があり、古墳時代は竪穴住居跡、中世前期は柱穴および土壙状落込みがある。以下、時代別に詳細を述べる。

１．弥生時代の遺構

（１）竪穴住居跡

弥生時代の竪穴住居跡は調査区南端で検出したＳＨ－１の１棟のみである。

①　ＳＨ－１　（図版３、巻頭写真図版２、写真図版３）

検出状況　調査区南端に位置し、住居跡北側の壁と中央土壙の一部を検出したが、東側は水道管の敷設により遺存しておらず、西および南側は調査区外に広がっている。

形状・規模　検出できた北側壁は約２ｍの長さにすぎないが、平面が弧状を呈することから円形の竪穴住居跡になるものと思われる。中央土壙を中心とすれば、直径７ｍ程度と推定できる。住居跡壁は上部が大きく削平を受けていたことから、最大15㎝程度の高さしか確認できなかった。

埋　　土　埋土は上部が大きく削平を受けていたため、黒褐色～極暗赤褐色の層が約13㎝の厚さで確認できたにすぎない。また、埋土上面は攪乱の底面となっており、凹凸が認められた。埋土からは小片の土器が出土したが、図示できたのは１の甕１点に限られる。

屋内施設　床面から柱穴数基と屋内溝１条、地床炉と思われる焼土部分を数箇所で検出した。また、住居跡のほぼ中央部と思われる位置で検出した土壙は、中央土壙と判断した。なお、壁はわずかに遺存し、床面も遺存していたにもかかわらず、周壁溝は確認できなかった。

柱　　穴　位置的に主柱穴と推定されるものにはＰ－ＡとＰ－Ｄがある。Ｐ－Ｄは壁からの距離が約80㎝であるが、Ｐ－Ａはそれよりも離れた位置であることから、主柱穴とは断定していない。Ｐ－ＡとＰ－Ｄの柱間は1.02ｍを測る。Ｐ－Ａは掘形径29㎝、柱痕径16㎝で、床面からの深さは50㎝である。Ｐ－Ｄの掘形は東西41㎝、南北30㎝の平面楕円形を呈し、柱痕は径22㎝で床面からの深さは33㎝を測る。

Ｐ－Ｆは掘形径29㎝、柱痕は径15㎝で、柱痕内に礫が落ち込んでいた。住居跡床面から底までの深さは39㎝。Ｐ－Ｅは径19㎝と小さな掘形で、柱痕も径14㎝と小さく、柱痕内には礫が認められた。Ｐ－Ｂの掘形は東西32㎝、南北22㎝の平面楕円形を呈し、柱痕は径18㎝で柱痕内には礫が存在した。床面から底までの深さは20㎝。Ｐ－Ｈの掘形も平面楕円形で、長径41㎝、短径31㎝を測る。柱痕は径20㎝の平面円形で、床面からの深さは35㎝である。Ｐ－Ｃは側溝内で検出した。掘形径23㎝、柱痕径14㎝で、検出面からの深さは34㎝である。遺物を図示できたのはＰ－Ａ・Ｂ・Ｈ出土分に限られる。

地床炉　床面には小規模のものも含めて５箇所で焼土が検出された。これらのうち長径50㎝程度のものは調査範囲内の中央部と東部で３箇所認められた。残りの２箇所は15～30㎝の小規模なものである。弥生時代中期の竪穴住居跡によくみられるように、地床炉が複数存在していたようである。

中央土壙　北西部が確認できた。最深部は調査範囲の南東隅部分である。床面からの深さは13㎝以上であるが、北東および南西部に平面円形の深い部分が認められる。遺存部上端の形状から平面円形とすれば、推定径は1.4ｍとなろう。土器片やサヌカイト剥片が多く出土したが、土器のみ図示した。

屋 内 溝　中央土壙とはつながらないが、住居跡中央付近から壁方向に弯曲してのびる小規模な溝を床面で検出した。幅18～23㎝、深さ７㎝程度で、埋土は5YR3/2の暗赤褐色細砂であった。

出 土 遺 物　出土遺物のうち図示できたのは、中央土壙埋土から出土した甕（２)･壺（６)･高坏（５)、柱穴出土の高坏（３・４)・底部（８)、床面出土の壺（７)、住居跡埋土出土の甕（１）である。

（２）土壙

弥生時代の土壙を検出したのは調査区中央部で、４基認められた。

①　ＳＸ－１　（図版14、写真図版６）

土壙のうち最も南で検出した。平面楕円形で、東部は水道管敷設のため調査できなかった。溝状遺構の可能性も残す。長さ1.5ｍ以上、幅84㎝で、検出面からの深さは21㎝であるが、水道管の下では36㎝の深さまで確認できた。土壙南西部で、底から約８㎝上部の第３層上面で甕片（33）が出土した。

②　ＳＸ－３　（図版５・６、写真図版５・６）

平面隅丸方形に近い形状で､検出面からの深さ15㎝で皿状を呈する浅い土壙である。南北規模は1.2ｍ、東西1.0ｍである。西部に偏って第１層下部より壺（83・84）や体部片、底部（85）が出土した。

③　ＳＸ－６　（図版５・６、巻頭写真図版３、写真図版４・６）

調査区中央部の西壁に接して存在した土壙である。平面楕円形で、南北3.60ｍ、東西2.08ｍの規模である。重複するＳＤ－１より新しい。検出面からの最大深は61㎝で、法面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平らである。埋土の上部で多量の土器と石製品が出土した。それらは土壙の東端部にまでは及んでおらず､土器群上面の高さは､西端部では検出面から深さ９㎝､土器群東端では検出面から20㎝ほど下がっており、東側が低く傾斜している。これら状況と土器片の混在状況および被熱を受けて破片となった石製品の状態から、土器や石製品は土壙の西側から捨てられたものであることが推定できる。

出土土器には壺・甕・高坏などがあり、73点（９～81）を図示した。出土状況から一括性が高い資料と判断される。石製品は３点（Ｓ１～Ｓ３）を示した。

（３）溝

溝は推定も含め３条検出した。いずれも調査区中央部である。

①　ＳＤ－１　（図版５・６、写真図版５・６）

南北方向で、北側がやや東に振る方向の溝状遺構で、北および南側は攪乱により、中央部はＳＸ－６と重複しているため遺存していない。検出面での幅71～120㎝で、北側が幅広くなっている。深さは19㎝、底部断面は緩いカーブを描く。全体を検出できたのは長さ5.25ｍであるが、北部の東岸が辛うじて遺存しており、総延長6.8ｍまで検出できた。北端の底は南端よりも14㎝ほど低くなっていることから、水は北流していた可能性が高い。

中央部で集中して壺口縁部（86）や体部片（87）などが出土した。

②　ＳＤ－２　（図版５・６、巻頭写真図版３、写真図版４・６）

調査区中央部の東寄りで長さ4.2ｍにわたって検出した南北方向の溝状遺構である。南端は攪乱により遺存しておらず、長さは不明である。検出面での最大幅60㎝、最深部分の深さは53㎝で、底は南北方向で水平に近いが、北端は急に終息し、かなりの傾斜をもってたちあがる。横断面はＵ字形を呈し、底は丸みをもっている。溝の底から第４層にかけて10～20㎝大の亜角～亜円礫が東岸に偏って列状に落ち

込んだ状況で検出され、その上部には北部を中心に土器片が集中的に認められた。

本溝が直線的であり、溝横断面の形状や北側終息部分の形状および後述するＳＤ－３が本溝と直交方向にあることから、ＳＤ－３との空間部分を陸橋部として、方形周溝墓の西端部分と考えることも不可能ではない。そうした場合、溝内の礫は墳丘斜面に貼られていたものが溝内に転落したと推定することも可能であり、中国地方でよくみられる貼石をもつ墓であったことになるが、時期的には若干古くなる。東側の状況が不明であることや、溝法面の傾斜角は西側が緩くなっている点が逆方向であることから断定できないが、貼石をもつ方形周溝墓の西側部分である可能性を指摘しておきたい。

出土遺物には壺・甕や石鏃などがあり、土器９点（88～96）、石器４点（Ｓ４～Ｓ７）を図示した。

③　ＳＤ－３　（図版５、巻頭写真図版２、写真図版２）

検出したのは西端部分に限られ、東側調査区外に続いており、北側が遺存していないことから溝状遺構とは判断しがたいが、西端部の形状がＳＤ－２に近いことから溝である可能性は否定できない。ＳＤ－２とともに方形周溝墓の一部分である可能性もあろう。

本溝からは遺物は出土しなかった。

２．古墳時代の遺構

今回の調査で検出した古墳時代の遺構は、竪穴住居跡２棟と竪穴住居跡に関連する土壙２基である。

（１）竪穴住居跡

①　ＳＨ－２　（図版16・17、巻頭写真図版４、写真図版７・８）

検出状況　調査区南部北寄りに位置し、南北側の壁を検出したが、東西壁は調査区内では確認できなかった。ただし、西側に竈を確認したことから、壁に近い部分まで調査できた。

形状・規模　南北壁が直線であることから、平面矩形を呈するものと判断できるが、隅部分の形状は不明である。南北壁は東西方向に近く、後述のＳＨ－４と同一方向となっている。南北規模は約4.3m、東西は3.4m以上で、５m前後と推定しており、東西に若干長い。壁の高さは西側断面で約25cmを測る。

埋　　土　埋土は大きく２層に分けることができるが、中央部の床面上には黒褐色で炭化物を含む薄い層が認められた。一方、西部の床面では竈周囲に硬化面が認められ、貼床（第11層）と判断している。床面は平坦でほぼ水平となっている。また、床面下に埋立層（第12・14層）が認められたことから、住居構築の際に床面よりも深く掘り下げたのち、埋め立てることによって床面を構築していたと判断できる。この状況はＳＨ－４でさらに明確に看取できた。

屋内施設　西側の主柱穴２基と屋内土壙を床面で検出し、竈を西端部断面で確認した。

貼床　貼床は西部の竈付近でのみ確認できた。竈の南北側約80cmの幅でそれぞれ確認できたが、竈東側での広がりは確認できなかった。貼床土は7.5YR3/2の黒褐色を呈するが、硬化部分の可能性も残す。

柱穴　西部で主柱穴を２基検出した。北側は掘形径32cm、柱痕は径17cmの円形である。床面から41cm掘り込まれていた。北壁から約1.3m離れている。南側は掘形径45cm、柱痕径は27cmで、柱穴の深さは41cmである。南壁からは約0.9mの位置にある。南北柱間は1.68mで、掘形から弥生壺（108）が出土した。

竈　竈は西側調査区壁断面で確認し、竈燃焼部は住居跡南北壁のちょうど中央に位置している。北側袖部の立ち上がりが存在していたが、南側袖部は断面・平面とも確認できなかった。平面的にはかろうじて赤化した燃焼部が確認できたが、煙道部は調査区外である。竈の南北幅は90cm程度と推定される。

燃焼部から袖部までは20㎝の高さが遺存しており、竈の掻き出し口付近には炭化物の集積と炭化材２点が認められた。炭化材は約60㎝の距離をおいて西側の大きな破片と東側の小さなものがある。どちらも放射性炭素年代測定をおこなった。

土壙　調査部分の東端で土壙の西側部分を検出した。土壙は南北壁から同一距離の中央に位置している。南北65㎝以上、東西20㎝以上で、深さは28㎝以上である。埋土から須恵器坏（101）が出土した。

出土遺物　土壙内の坏のほか、床面南西部から須恵器坏（97・102）と敲石（Ｓ10）、中央部では須恵器・土師器の甕（105・107）と台石？（Ｓ９）、竈北側の北西部床面上から須恵器の坏（98・100）と壺（104）および甕口縁部片（106）、北壁ぎわに台石（Ｓ８）が遺存しており、埋土から須恵器坏（99・103）と石鏃（Ｓ11）が出土している。

②　ＳＨ－４　（図版19、巻頭写真図版５、写真図版９）

検出状況　調査区中央南部に位置し、南北側の壁の一部を検出したが、東側壁は攪乱壙により破壊され、西側壁は調査区内では確認できなかった。また、南北壁の外側で土壙状の掘り込みを検出した。

形状・規模　南北壁が直線であることから、平面矩形を呈するものと判断できるが、隅部分の形状は不明である。南北壁は先述のＳＨ－２と同一方向で、東西方向に近い。南北規模は約4.4m、東西は1.4m以上である。壁の高さは西側断面で24㎝を測るが、壁は傾斜しており、垂直ではない。このことは後述する本住居跡の構築法によるところが大きいものと思われる。

埋　　土　埋土は５層が認められたが、ほぼ全体におよんでいるのは第３・４層の２層に限られる。床面には緩やかな凹凸がある。また、床面下に厚い埋立層が認められた。

屋内施設　柱穴・竈・貼床のいずれも検出されなかったが、床面には多くの遺物が遺存していた。

屋外施設　厳密には屋外施設ではないが、本住居構築の際と判断しうる土壙状掘り込みを南北両側で検出した。土壙の詳細は別項に譲るが、南側のものは検出時にＳＸ－２と呼称し、北側は同様にＳＸ－７と呼称したものの南端の一部である。ともに外形は弧状を呈し、法面は垂直に近い。底は緩やかな凹凸があるものの、平坦に近く、両土壙底はＳＸ－７が若干深いものの、住居跡中央部でつながっている。土壙埋土は大きく３・４層が認められた。両土壙が住居跡の外側にあり、土壙底の高さがほぼ同じであることや土壙壁と住居跡壁との間隔や外形が似ていることなどから、本住居跡を構築する際にあらかじめ広く深く掘り込み、その後埋め立てをおこなうことにより、住居の床と壁を構築したものと推定している。したがって、住居跡の壁が傾斜しているのは、住居廃絶後に崩れやすい埋立層が崩落したためであると想定される。ただし、土壙底から床面までの高さの差が20㎝以上とかなり厚く埋め立てているのであるが、深く掘り込み、厚く埋め立てる必要性は、現状の地盤の強度や保湿度からは認められない。なお、竪穴住居構築時に掘り込みをおこなった後、床面のみを埋め立てる方法は、朝来市粟鹿遺跡の古墳時代住居跡で行われていることを確認（岸本編 2007）している。

出土遺物　床面中央部で須恵器坏（109・110・113）と土師器甕（116）、北部の床面で小形甕（120）が遺存していた。（111）の須恵器坏蓋は床面中央部出土の可能性が高く、須恵器坏身（112）は出土層位・位置が不明である。埋土からは土師器甕口縁部（114・115・117～119）、床面に近い埋土から石鏃（Ｓ13）が出土している。なお、ＳＸ－２・７からは弥生土器（121～123）や礫（Ｓ12）が出土している。

（岸本一宏編 2007『粟鹿遺跡』兵庫県文化財調査報告 第323冊　兵庫県教育委員会）

（２）土壙

①　ＳＸ－２　（図版19、巻頭写真図版５、写真図版９）

ＳＨ－４の南側掘形と判断した土壙である。南側上端の外形は弧状を呈し、東側はＳＨ－４に近くなっていることからＳＨ－４の東側壁が近いことを示しているものと思われる。東側は攪乱により破壊され、西側は調査区壁の外に続き、東西長1.4mを検出した。法面の傾斜は急で、西側壁での深さは50cmと深い。底面はほぼ平らでＳＸ－７底とほぼ同一高で連続している。弥生土器底部（121）が出土した。

②　ＳＸ－７　（図版14・19、巻頭写真図版５、写真図版９）

本土壙はＳＨ－４の北側に位置し、土壙南側の一部がＳＨ－４の掘形と判断している。土壙の東肩の大部分がかろうじて遺存しており、西側は調査区壁まででおさまるようである。溝状遺構の一部かもしれない。検出できた南北長は2.55m、東西は0.96m以下で、検出面からの深さは20cmである。ＳＨ－４の北側壁付近には一段深くなる部分があり、住居跡北側壁直下では深さ約50cmを測る。埋土から弥生土器小片（122・123）が出土している。

３．中世前期の遺構

平安時代末～鎌倉時代初頭と推定した遺構は調査区北部に限られ、柱穴12箇所と土壙状落込みがある。

（１）柱穴（図版21、写真図版10）

不規則に存在するようであり、建物跡として組み合うものは確認できなかった。掘形はいずれも平面円形で、確認できた柱痕も平面円形である。Ｐ－１は掘形径32cm、柱痕径21cmで、検出面からの深さは18cmである。柱痕から須恵器埦の小片が出土した。Ｐ－２は掘形径25cm、柱痕径14cmで、検出面からの深さは21cmである。Ｐ－３は掘形径28cm、柱痕径17cmで、検出面からの深さは９cmである。柱痕部分には15cmの礫が入っていた。Ｐ－４では掘形から弥生土器細片と角釘先端と思われる小片および土師器皿の小片が出土した。Ｐ－６は掘形径24cm、柱痕径16cmで、検出面からの深さは28cmである。Ｐ－８は掘形径30cmで、柱痕部分から平高台の須恵器埦底部片と土師器皿小片、掘形から須恵器埦の破片が出土している。Ｐ－９は掘形径32cm、柱痕径15cmで、上面から須恵器埦の破片が出土し、柱痕からも須恵器埦の破片が出土している。検出面からの深さは25cmである。

（２）土壙状落込み（図版21、写真図版10）

①　土壙状落込み

調査区北東隅で検出した。北東側は調査区外にひろがっている。南北長2.1m以上、東西1.3m以上の規模である。検出面からの最大深は19cmで、東寄り部分が一段深くなっている。埋土は灰褐色土で、埋土から須恵器埦（124）が出土した。土壙の性格は不明である。

第３章　出土遺物

第１節　遺構出土遺物

１．弥生時代遺構出土遺物

今回の調査で出土遺物が図示できた弥生時代遺構は、竪穴住居跡１棟、土壙３基および溝２条である。

（１）竪穴住居跡出土遺物

検出した弥生時代の竪穴住居跡はＳＨ－１に限られ、そこから出土した遺物を図示した。また、古墳時代住居跡のＳＨ－２・４からも弥生土器が出土しているが、それらについては古墳時代の竪穴住居跡出土土器の項で記述している。

①　ＳＨ－１出土土器　（図版４、写真図版11）

ＳＨ－１から出土した土器には甕・壺・高坏などがある。これらは住居跡埋土・中央土壙・柱穴から出土したもので、いずれも中期中頃におさまる。住居の廃絶以降に堆積したものと判断できよう。

甕

１･２はともに「く」字形を呈する甕で、口縁端部を上方に少し拡張しているが、１は玉縁状に近い。１は口径16.6㎝を測り、胎土に金雲母を含むが、外面は橙色系、内面は黄色系の色調を呈する。埋土出土である。２は中央土壙出土で、口径は16.0㎝。内面はハケ調整のようである。

高坏

３・４は水平口縁の高坏で、３は口縁端部での径が26.0㎝である。口縁端部には刻目を施している。坏部はヘラミガキ調整で、残存高は7.4㎝である。Ｐ－Ｂ埋土出土。４は口縁部の細片で、端面には斜め方向の刻目の上に径5.5㎜の円形浮文を貼り付けており、４個連続している状況が残存している。Ｐ－Ｈの柱痕内から出土している。

５は中央土壙出土の高坏脚部である。外反しながら下外方に緩やかにのびる脚部で、端部は拡張しない。残存高は8.0㎝である。外面はハケのちヘラミガキ、内面上部はヘラケズリで下部はヨコハケのちヨコナデである。脚端径は13.0㎝である。

壺

６･７は壺体部の破片で、６は櫛描波状文の下側に径７㎜の竹管文を連続して施しているようである。文様間にはヘラミガキが残る。中央土壙から出土した。７は床面直上出土の破片で、櫛描波状文間に直線文が確認できる。いずれも条線が11条であることから、同一原体で施したものと思われる。

底部

８はＰ－Ａの埋土出土で、底径7.2㎝の平底である。外面にはヘラミガキ痕が残る。

（２）土壙出土遺物

今回の調査で検出した弥生時代土壙のうち、ＳＸ－１・３・６から出土した遺物を図示した。それらのうち、ＳＸ－６出土土器は73点を図示することができ、出土遺構のなかでは圧倒的に多量の土器が出土している。

①　ＳＸ－６出土遺物

多量の弥生土器や石器・石製品が出土している。

Ａ．土器

ＳＸ－６出土土器には壺・甕・高坏などの器種があり、壺には直口壺・広口壺などの型式や壺体部といった部分があり、ほかに壺または甕の底部も多数認められる。これらはいずれも弥生時代中期中頃に属するものである。

壺　（図版７～10、巻頭写真図版６、写真図版11～15）

直口壺　９～17は体部から外反した後外上方に直線的に短くのびる口縁部を有する。口縁端部は内外方や外方に少し拡張するものが多くを占める。

口縁部の文様では、外面に３条の指頭圧痕文突帯を貼り付け、口縁端部外側に刻目文を施す９・10のほか、断面三角形の突帯を４～６条貼り付けて上下端の突帯以外と口縁端部外側に刻目を加えたうえ、２条一対の棒状浮文を数か所に加飾した11・12や、口縁端部外側にのみ刻目を施すが断面三角形の突帯部分には刻目も棒状浮文も加えない13・14・17および、刻目を全く施さずに棒状浮文を突帯に貼り付けるのみの15と、断面三角形の突帯のみ貼り付ける16がある。

突帯の条数は１条（17）、２条以上（13）、３条（９・10・14～16）、４条（12）、７条（11）とバリエーションに富むが、ここでは３条が最も比率が高い。口径は13.8㎝（17）から22.7㎝（11）まであるが、13.8㎝～15.3㎝の15㎝前後（９・10・13・14・16・17）が最も多い。

体部が遺存しているもの（11・14）をみると、２点とも頸部に櫛描直線文を描いており、下方へ櫛描波状文・櫛描直線文と続くが、その下部は櫛描斜格子文（11）や櫛描波状文（14）と異なる。11では円形浮文も貼り付けている。

広口短頸壺　23は体部から「く」字状に外折して、外上方に短くのびる口縁部をもつものである。口縁端部は内外に拡張する。頸部はほとんど認められない。口径16.0㎝、体部最大径31.5㎝を測る。口縁端面と体部最大径部分の直上に板状工具による斜行する刺突文を刻目状に施している。

広口壺　27～36は頸部から大きく外反して外上方にのびる広口壺の口縁部である。

このうち、27～30は口縁内突帯を有するもので、30以外は刻目を密に加えている。27の突帯は２条遺存しているが、29・30では１条に限られる。29・30の口縁端部は垂下口縁のように下外方まで大きく外反しており、端部に刻目文を斜行ぎみに施している。29は明瞭な稜線によりかろうじて端面を造出しているが、30には明瞭な稜線が認められず、垂下部外面下端に文様を施している。また、29の突帯下には径約３㎜で２個一対の紐通し孔を内方から穿っている。口縁端部を欠失する27・28の口縁端部も大きく外反するものと思われる。この２点および30は頸部まで遺存しており、断面三角形の貼付突帯２条が確認できる。なお、29の器厚は薄く、やや硬質で外表面の遺存状況も比較的良好である。29・30の口径はそれぞれ13.7㎝・12.7㎝で、口縁端部での径はそれぞれ16.0㎝・14.7㎝である。

31・33～35は体部から「く」字状に外上方へ直線的にのびたのち、大きく外反して水平あるいは下方にまでのびる口縁部を有するものである。32は口縁端部付近のみの破片であるが同様の形態であろう。31は口縁端部をほとんど拡張しないが、32・33は主として下方に、34・35では上下方向にそれぞれ端部を拡張している。端面にはヘラ状工具による斜行ぎみの刻目文を密に施しており、32・34では刻目の上に３個一組の円形浮文をそれぞれ６方向・５方向に貼り付けている。また、33では口縁端部内面に２個一単位の円形浮文を５方向に貼り付けている。35では口縁端面の斜行刻目は上下に方向を変えて羽状に

施しており、頸部に指頭圧痕文突帯を１条貼り付けている。31～35の口縁端部での口径は順に14.5㎝・15.2㎝・14.0㎝・14.4㎝・21.1㎝を測る。なお、33・34の肩部には櫛描直線文の一部が遺存しており、34は茶褐色に近い色調を呈している。

36の口縁部は31～35と形態的に似るが、外反程度が少ない点でやや異なり、口縁端部はほとんど拡張せず端面に文様も施さない。頸部にはタテハケのち突帯を貼り付けて指頭圧痕文を加えている。

体部　18～22・24～26は壺体部で、37～39は壺体部の文様部分の破片である。体部の形状は丸みのある算盤玉形を呈する19～21や、その可能性がある25のほか、丸い体部の24がある。体部の文様では、19・21・37～39が櫛描直線文と櫛描波状文を交互にめぐらし上方から施文している。体部最大径部分にあたる最下段の直線文下には、櫛原体による斜行列点文を密にめぐらす19・20・37・38や、貝殻状の斜行刺突文を密にめぐらす39のほか、板状工具による斜行刺突文を刻目状に施す21がある。斜行列点文を施す19・20では、文様の上に径1.0㎝程度の円形浮文を３個一単位で貼り付けている。また、18のように体部上半に櫛描で直線文・波状文・斜格子文・直線文・斜格子文を上から順に施すものや、20のように最下直線文の上が櫛描斜格子文となっているものも存在する。なお、器表剥離が著しい26では、刺突文の上側に櫛描文があったことは否めないが、25では刺突文は認められない。19～21・25・26の体部最大径はそれぞれ、25.8㎝・31.3㎝・38.3㎝・37.5㎝・41.8㎝である。外面の調整は、施文前は縦方向のハケ、施文後にはヘラミガキを体部下半の上半では横方向、下半では縦方向に施している。なお。横方向のヘラミガキを施す範囲はかなり下方まで及んでいる。内面調整はすべてハケで、18・20のようにイタナデ状に見えるものもある。

櫛描文様を施さない22は体部が丸く、最大径27.0㎝を測る。外面はかなり下方まで横方向のヘラミガキを施している。内面は下方をヘラケズリしており、本例以外では19のわずかな部分で確認できるのみである。24は体部の丸みが強い丸い大型の壺で、頸部に指頭圧痕文突帯を施す以外は加飾せず、外面にはタテハケのちヘラミガキを多方向に施している。体部最大径は46.4㎝である。

高坏　（図版10、巻頭写真図版６、写真図版15・16）

40・41は水平口縁の高坏坏部で、42・43は高坏と思われる脚部である。40は口縁端部での径25.2㎝を測り、口縁端部をわずかに上下に拡張しているが、文様は施していない。坏部との境の内面にはやや内上方を向いた１条の突帯を有する。その部分での口径は18.8㎝となっている。坏部は直線的で、内面はハケ調整となっているが、ごく一部にヘラミガキが残る。41は口縁端面に刻目を斜格子状に密に施し、２個一組の円形浮文を貼り付けている。口縁端部での径は24.0㎝で、端面の幅は７㎜である。口縁部と坏部の境内面は内上方向の突帯状になっているが、坏部上端の可能性が高い。その部分での口径は17.5㎝である。坏部は上部が大きく内弯する。

42は少し肥厚させた脚端部上端に刻目を密に施し、鉢類の脚部である可能性を残す。端部の拡張はおこなっていないが、端面上部には幅１㎜弱の凹線状を呈する部分がある。脚端部径は13.0㎝である。外面はヘラミガキ、内面はナデやヨコナデである。43は脚端面が水平に近いもので、脚端径は13.2㎝である。端部は全く肥厚・拡張させていない。内面上部にはシボリ目が確認できる。

甕　（図版11、巻頭写真図版６、写真図版16・17）

44・46～56は甕の上半部ないし口縁部である。45のみほぼ完形に接合できた。45は口径17.1㎝、器高28.3㎝、底径6.3㎝、体部最大径は19.4㎝で、細身の観がある。体部外面はハケのち下半部にヘラミガキを加えている。内面はハケである。体部外面中央部は被熱により表面が傷むとともに赤変している。口

縁端部はわずかに内側につまみ上げたようになっているが、44・46の口縁端部も同様の形態であり、44のみ刻目を密に施している。44は口径14.6㎝、46は口径15.8㎝である。46の体部外面には煤が付着する。

47・48は口縁端部を上方につまみ上げたようになっており、端部はやや尖る。口縁部の器厚は薄い。47・48の口径は17.1㎝・17.2㎝を測る。48の体部最大径は19.5㎝で、どちらも体部外面に煤が付着する。

49・50は口縁端部内面を若干窪ませることにより端部が強調されたものである。口径は16.9㎝・17.9㎝である。50の体部外面全体には煤が付着している。49の体部最大径は18.2㎝である。

51は口縁端部を主に上方向に若干肥厚させたもので、口径は17.4㎝である。体部はやや肩が張る。

52～54は口縁部の器厚が薄く、端部を上方に拡張したものである。52は口径17.9㎝で、体部最大径は19.5㎝である。53はＳＤ－１・２出土土器と接合した。口径25.4㎝と大型である。54も口径24.0㎝と大型で、ＳＤ－２やＳＸ－３出土土器と接合した。

55は口縁端部を若干肥厚させ、上方に拡張するもので、口径は18.8㎝である。ＳＤ－１出土土器と接合した。56の口縁端部も55と同様の形態であるが、口縁部および体部の傾きが異なる。56が小片のため傾きが不正確となった可能性がある。56の口径は22.9㎝を測る。

底部　（図版12、写真図版16～18）

底部は57～81の25点を図示した。いずれも平底で、中央部が若干窪むものも認められる。外面調整は、確認できたものすべて縦方向のヘラミガキである。

57～61は10㎝以上の大きく平らな底部から直線的に大きく開いて体部へと続くもので、内面調整が判明している57・58はイタナデである。その他はヘラケズリの可能性があるが、不明である。形態および内面調整では壺の可能性があるが、断定はできない。57～61の底径は、順に10.7㎝・11.0㎝・13.5㎝・11.5㎝・12.5㎝である。

62～71は底面が緩やかな丸みをもって若干上げ底となるものである。これらのうち、62～67は外反気味に大きく開いて体部へと続くもので、68～71は外反気味に外上方に小さく開くものである。62～67の底径は、順に7.4㎝・8.6㎝・7.6㎝・6.8㎝・9.4㎝・9.9㎝を測る。内面の調整は63・67がハケ、62・64がヘラケズリで、65・66は確定できない。62～67は形態的には壺としたいところである。68～71の底径は、順に7.8㎝・6.3㎝・6.6㎝・6.2㎝である。68～71の内面調整はすべてヘラケズリであり、形態的にも甕の可能性が高いと思われる。ただし、壺でも19や22のように内面底部をヘラケズリしているものがあることから、確定はできない。なお、62はＳＤ－２、64はＳＤ－１出土土器と接合している。

72～76は小さな平底から外反気味に外上方に小さく開いて体部へと続くもので、内面の調整はすべてヘラケズリである。形態および内面調整から甕と判断しておきたい。底径は、順に5.6㎝・6.3㎝・7.0㎝・6.0㎝・7.8㎝である。

77～79も小さな平底から外反気味に外上方に開くが、72～76よりも開く角度は大きい。内面の調整はすべてハケであることから、壺の可能性があるが、判断できない。底径は、順に6.1㎝・5.9㎝・6.0㎝である。なお、79はＳＤ－２出土土器と接合している。

80は大きな平底から外上方に開いて直線的にのびるもので、形態的に57～61に近いが、それらよりも開く角度はやや小さい。内面調整は不明である。底径が11.6㎝と大きいことから壺と推定している。

81は径11.3㎝のやや大きな平底から外上方に外反気味にのびて体部となるもので、開く角度は小さい。内面はヘラケズリ調整で、甕の可能性を考えている。なお、この土器はＳＤ－１出土土器と接合した。

Ｂ．石製品（図版13、写真図版14）

ＳＸ－６出土石製品は３点を図示した。石材および計測値については、文末（p.24）の表に一括する。

削器

Ｓ１は、剝離軸付近が厚く、縁辺では急激に厚みを減じる剝片を素材とした削器である。石材はサヌカイトとは呼べないやや粗質の安山岩で、器表面に残る自然面の性状から、河川で水磨された転礫と判断される。風化は進行している。自然面を打面として、ほぼ90°の剝離角を見せ、主要剝離面の形成と同時に打撃点を中心にほぼ２分割された状態に破砕している。背面側は２枚のネガティブな剝離面と、自然面で構成されるが、剝離面はいずれも主要剝離面と同じ打面が打撃されたものと思われる。

背面末端部に剝離痕が連続し、弧状の刃部を作出することから、削器と判断した。刃部の縁辺角は60°前後を測る。なお、主要剝離面側の打面直下にも、粗い剝離が並ぶが、仔細に観察するとこれらは打撃点が明瞭ではないことから、素材剝片剝離時に生じた割れと思われる。ＳＸ－６の検出時に出土した。

台石・石皿

Ｓ２は花崗岩の亜円礫を用いた石皿ないしは砥石である。図化面の中央付近が僅かに凹み、他の部位と比較して、明らかに滑らかな状態となっている。裏面は破砕面であり、本資料自体が４分割された状態で出土したものが接合している。器表面の一部に黒ずみが見られることから、熱破砕の可能性がある。

Ｓ３は、図化面が緩やかな凸面、裏面がほぼ平坦な形状を見せる、ごく大型の花崗岩の河川礫である。図化面側は、裏面と比較して明らかに滑らかであるが、その他に顕著な使用痕は見当たらない。台石あるいは石皿のような機能を目的に、遺跡内に持ち込まれた資料と推量する。

②　ＳＸ－１出土土器　（図版14、写真図版20）

本土壙出土土器は南西部の底付近から出土した甕１点を図示できたにとどまる。

甕

82は、ＳＸ－６出土の49・50のように口縁端部内面を若干窪ませることにより端部が強調されたものである。口径17.6㎝を測り、体部内面はイタナデ調整のようである。

③　ＳＸ－３出土土器　（図版15、写真図版19・20）

本土壙からは比較的多くの土器が出土したが、ＳＸ－６出土土器と接合したものはＳＸ－６出土土器に含んで既述している。ここで図示できたのは壺の口縁部・体部・底部の各１点である。

壺

83は下方に拡張した口縁端部の細片で、２点あるが接合しない。端面には径約1.4㎝の円形浮文を貼り付け、上端に刻目を密に施している。口縁内面の外端には櫛描の扇形文を施すが、密には認められない。

84は体部上半で、２帯の櫛描直線文間に櫛描波状文が施文されており、さらに交互にめぐらしているものと思われる。

85は径9.3㎝の平底底部で、外面はヘラミガキ調整である。壺とは断定できないが、可能性は高い。

（３）溝出土遺物

遺物が出土した弥生時代の溝はＳＤ－１とＳＤ－２があり、ＳＤ－１では少量の土器、ＳＤ－２では比較的多くの土器と石器がある。

①　ＳＤ－１出土土器　（図版15、写真図版19・20）

ＳＸ－６に接する部分の北側で出土した壺片を２点図示した。ただし、ＳＸ－６出土土器と接合した

ものについてはＳＸ－６の項で報告した。

壺

86は口縁部片で、35と同じく口縁端面に斜行刻目を上下２段に方向を違えて羽状に施すが、35のようには口縁端部を拡張していない。口径は31.2㎝と大きい。

87は体部上半の破片で、２帯の櫛描波状文間に櫛描直線文を描いている。これらは交互に施されたものであろう。

②　ＳＤ－２出土遺物

ＳＤ－２から出土した遺物のうち、土器９点と石器４点を図示した。なお、ＳＸ－６出土土器と接合した土器については、ＳＸ－６で既述している。

Ａ．土器（図版15、巻頭写真図版６、写真図版19・20）

本土壙出土土器で図示できたのは壺口縁部５点と壺体部１点のほか、甕１点および底部２点である。

壺

88～92は壺口縁部である。これらは口縁部が大きく開く広口の88・89、あまり大きく開かない広口で頸部が短い90・91、外上方に直線的に開く直口の92に大きく分けることができる。

88・89の頸部から大きく外反する口縁部は下外方にまでおよぶ。88の口縁端部での径は18.6㎝で、口縁部は直線的に短くのびて端部に至り、端部は肥厚や拡張はしていない。口縁端部での径は14.4㎝である。口縁端面の上部には左下がり、下部には垂直方向の刻目をそれぞれ密に施し、羽状を呈している。断面三角形の口縁内突帯は２条貼り付けて、上部に刻目を密に施している。頸部には断面三角形の突帯を貼り付けており、２条確認できる。焼成および遺存状況は良好である。89は口縁端部付近の小片である。口縁端部は若干拡張し、端面には刻目文を格子状に密に施している。口縁内突帯は１条確認でき、上端に刻目を加えている。口縁端部での径は27.0㎝となる。

90は体部から上方に折れ曲がった短い頸部から外折して水平な口縁部となり、端部は丸みをもたせている。口径10.9㎝で、頸部から口縁部にかけての内面には黒褐色の煤状の付着物がみられ、肩部は二次被熱により割れたようにみえる。頸部外面下半から肩部にかけてはハケ調整で、肩部内面もハケである。91の口縁部は頸部から大きく外反し、下外方におよぶ。口縁端部は上下に拡張し、端面は無文である。口縁端部での外径は10.8㎝である。

92は外面に断面三角形の突帯を４条以上貼り付け、さらにその上に縦方向の棒状浮文を貼り付けており、２条遺存していることから、全体では11条貼り付けていると推定される。口縁端部は内方に拡張している。端部の刻目の有無は器表の傷みのため不明である。口径は18.0㎝を測る。

93は文様を施した体部中央部分の破片で、体部最大径28.9㎝である。外面の櫛描文様は上から斜格子文、直線文、斜行刺突文で、上から順に施している。直線文のすぐ上には径約9.0㎜の円形浮文を３個一組で貼り付けている。また、斜行刺突文は半截竹管状の原体で施文しているようである。

甕

94の口縁部は上方に少し拡張し、端面は外傾する。小片であるが、口径は19.2㎝を測る。口縁部の器厚は体部のそれに較べて薄くなっている。胎土に金雲母片を含むが微量で、胎土の色調は黄橙色に近い。

底部

95は径11.4㎝の大きな底部から外反気味に外上方にのびて体部となる。外面は縦方向のヘラミガキ調整であるが、内面は不明である。壺底部の可能性がある。

96は器表の傷みが激しく、底径は9.9㎝を測る。残存部分全体が被熱により赤変している。器種は不明である。

B．石器（図版15、写真図版25）

本土壙出土石器で図示できたのは石鏃３点および楔形石器１点である。石材および計測値については、文末（p.24）の第２表に一括する。

石鏃

石鏃には凹基式のＳ４、平基式のＳ５・Ｓ６の３点がある。

Ｓ４は、凹基無茎式石鏃である。基部の抉りは三角形を呈し、器長の40%程度の深さを見せる。脚端部は丸みをおびる。風化がやや進行している。

Ｓ５は、両側縁が膨らみをもつ、平基無茎式石鏃である。二次加工は表裏ともに縁辺部のみにとどまり、中央には素材剥片上の面をとどめている。また、基部は片面のみに下降が施される。風化が進行している。

Ｓ６は両側縁・基部ともに膨らみをもつ。Ｓ５同様、二次加工は表裏ともに縁辺部にとどまる。風化が進行している。

楔形石器

楔形石器はＳ７の１点に限られる。

Ｓ７は、剥片を素材としており、その相対する２辺から剥離をおこなっているが、図下縁側に弱い潰れが認められる。左図左側面は折れ面である。風化は浅い。

２．古墳時代遺構出土遺物

古墳時代の遺構のうち、遺物が出土したのは竪穴住居跡に限られる。

（１）竪穴住居跡出土遺物

古墳時代の竪穴住居跡２棟（ＳＨ－２・４）のうち、どちらの住居跡からも遺物が出土している。

①　ＳＨ－２出土遺物　（図版18、巻頭写真図版５、写真図版20～22・25）

ＳＨ－２出土遺物には須恵器・土師器のほか、石器類および弥生土器がある。

A．須恵器

ＳＨ－２出土須恵器には坏身・壺・甕があり、10点を図示した。

坏身

97～103の７点が出土し、それらを図示した。97は南部の床面出土の完形品で、口径13.7㎝、器高4.7㎝である。口縁端部はわずかではあるが、焼成後に削られたようになっている。全体に器壁が厚く、特に立ち上がり部が顕著である。ＴＫ10型式期であろう。98は北西部の床面出土で、約1/2の破片である。口径13.1㎝、器高5.2㎝で、全体的に器壁が薄くシャープな感がある。ＴＫ10型式期である。99は口径13.8㎝を測り、埋土上面から出土したものである。立ち上がり部は比較的短いようであるが、ＴＫ10型式期におさまるものと思われる。100は床面北部から出土した小片である。口径は11.4㎝で、ＴＫ10型式期であろう。101は小片であるが、西壁際と東部の土壙から出土したものが接合した。口径12.0㎝で、ＴＫ10型式期であろう。一部に自然釉が付着しており、受部上面には蓋を被せて焼成した痕跡が残る。

102は南部の床面直上から出土したもので、口径14.2cm、器高4.9cmとやや大きい。内面の中央に当て具痕を残す。ＴＫ10型式期と思われる。103は埋土出土の完形品である。口径14.0cm、器高4.3cmで、立ち上がり部は外反気味に内上方に短くのび、ＴＫ10型式期～ＭＴ85型式併行期と判断される。全体に自然釉が付着し、受部上端には蓋を被せて焼成した痕跡を残す。

壺

104は北西隅の調査区壁面から出土したもので、口縁部の2/3を欠損する以外は完形である。口径12.1cm、器高17.8cm、腹径18.1cmを測る。口縁端部はわずかに外方にひきのばすが、肥厚はさせない。体部外面には格子状にみえるタタキ目が残り、体部中央部にカキ目を施している。器壁が厚い土器である。

甕

105・106は甕口縁部である。105は口径23.2cmで、口縁端部の下部に粘土を貼り付けるようにして拡張する。中央部の床面直上出土であるが、体部は遺存していなかった。表面には自然釉が付着する。106は北西部の床面直上出土で、105と似た口縁端部の形状を示す。口径は20.8cm、やや軟質である。

Ｂ．土師器

土師器では甕１点（107）が中央部の床面直上から出土した。体部下半を欠失し、口径14.0cm、残存高7.8cmである。上半が内傾する体部からゆるやかに外反する口縁部で、端部は厚く丸い。

Ｃ．弥生土器

柱穴掘形から出土した108は壺と思われる弥生中期土器である。小片であるが、口径11.4cmを測る。口縁端面には貝殻状圧痕を施す。外面はヘラ磨き、内面はハケのちヨコナデで、灰白色を呈している。

Ｄ．石製品

石製品には台石のＳ８とＳ９、敲石のＳ10、石鏃と思われるＳ11があり、Ｓ９以外を図示した。また、Ｓ11は弥生時代の所産と思われる。石材および計測値については、文末（p.24）の第２表に一括する。

台石

Ｓ８は台石ないしは砥石と思われる。花崗岩の河川礫を用いたもので、図化面はわずかに凹面となる。また裏面も側面より平滑で、光沢をおびる。

Ｓ９は大型で直方体状を呈する礫である。器表面は風化が進行しているが、明らかな二次加工痕、使用痕は認められない。何らかの素材として持ち込まれたものであろうか。

敲石

Ｓ10は叩石である。拳の２倍大ほどの円磨された長楕円形の礫を用いており、細い側の端部は打撃による潰れを見せている。

石鏃

Ｓ11は石鏃あるいはその未製品が破砕したものであろう。剝片を素材とし、縁辺に表裏から二次加工を施している。図上縁は折れ面である。風化は浅い。

②　ＳＨ－４出土遺物　（図版20、巻頭写真図版５、写真図版21・22・26）

ＳＨ－４出土の古墳時代遺物には須恵器・土師器・石製品があり、弥生時代遺物は土器・石器である。

Ａ．須恵器

出土須恵器で図示できたのは坏蓋および坏身である。

坏蓋

109～111の３点がある。109は中央北部の床面から出土した完形品で、口径11.4cm、器高5.2cmである。

器壁が厚く、形態からＴＫ10型式期と思われる。天井部内面中央には微かに当て具痕を残す。110は床面中央部で２片に分かれて出土したものであるが、約1/2の破片である。口径15.6㎝、器高5.0㎝で、天井部外面のヘラケズリは平面楕円形になっており、技術的に稚拙の感がぬぐえない。天井部内面中央には当て具痕が残る。ＴＫ10型式期である。111は口径14.0㎝を測る小片で、器高が低く、残存高3.3㎝である。口縁端部の内面形状から、ＴＫ10型式期～ＭＴ85型式併行期の所産と思われる。

坏身

112・113の２点がある。約半分が遺存する112は口径12.9㎝、器高5.5㎝で、立ち上がり部が短くＭＴ15型式期～ＴＫ10型式期と思われる。体部外面には自然釉が付着しているが、受け部以上には認められないことから、蓋を被せて焼成したと判断できる。底部内面中央には放射状に区画がある当て具痕を残している。113は体部約3/4を残すもので、口径12.1㎝、器高4.7㎝である。床面中央部出土で、底部外面はヘラ切りの後ヘラケズリを施していない。底部内面には当て具痕を残す。ロクロ回転は左方向である。ＴＫ10型式期である。

Ｂ．土師器

出土土師器は甕に限られる。

甕

114～120の７点がある。114は埋土出土の大型甕上半部で、口径16.6㎝、体部最大径28.4㎝を測る。外反する口縁部は端部付近で内弯ぎみとなる。体部外面はイタナデ、内面は幅の細いヘラケズリである。口縁部外面と体部中央に煤が付着している。胎土に金雲母を含むが、色調は褐灰色・灰白色を呈している。115は上半部に体部最大径をもち、口縁部があまり外反しないもので、比較的硬質である。埋土出土で、口径15.7㎝を測る。体部外面はハケを細かい単位で密に施し、内面はイタナデのようである。116は床面中央部で数多くの破片となって出土したもので、完形に近い。口径18.0㎝、器高28.8㎝、体部最大径は24.9㎝で、長胴のタイプである。体部外面下部には幅約４㎝で帯状に擦れた部分があり、竈の掛口に直接当たる部分であったと判断できる。体部外面下半には煤が付着し、胎土が赤変している部分も多い。体部外面上半は縦方向、下半は横方向にハケを施している。体部内面はヘラケズリである。117～119は口縁部片で、口径は順に17.7㎝、16.7㎝、15.3㎝である。いずれも埋土から出土している。119のハケは細かい単位で回数多く施している。120は口径12.2㎝、推定器高14.5㎝、体部最大径14.8㎝の比較的小型の甕で、北部の床面から出土したものである。体部外面は縦方向のイタナデ、内面は横方向のヘラケズリである。体部には被熱により赤変している部分が認められる。口縁部断面形状では、端部の器厚が薄く、下部が厚くなっていて細長い三角形に近く、体部とは内面で大きな段差が認められる。

Ｃ．弥生土器

ＳＨ－４から出土し、図示した弥生土器には底部２点（121・122）と壺体部片の123がある。

底部

121はＳＨ－４の南側掘形出土で、径4.2㎝の小さな平底から外反気味に外上方にやや小さく開いて体部となる。内外面ともハケ調整で、底部外面は周囲に沿って丸くナデている。甕の可能性がある。

122はＳＨ－４の北側掘形出土で、底面中央部がやや窪む径5.5㎝の平底で、外反しながら外上方に小さく開いて体部へと続く。体部外面はヘラミガキ調整で、底部外面は周囲に沿って歪に丸くナデている。

壺

123はＳＨ－４の北側掘形から出土した壺体部の小片で、櫛による斜行刺突文を簾状文風に左から右

方向に施している。

D．石製品

古墳時代の石製品にはＳ12の台石と思われるものがあり、弥生時代の石器にはＳ13の石鏃がある。石材および計測値については、文末（p.24）の第２表に一括する。

台石

Ｓ12は破砕礫とした。素材は転磨を受けた河川礫であり、左図左側面が礫を断ち切るような剝離面となっているほか、左図中央には、不規則な剥落痕が認められる。右図中央は水磨された平滑な面であるが、研磨の有無については肉眼では判断できない。

石鏃

Ｓ13は石鏃である。ほぼ直線的な基部から、平行にのびる両側縁を見せ、先端にかけて大きく曲がる。先端はややいびつな印象を受けるが、これは右図先端に古い欠損と見られる剝離痕があるためである。風化は浅い。

３．中世前期遺構出土遺物

中世前期の遺構出土遺物のうち、図示できたのは土壙状遺構出土遺物に限られる。

（１）土壙状遺構出土遺物

土壙状遺構には落込みがあり、出土遺物を図示した。

①　落込み出土土器　（図版21、写真図版23）

落込みから出土した遺物のうち図示できたのは124の須恵器埦片１点に限られる。

埦

口径15.7㎝を測る口縁部片で、口縁部の傾きはかなり緩い。焼成はやや不良･軟質で、灰白色を呈する。傾きと形態的特徴および焼成から12世紀末～13世紀前半の所産である可能性が高い。

第２節　包含層出土遺物

弥生時代～古墳時代の遺構面上およびそれらの遺構面下の遺物包含層から縄紋土器･弥生土器や石器･石製品が出土している。

１．縄紋土器・弥生土器

包含層から出土した土器のうち、縄紋土器は１点、弥生土器は６点を図示した。

（１）縄紋土器（図版22、写真図版23）

図示した縄紋土器は粗製の深鉢と思われる口縁部１点である。131の口縁端部は幅約1.0㎝で、外傾する面をもつ。口縁部は外反し、口径は32.0㎝を測る。内外面は貝殻状痕で、内面は右→左の横方向、外面は上→下の縦方向で密に施しているが、口縁部のみヨコナデ調整である。断面は黒褐色を呈しているが、表面は灰色がかった、にぶい黄褐色である。後期後半頃と思われる。

（２）弥生土器（図版22、写真図版23）

包含層から出土した弥生土器では、壺・甕・高坏脚部の計６点を図示した。

壺

壺には口縁部が外反しない直口壺125と外反して開く広口壺の126・127を図示した。

125の口径は16.6㎝で、口縁部は外反したのち外上方に直線的にのび、端部は内側に少し拡張している。外面には４条の断面三角形の突帯を貼り付けているが、中央部は間隔が広くなっており、２条ずつ上下２段に分かれているようにみえる。口縁端面は外傾する平坦面で、櫛描波状文を施しているようである。この波状文と突帯が２段に分かれる点は、管見では他に類例をみない。

126は口縁部が下外方にまで大きく外反し、器壁が薄いものである。口縁端部は拡張せず、ほぼ垂直の平坦面となり、端面には垂直方向の刻目を密に施す。口縁内面には断面三角形の突帯を１条貼り付けているが、刻目は施していないようである。口縁内突帯の径は12.4㎝で、口縁端面での径は17.2㎝となっている。127の口縁部は直立したのち外反して横外方に短くのび、端面は垂直な面となっており、垂直方向の刻目を密に施している。口縁端面での径は11.6㎝である。

甕

甕は128・129の２点を図示した。

128の口縁部は体部から「く」字状に外折し、外反気味に外上方にのび、端部は下方に若干拡張している。口径は19.5㎝を測る。129も128同様に体部から外折するが、口縁部は直線的に外上方にのび、端部は拡張しない。口径は17.7㎝である。どちらもＳＸ－６出土甕と較べると、どちらも体部と口縁部との境の内面の稜線がややあまくなっている。

高坏

高坏は130の脚部１点である。

130は脚端径14.8㎝で外反ぎみに開く脚裾部で、端部は主として外方に拡張し、端部は幅1.3㎝の平らな面となっている。内面は上→下方向で細かいヘラケズリを施し、外面はヘラミガキ調整となっている。

２．弥生時代等石製品（図版22、写真図版26）

包含層より出土した石器・石製品（Ｓ14～Ｓ16）には石鏃・砥石がある。石材および計測値については、文末の表に一括する。

石鏃

Ｓ14は全体が菱形を呈する石鏃である。剝片を素材とし、縁辺には弱い潰れが認められる。二次加工がやや不揃いであることから、未製品の可能性がある。図上部は折損している。風化は浅い。

砥石

Ｓ15は砥石である。図左面が使用面で全体が研磨されているが、特に中央付近には弱いながら凹みが認められる。両側面はおよび図下側面は、研磨面に対してほぼ直角をなす剝離（あるいは折断？）のみがおこなわれた面である。図右面は素材から剝離された面である。なお、図上側面には、研磨面側からの二次的な剝離が複数認められ、本資料が破砕した後に整形を試みた痕跡と推察される。

Ｓ16は砥石あるいは石皿の断片である。図化面中央付近が凹面となり、顕著な研磨痕が認められる。

第２表　出土石器一覧

番号	器種	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石材	遺構	層位
S1	削器	78.2	64.3	18.8	117.0	安山岩	SX-6	
S2	石皿							
S3	台石？							
S4	石鏃	20.3	17.1	2.0	0.6	サヌカイト	SD-2	
S5	石鏃	28.0	15.0	4.0	1.7	サヌカイト	SD-2	
S6	石鏃	19.5	13.0	2.3	0.7	サヌカイト	SD-2	
S7	楔形石器	21.8	29.0	4.0	2.3	サヌカイト	SD-2	
S8	台石	237.1	211.5	85.8	7600	花崗岩	SH-2	
S9	礫						SH-2	
S10	叩石	173.1	85.5	54.0	1109.7	砂岩	SH-2	
S11	石鏃	23.2	16.1	4.8	1.9	サヌカイト	SH-2	
S12	破砕礫	94.1	71.9	48.0	406.7	不明	SH-4	下層
S13	石鏃	18.3	13.8	3.3	1.0	サヌカイト	SH-4	赤褐色土
S14	石鏃	34.8	19.0	3.5	2.4	サヌカイト		包含層
S15	砥石	78.5	63.5	36.5	240.1	不明		包含層
S16	砥石	76.5	60.0	15.1	88.8	凝灰岩		包含層

第４章　総　括

第１節　出土土器について

本遺跡で検出した土壙ＳＸ－６の埋土上部には多量の土器が堆積しており、これらは西側から一気に捨てられたと想定できたことから一括出土品として扱うことができ、これらの土器の同時性が高いことも推定できた。また、周辺の遺構から出土した土器もＳＸ－６出土土器と同じ様相を呈することから、それらも含めた出土土器についての編年的・地域的位置づけをおこなうこととする。

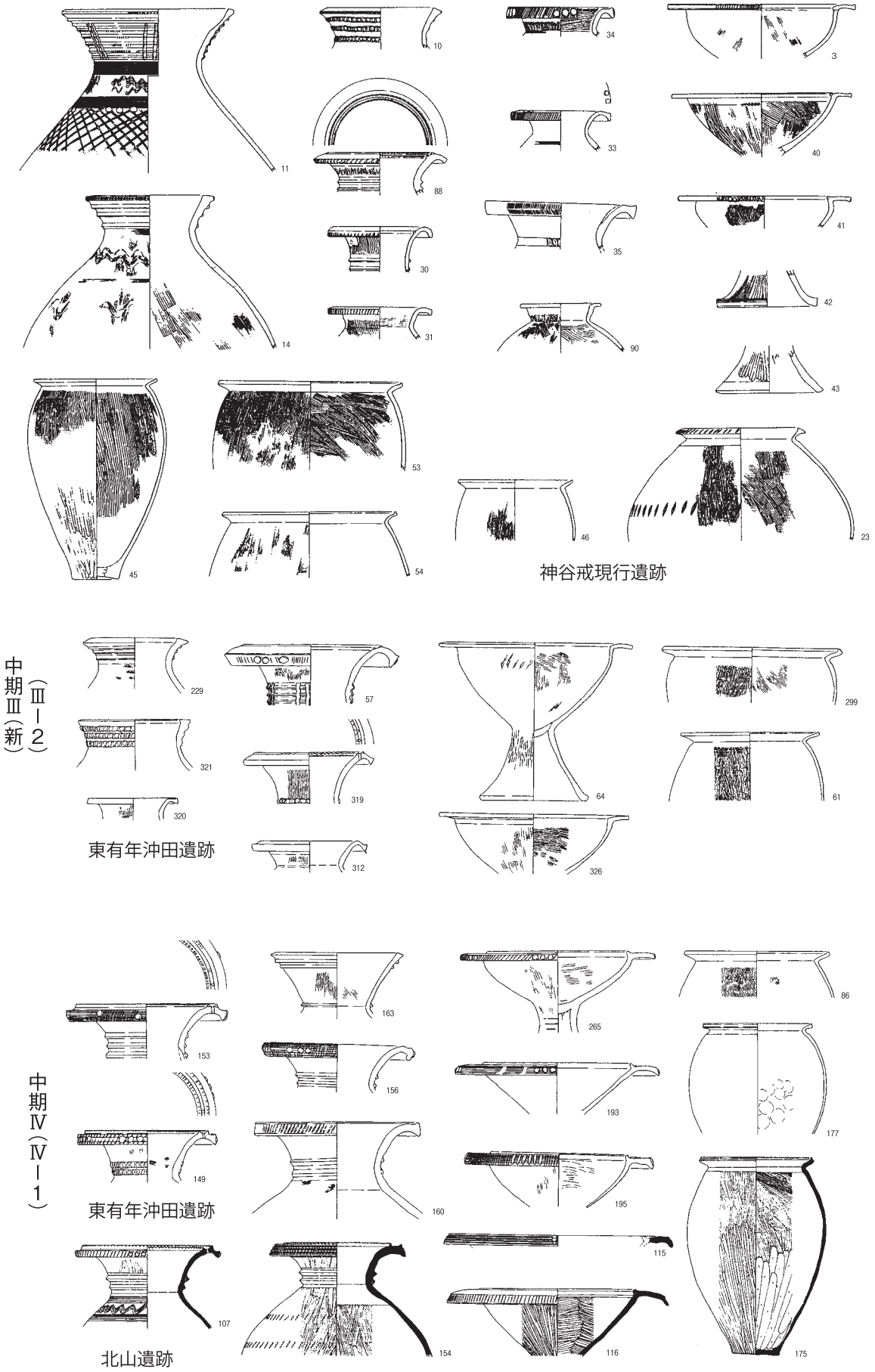
出土土器の器種のうち壺では、直口壺の比率が高く、多条の断面三角形突帯を貼り付け、指頭圧痕が加えられたものも存在している。体部は直線文・波状文・斜格子文などで飾られ、最下段には斜行列点文を加えている。広口壺では口縁端部が大きく外反するものは端部が殆ど肥厚せず、端面の凹線文は認められない。また、刻目を加えた口縁内突帯を貼り付けているものが目立つ。その他の広口壺でも端部は拡張するものの、凹線文は全く認められない。甕の口縁端部は上方に若干引き上げているが、拡張といえるほどではない。水平口縁高坏では、口縁部と体部との境界に内上方に突帯を有しており、口縁端部は若干肥厚させるのみで垂下する傾向は全く認められず、凹線も施していない。

以上の特徴から、神谷戒現行遺跡出土弥生中期土器はⅢ期に位置づけられよう。播磨弥生中期土器の編年において、凹線文の出現をもって中期Ⅲと中期Ⅳを分ける最大の指標とする点は、近年の岸本道昭氏（岸本 1995)、中田宗伯氏（中田 2003)、長友朋子・田中元浩氏（長友・田中 2007）の編年案においても踏襲されている。その点からすれば中期Ⅲの時期が与えられ、そのなかでも後半にあたる、中田氏の中期Ⅲ（新)、長友・田中氏の中期Ⅲ－２の時期となろう。ただし、水平高坏の口縁部と体部との境の突帯の有無の点において問題が残る。すなわち、中期Ⅲ（新）あるいは中期Ⅲ－２に位置づけられている水平口縁の高坏には、突帯が認められないことを指標とされており、突帯を有することによって次の段階の中期Ⅳや中期Ⅳ－１に位置づけされるのである。その点からすれば、本遺跡出土土器は高坏のみ中期Ⅳや中期Ⅳ－１に編年され、その他の壺や甕は凹線文を有しない点や口縁端部の特徴などから中期Ⅲ（新）や中期Ⅲ－２となって、編年的位置づけに齟齬が生じることになる。このことは、地域的な特性によるものか編年の際の指標に問題があるためであろう。中期Ⅳ、中期Ⅳ－１に編年されている水平口縁高坏には、凹線文を有さず、垂下傾向も窺えないもの（東有年沖田遺跡土坑５出土）が存在しており、新しい段階としてそぐわない形態と判断される。すなわち、高坏において突帯の有無を指標とすることは、必ずしも口縁端部の垂下傾向や凹線文を施す点とは合致しないと思われる。したがって、突帯を有していても口縁端部の垂下傾向や凹線文の存在が認められなければ、その前段階に位置づけるべきであると考える。

以上のことから、神谷戒現行遺跡出土弥生中期土器は、播磨弥生土器編年中期Ⅲの新しい段階に位置づけることができ、中期Ⅳまでは降らないと判断しておきたい。

参考文献

岸本道昭　1995『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15　龍野市教育委員会
岸本道昭　2001『北山遺跡』龍野市文化財調査報告23　龍野市教育委員会
中田宗伯　2003『東有年・沖田遺跡』赤穂市文化財調査報告書56　赤穂市教育委員会
長友朋子・田中元浩　2007「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所



第４図　西播磨弥生中期土器

第２節　放射性炭素年代ＡＭＳ測定結果

（１）測定対象試料

神谷戒現行遺跡は、兵庫県宍粟市山崎町神谷（北緯35°1′21.3″、東経134°33′21.5″）に所在する。測定対象試料は、ＳＨ－２出土炭化物（炭化物１：IAAA-120653、炭化物２：IAAA-120654）の合計２点である（第３表）。

（２）測定の意義

遺構の年代を特定する。

（３）化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第３表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（４）測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（５）算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第３表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。^{14}C年代と誤差は、下一桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を第３表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第４表に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（６）測定結果

ＳＨ－２出土試料の^{14}C年代は、炭化物１が1600±30yrBP、炭化物２が1560±30yrBPである。同じ遺構から出土した２点の値は、誤差（±1σ）の範囲で重なり、おおむね近い年代を示す。

暦年較正年代（1σ）は、炭化物１が416～532cal AD、炭化物２が436～544cal ADの間に各々３つの範囲で示され、古墳時代中期から後期頃の暦年代観に当たる年代値である。

試料の炭素含有率は、いずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第３表　暦年較正年代（補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-120653	炭化物1	遺構：SH2	炭化物	AAA	-28.75±0.33	1,600±30	81.90±0.26
IAAA-120654	炭化物2	遺構：SH2	炭化物	AaA	-24.84±0.31	1,560±30	82.38±0.26

［＃5207］

第４表　暦年較正年代

測定番号	δ^{13}C 補正あり		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120653	1,670±30	81.27±0.25	1,604±25	416calAD-441calAD (22.7%) 455calAD-460calAD (3.1%) 484calAD-532calAD (42.4%)	409calAD-536calAD (95.4%)
IAAA-120654	1,550±30	82.41±0.26	1,556±25	436calAD-491calAD (48.3%) 509calAD-518calAD (6.3%) 529calAD-544calAD (13.6%)	428calAD-561calAD (95.4%)

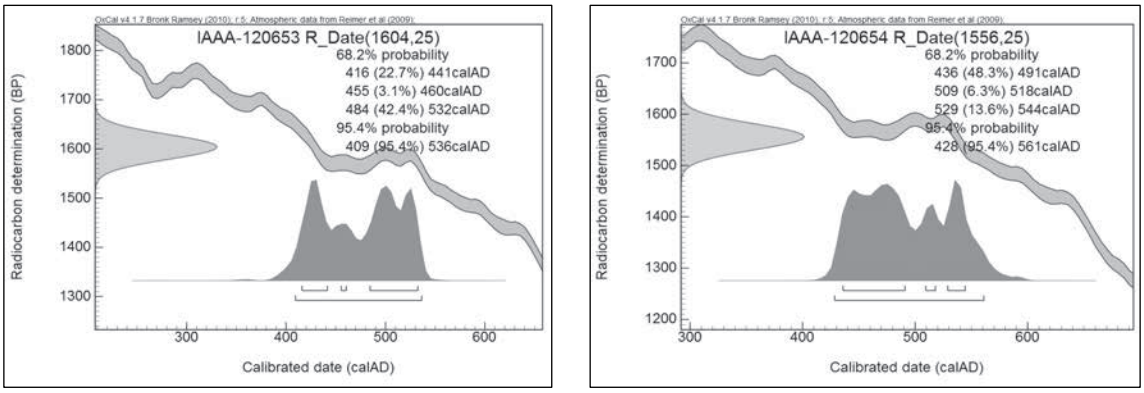
［参考値］

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第５図　［参考］暦年較正年代グラフ

第３節　総　括

神谷戒現行遺跡の本発掘調査の結果、弥生時代中期中葉、古墳時代後期前半、平安時代末～鎌倉時代の遺構および遺物が検出された。特に、弥生時代および古墳時代については竪穴住居跡が検出され、土器も多量に出土した。弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡などの遺構は、調査区中央部以南に限られており、遺構面は旧揖保川の氾濫原のうち、礫の堆積による微高地上にあたることから、高所を利用して竪穴住居などが営まれたことが下層掘削の結果から判断できた。また、その微高地は東西に近い方向で細長いものであったことが推定される。一方、調査区中央部よりも北側について下層掘削の結果、中世遺構が存在する部分は東側の谷からの堆積であることが土層断面観察から窺うことができた。したがって、調査区南部の弥生・古墳時代の遺構が立地する地盤と、中世遺構の地盤とは成因を異にしていることが想定できた。このことは、調査区北部に東西方向の谷状地形がかつて存在していたが、平安時代末頃には東側からの土砂堆積によって谷が埋まり、湿地ではなくなったことが推定できよう。

弥生中期・古墳後期の集落では、ＳＸ－６の土器出土状況から、土壙の西側から土器を捨てたと推定でき、西側にも住居跡が存在していた可能性が高い。東側は現集落との間に河道が存在している可能性が高く、東からのびる尾根状地形の埋没部分と集落跡の推定範囲がほぼ合致するものと思われる。

最後に、弥生時代の遺構のうち、調査区中央部で検出されたＳＤ－２とＳＤ－３は方形周溝貼石墓の可能性があることが判明した。貼石をもつ弥生時代の墳丘墓は西日本の中国・山陰地方を中心に分布しており、本地域も中国地方に近いことから、その分布域に含めてもよいと思われるが、中国地方に見られるものは周溝を有しない方形貼石墓であり、時期的にも弥生中期後半以降にみられるものである。ひるがえって、近畿地方の方形周溝墓のうちには、わずかな数であるが貼石を有するものが認められる。最も時期的に遡るのは神戸市の新方遺跡で中期初頭のものである。一方、京都府の丹後地域には貼石をもつ方形貼石墓や方形周溝墓が存在しており、方形貼石墓は弥生時代前期に遡るものがあり、方形周溝貼石墓は本遺跡と同様、中期中葉以降に認められる。本遺跡の方形周溝貼石墓は、現段階での類例分布域から見れば、丹後地域からの影響と判断することもできるが、本遺跡から出土した土器は中国地方との共通性が強いものであり、丹後地域の土器とは趣を異にしている。したがって、丹後地域からの影響とすれば時期的には合致するものの土器の様相が異なり、中国地域との関連でとらえようとすると時期的には本遺跡が最も古い例となる。これらの点については今後の検討課題である。

第６図　神谷戒現行遺跡集落の推定範囲（１：6,000）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こうだにかいげんぎょう いせき
書名	神谷戒現行遺跡
副書名	一般県道田井中広瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第449冊
編著者名	岸本一宏・久保弘幸・株式会社加速器分析研究所
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号 TEL 078-362-3784
発行年月日	平成25(2013)年３月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号 TEL 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
神谷戒現行遺跡	宍粟市山崎町神谷	2822278	530080	35°1′16″	134°33′21″	20090709～20090826 (2009192)	241㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神谷戒現行遺跡	集落跡	弥生時代中期	竪穴住居跡１・土壙３・溝３	土器・石器	溝は周溝墓か
		古墳時代後期	竪穴住居跡２	土器・石製品	１基は竈あり
		中世前期	柱穴・土壙	土器	

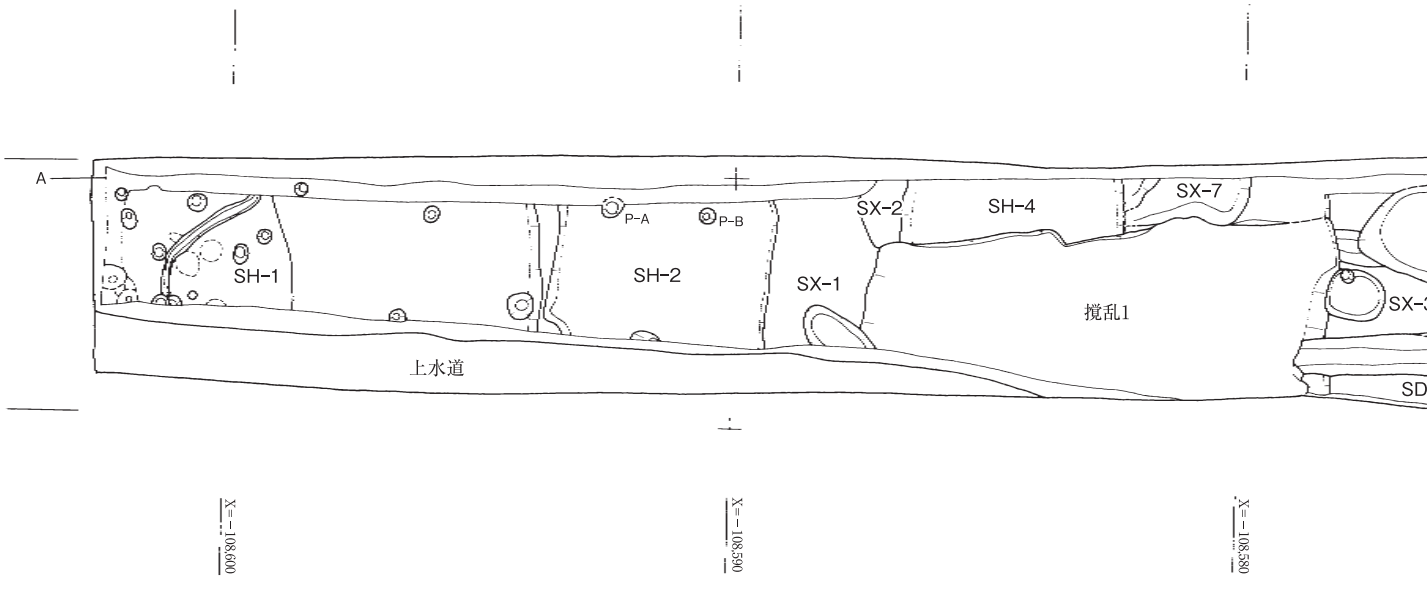
要約

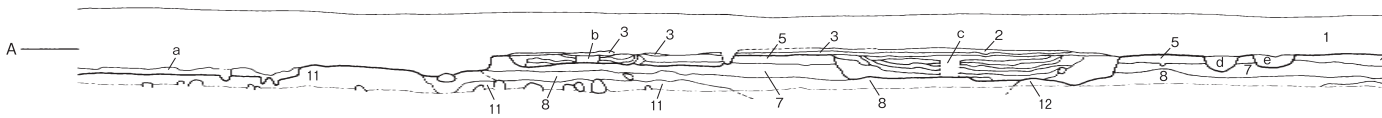
本発掘調査の結果、調査区の中央部から南側にかけて弥生時代中期と古墳時代後期、調査区北部では中世前期の遺構および遺物を検出し、調査区全域の遺物包含層から土器が出土した。これらの遺構は、圃場整備の工事の際に掘削された撹乱や道路下に埋設された上水道管によって破壊されている部分が多く認められたものの、竪穴住居跡や溝・土壙といった遺構や、遺構内の大量の土器が遺存している部分も多く存在した。検出した遺構には竪穴住居跡や溝・土壙・柱穴などがあり、それらは時期的に弥生時代中期中葉（Ⅲ期）と古墳時代後期前半（６世紀中頃～後半）および平安時代末～鎌倉時代初頭（13世紀頃）の３期に分けることができる。弥生時代の遺構は竪穴住居跡１棟のほか、土壙・溝がある。遺構から出土した土器はすべて弥生時代中期中葉にあたるⅢ期に限定されることから、それらの遺構も同時期であると判断される。古墳時代の遺構は、方形竪穴住居跡２棟に限られ、13世紀頃の遺構は、調査区北端付近で検出された柱穴および調査区北東隅の溜り状遺構に限られる。

図版1

河東小学校
今回調査区
現況
河東小学校
神谷
今回調査区
1982年度T36
1982年度T10
T20
河東南遺跡
1982年度
調査区
中
0
200m
圃場整備前

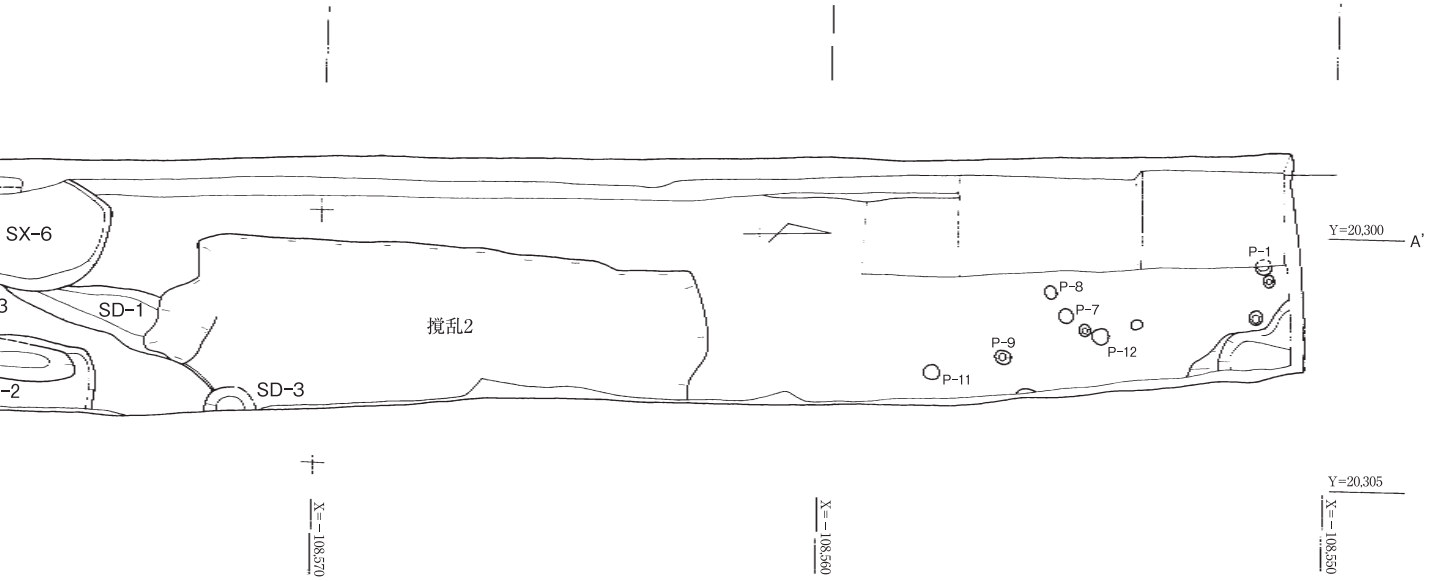
調査区位置図

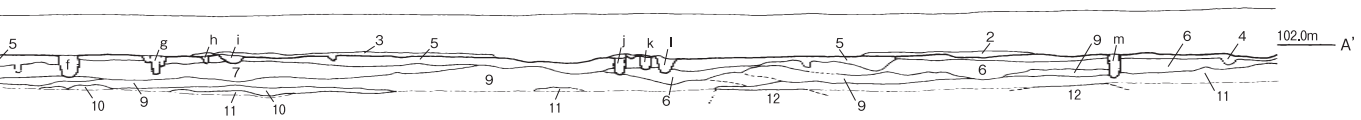




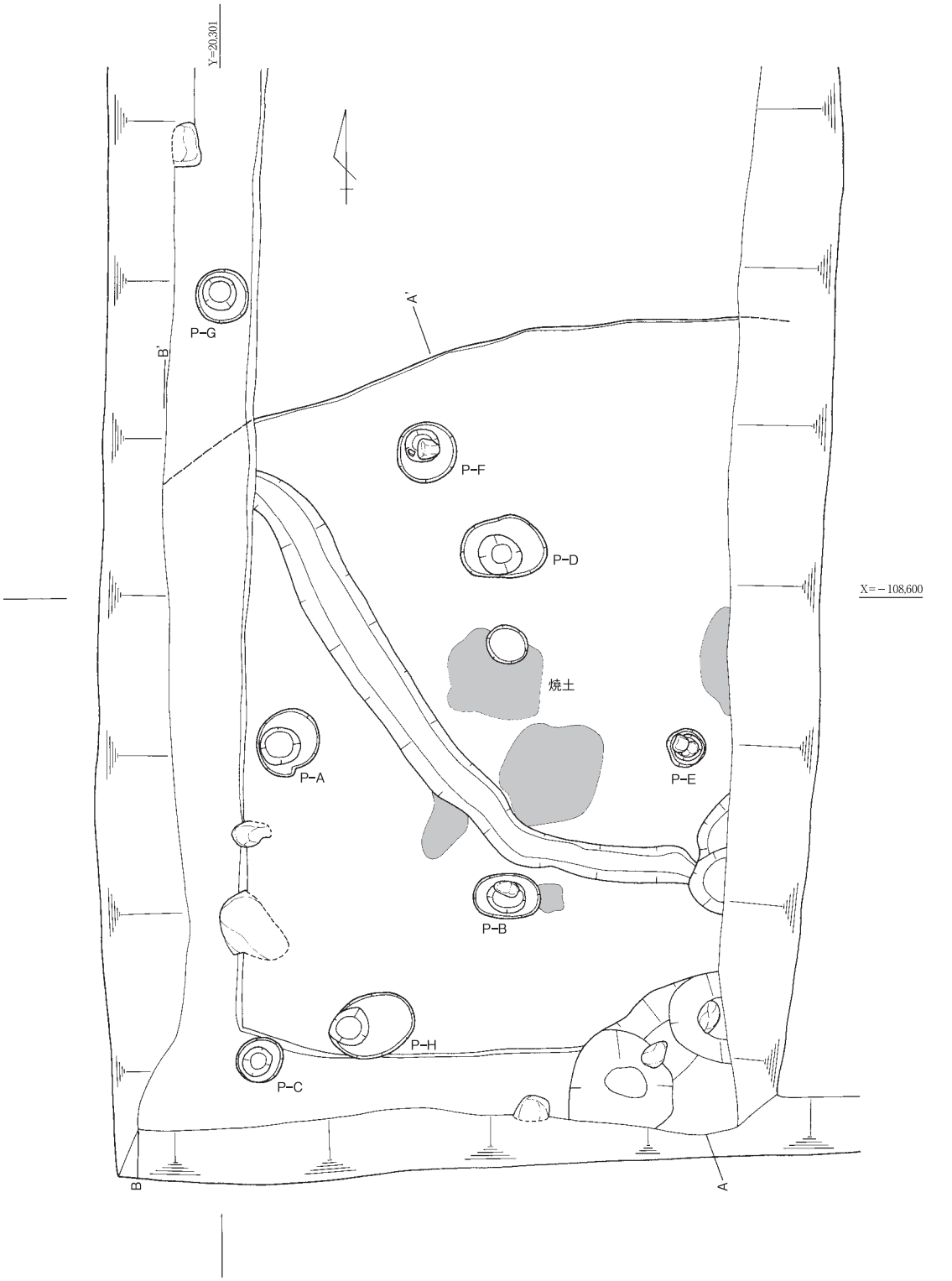
1. 盛土層（耕土ほか撹拌土）
2. 2.5YR4/2 暗灰黄色　極細砂　旧耕土
3. 10YR4/4 褐色～ 2.5Y4/4 オリーブ褐色　極細砂　鉄分集積　旧床土
4. 10YR4/4 褐色　極細砂まじり細砂　マンガン含む
5. 10YR4/4 褐色～ 4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂　マンガン多く含む　鉄分含む
6. 7.5YR4/3 褐色　粗砂まじり細砂　φ５㎜内外の礫多く含む　マンガン多く含む　土器細片含む
7. 10YR4/4 褐色　細砂質中砂　北部では下部に中砂質でマンガン多く含む部分あり
8. 7.5YR3/3 暗褐色　シルトまじり細砂質極細砂　φ１㎝内外の礫含む
   南端では 5YR3/2 暗赤褐色～ 7.5YR3/2 黒褐色　シルト質極細砂の凹部あり　有機分多く含みマンガン少量含む
9. 7.5YR4/1 褐灰色・10YR3/3 暗褐色　混礫粗砂　粗砂中心に極細砂含む　φ２～５㎝亜円礫多い　洪水砂礫
   南部に中砂～粗砂のラミナ部分あり
10. 7.5YR3/4 暗褐色　全体に汚れている
11. 10YR3/4 ～ 7.5YR3/4 暗褐色　細砂まじり極細砂　マンガン多く含む　南部の旧中州礫北側ではシルトまじり細粒砂
    旧中州礫中央部では 7.5YR4/3 褐色　中砂質細砂でマンガン含む
    旧中洲礫は南部ではφ５～ 10 ㎝大、中央部ではφ30 ㎝大、北部ではφ30 ～ 50 ㎝大となる
12. 7.5YR4/4 褐色　極細砂質細砂　基盤層

調査区平面

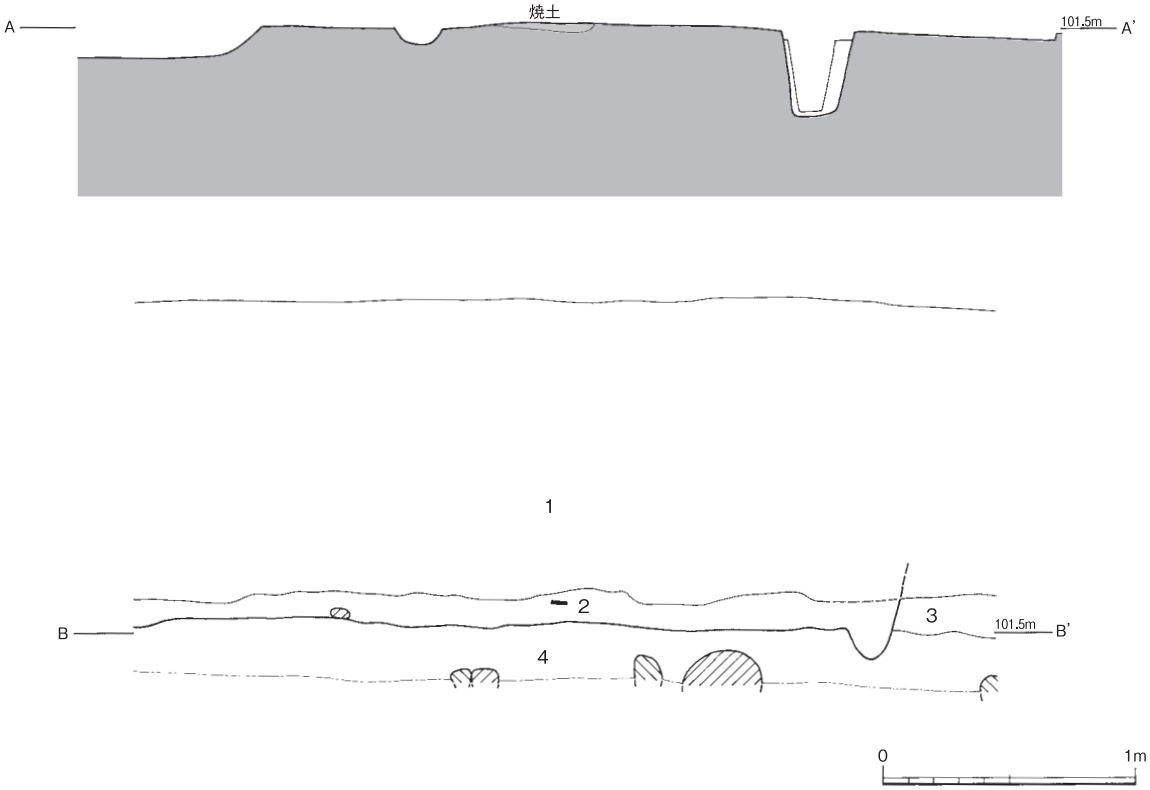




a．ＳＨ－01 埋土
b．ＳＨ－02 埋土
c．ＳＨ－04 埋土
d．溝・土壙埋土　7.5YR3/2 黒褐色　極細砂まじり細砂　下半にφ３～５㎝亜円礫含む
e．溝・土壙埋土　7.5YR3/2 ～ 10YR3/2 黒褐色　シルトまじり細砂質極細砂　φ５㎝内外の礫含む
f．柱穴埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルトまじり極細砂質細砂
g．柱穴埋土　7.5YR3/2 黒褐色　シルト質極細砂　掘形埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色　シルトまじり極細砂質細砂
h．柱穴状遺構埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルトまじり極細砂質細砂
i．土壙状遺構埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂
j．柱穴埋土　5YR3/2 暗赤褐色　細砂まじり極細砂　炭化物含む
k．柱穴埋土　7.5YR3/2 黒褐色　極細砂で細砂若干含む
l．柱穴埋土　5YR3/2 暗赤褐色　細砂まじり極細砂　土器小片含む
m．柱穴埋土　7.5YR3/3 暗褐色　細砂まじり極細砂でシルト若干含む　φ１～２㎝の円礫含む

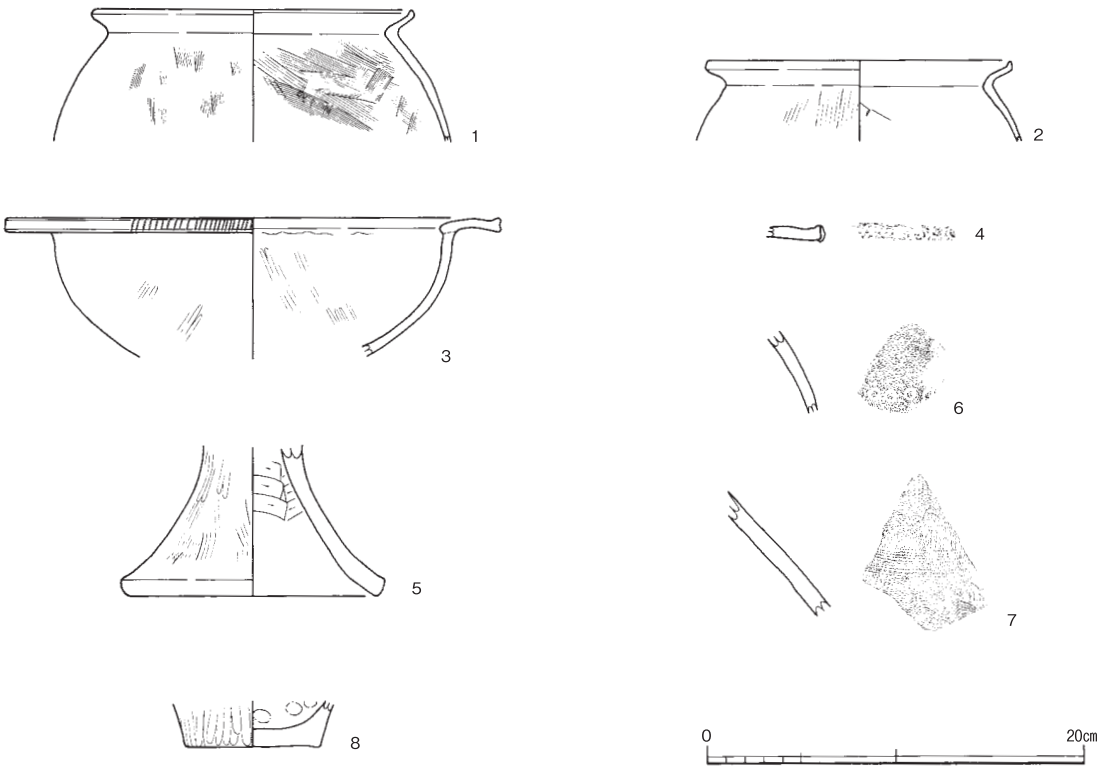


SH−1 平面図



1. 盛土層（耕土ほか撹拌土）
2. 5YR2/2 黒褐色～ 5YR2/3 極暗赤褐色　細砂質極細砂　ＳＨ－01 埋土
3. 5YR3/2 暗赤褐色　極細砂を若干含む細砂
4. 10YR3/4 ～ 7.5YR3/4 暗褐色　細砂まじり極細砂　マンガン多く含む　旧中洲礫はφ５～ 10㎝大

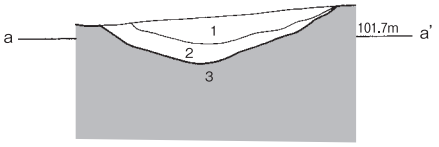
間仕切り溝埋土は 5YR3/2 暗赤褐色　シルト分若干含む細砂



SH-１断面図・出土土器

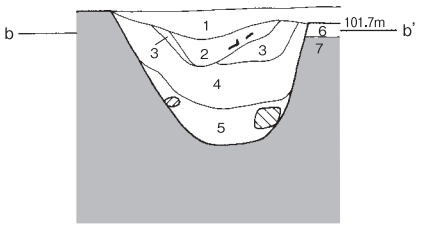
調査区中央部遺構群　平面図

SD-1



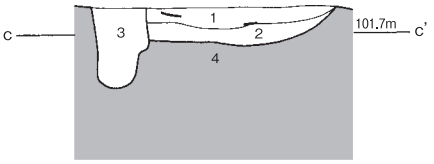
1. 7.5YR3/3 暗褐色　シルトまじり細砂　マンガン含む
2. 5YR3/2 暗赤褐色　シルト～極細砂質細砂　φ１㎝内外の円礫
3. 7.5YR3/3 ～ 10YR3/3 暗褐色　極細砂質細砂

SD-2



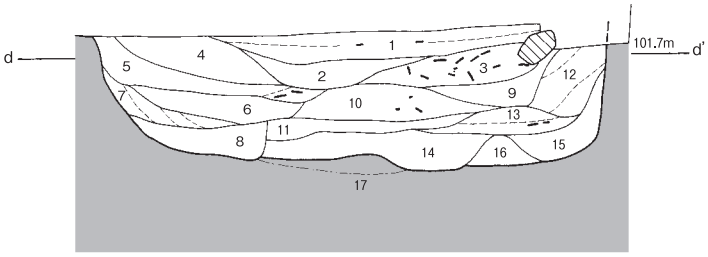
1. 7.5YR3/2 黒褐色　細砂質極細砂　土器含む　マンガン含む
2. 5YR2/2 黒褐色～ 2/3 極暗赤褐色　細砂まじり極細砂質シルト　炭・土器含む
3. 5YR2/4 褐灰色　細砂まじり極細砂　第７層ブロック含む
4. 5YR2/3 極暗赤褐色　細砂まじり極細砂質シルト
5. 2.5YR2/3 極暗赤褐色　シルト質極細砂　φ10 ～ 20 ㎝の礫含む
6. 5YR3/2 暗赤褐色　極細砂質細砂　マンガン含む
7. 7.5YR4/3 褐色　細砂質極細砂

SX-3



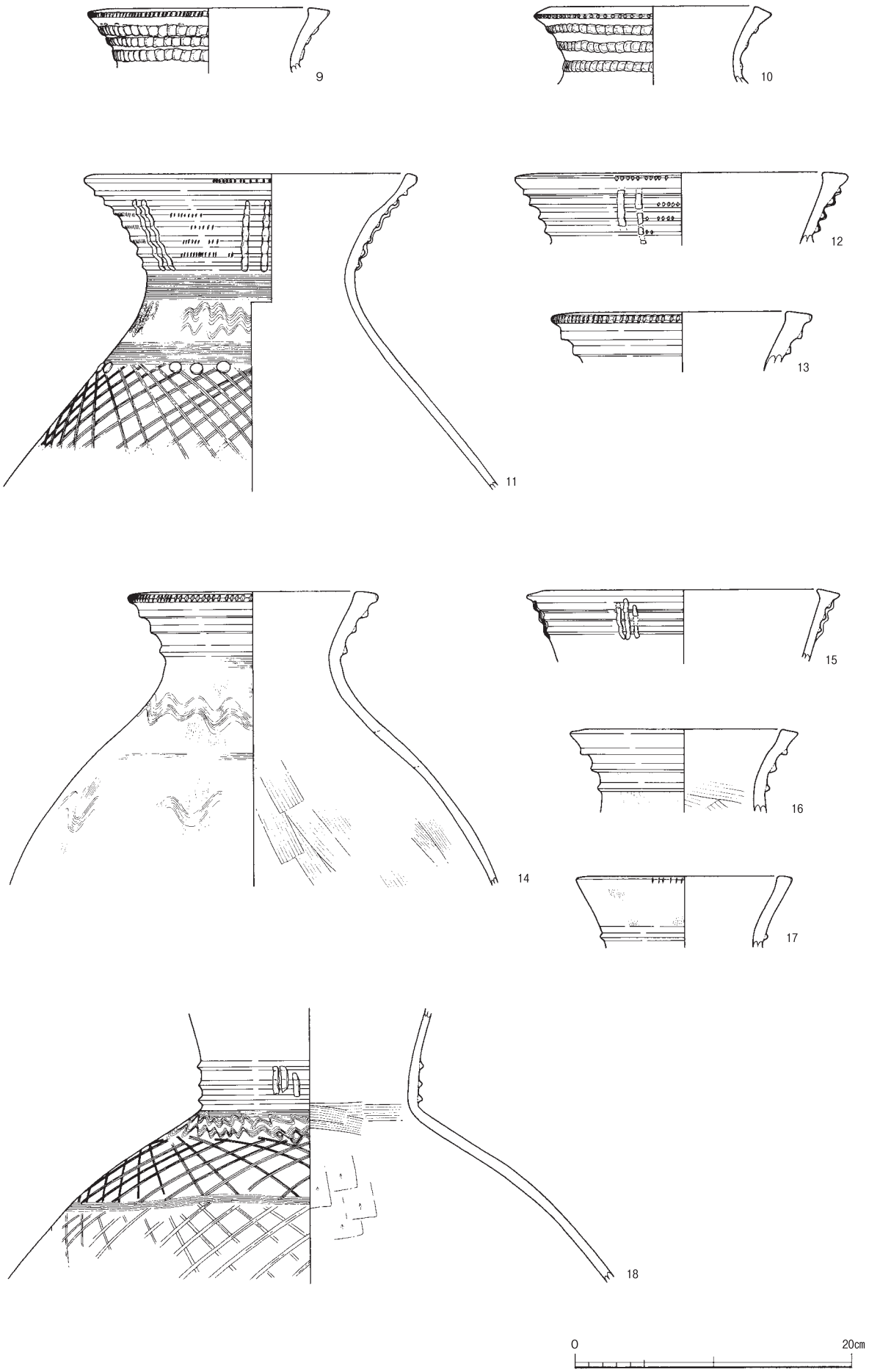
1. 7.5YR3/2 黒褐色　細砂まじり極細砂　炭化物多く含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色～ 7.5YR4/3 褐色　シルトまじり細砂質極細砂
3. 10YR3/4 暗褐色　シルトまじり極細砂質細砂　粘質　柱穴埋土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色～ 4/4 褐色　細砂　基盤層

SX-6

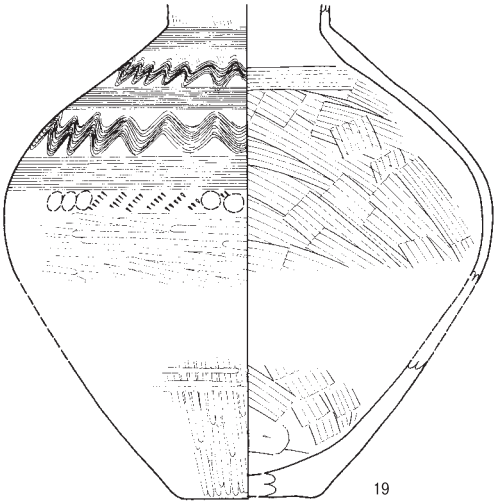


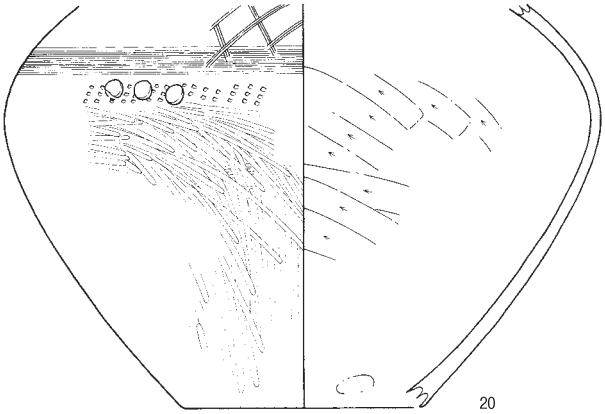
1. 7.5YR3/2 黒褐色　極細砂まじり細砂　中位に土器を含む　上位には砂粒多く、下位にはシルト分多い
2. 7.5YR3/2 黒褐色　シルトまじり細砂　土壌化顕著
3. 5YR3/2 暗赤褐色　シルトまじり細砂　多量の土器を含む　炭化物含む
4. 5YR3/2 暗赤褐色　シルト・極細砂・粗砂粒・地山ブロックを混交する中砂質細砂
5. 5YR2/3 極暗赤褐色　シルトまじり細砂　土器・炭化物含む　第３層と同じか
6. 7.5YR2/3 極暗褐色　中砂・シルトまじり細砂　焼土・炭化物含む
7. 2.5YR2/2 極暗赤褐色　シルトまじり極細砂質細砂　炭化物・焼土多く含む　粗砂粒多く含む　東上から西下へ斜めに堆積
8. 7.5YR3/3～3/4 暗褐色　シルト質極細砂ブロック＋7.5YR4/3 褐色　中砂
9. 5YR2/2 黒褐色　シルトまじり中砂（地山層ブロック＋シルト）　土器多く含む　炭化物若干含む
10. 2.5YR2/2 極暗赤褐色～ 5YR2/2 黒褐色　中砂粒まじりシルト　焼土・土器・炭化物含む
11. 7.5YR3/2 黒褐色　シルトまじり中砂＋中砂
12. 7.5YR2/3 極暗褐色～ 4/2 灰褐色　シルトまじり中砂質細砂
13. 7.5YR2/3 極暗褐色　中砂　シルトがブロックで混交する
14. 5YR3/2 暗赤褐色～ 2/3 暗褐色　にぶい黄褐色　第 10 層に近い　炭化物多く含み、焼土・土器含む
15. 7.5YR3/2 黒褐色　シルトまじり中砂質細砂　炭化物若干含む
16. 7.5YR4/3 褐色～ 10YR4/3 にぶい黄褐色　シルトブロックを含む中礫
17. 7.5YR4/4～10YR4/4 褐色　中砂　φ５～10 ㎝大円礫含む

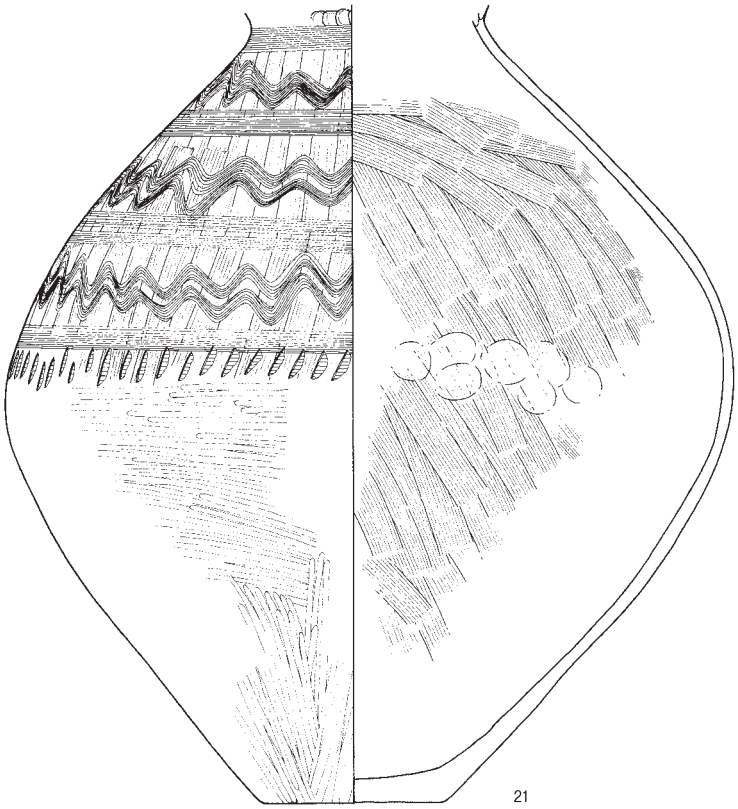
調査区中央部遺構群　土層断面図

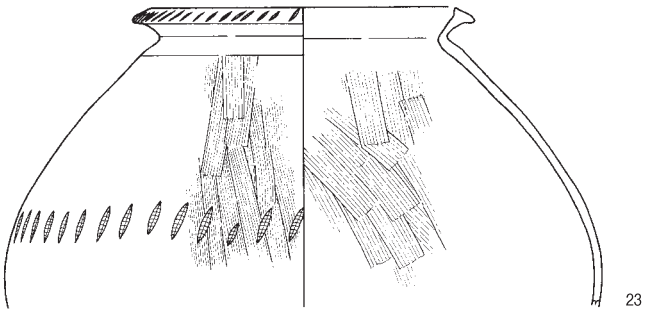


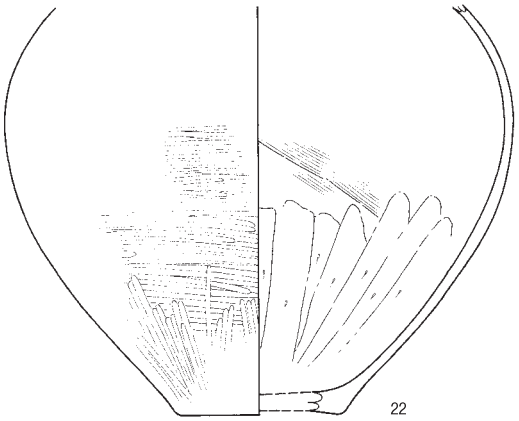
SX-6出土土器（1）





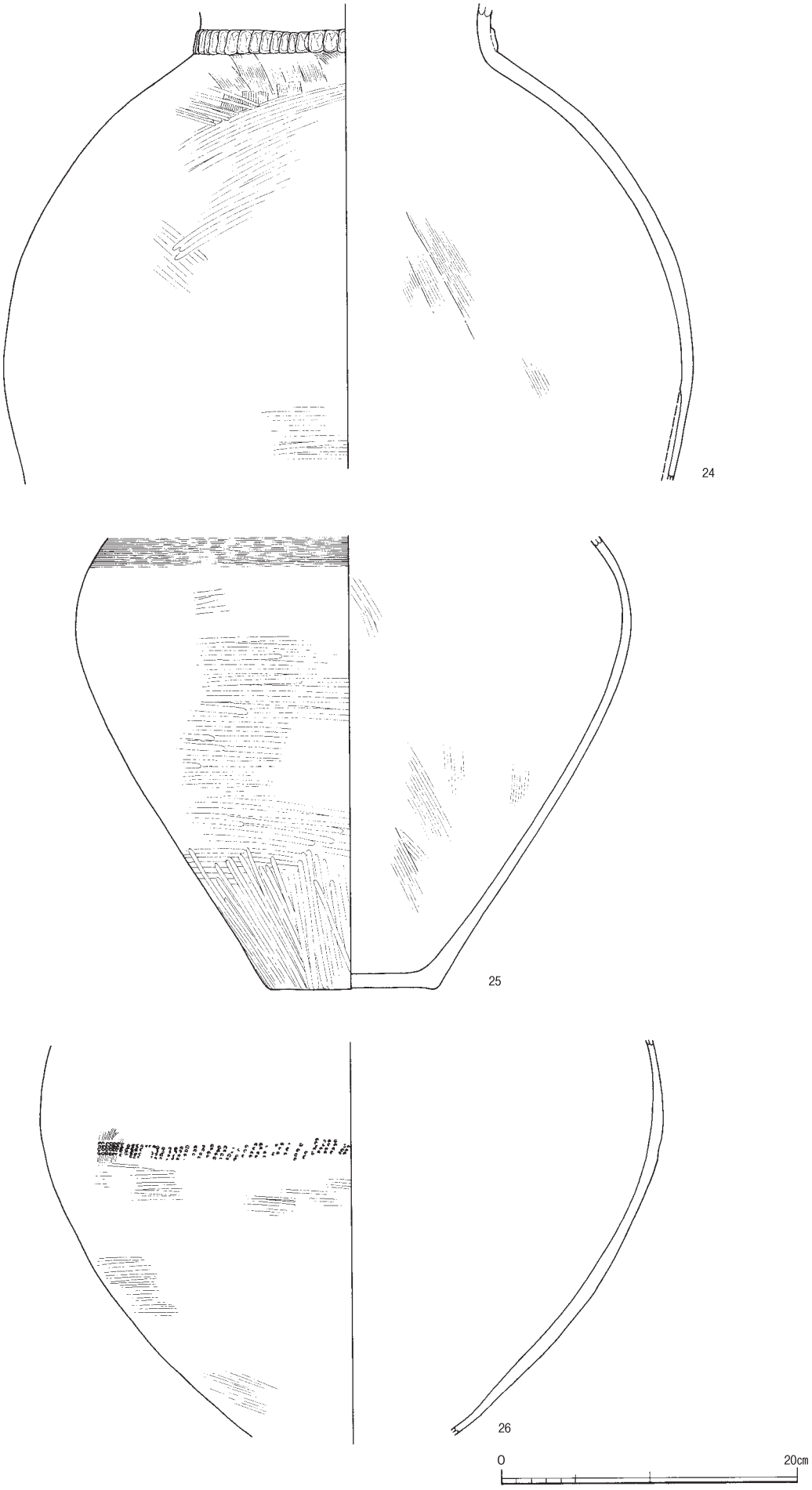




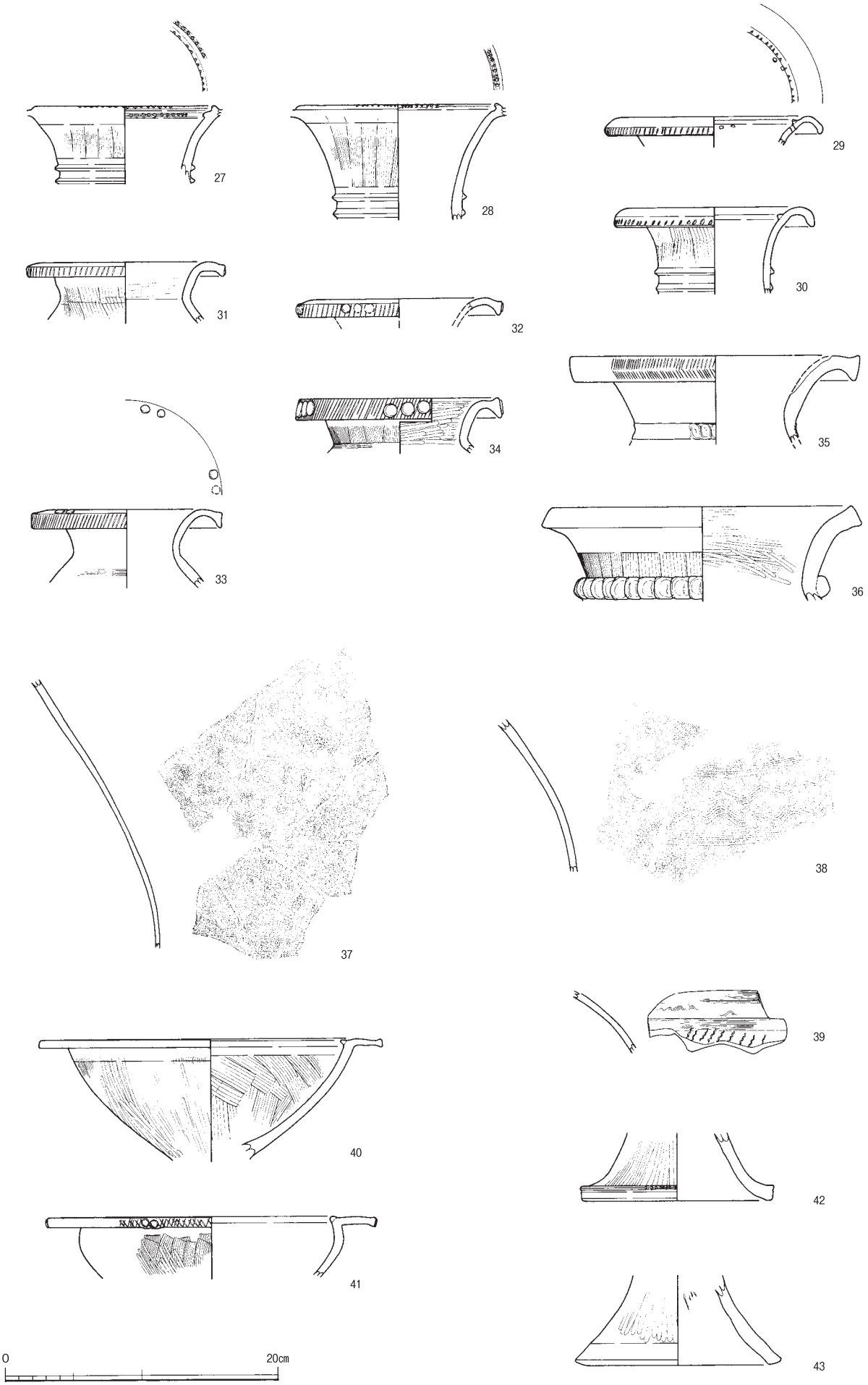


0 20cm

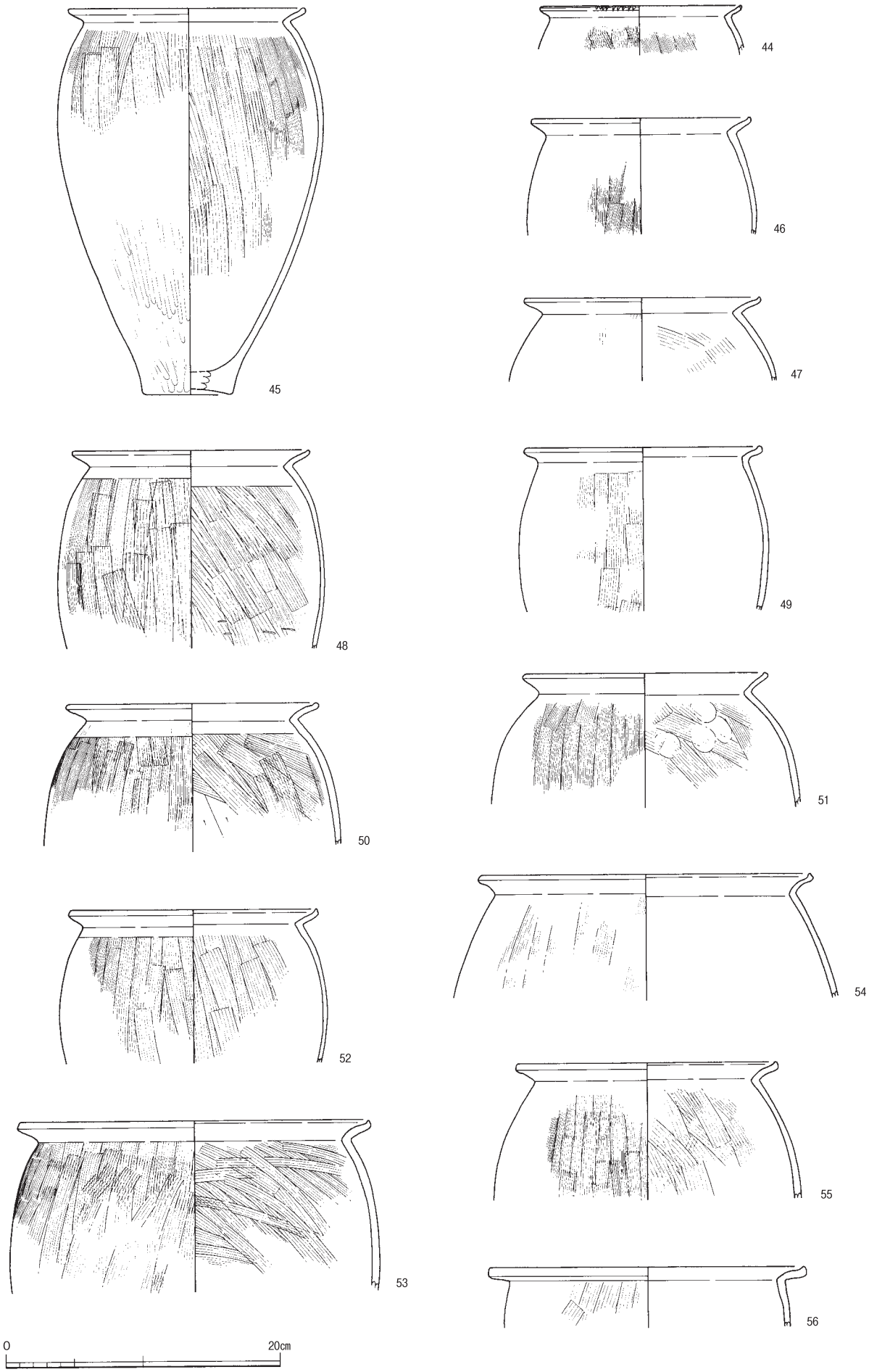
SX-6出土土器（2）



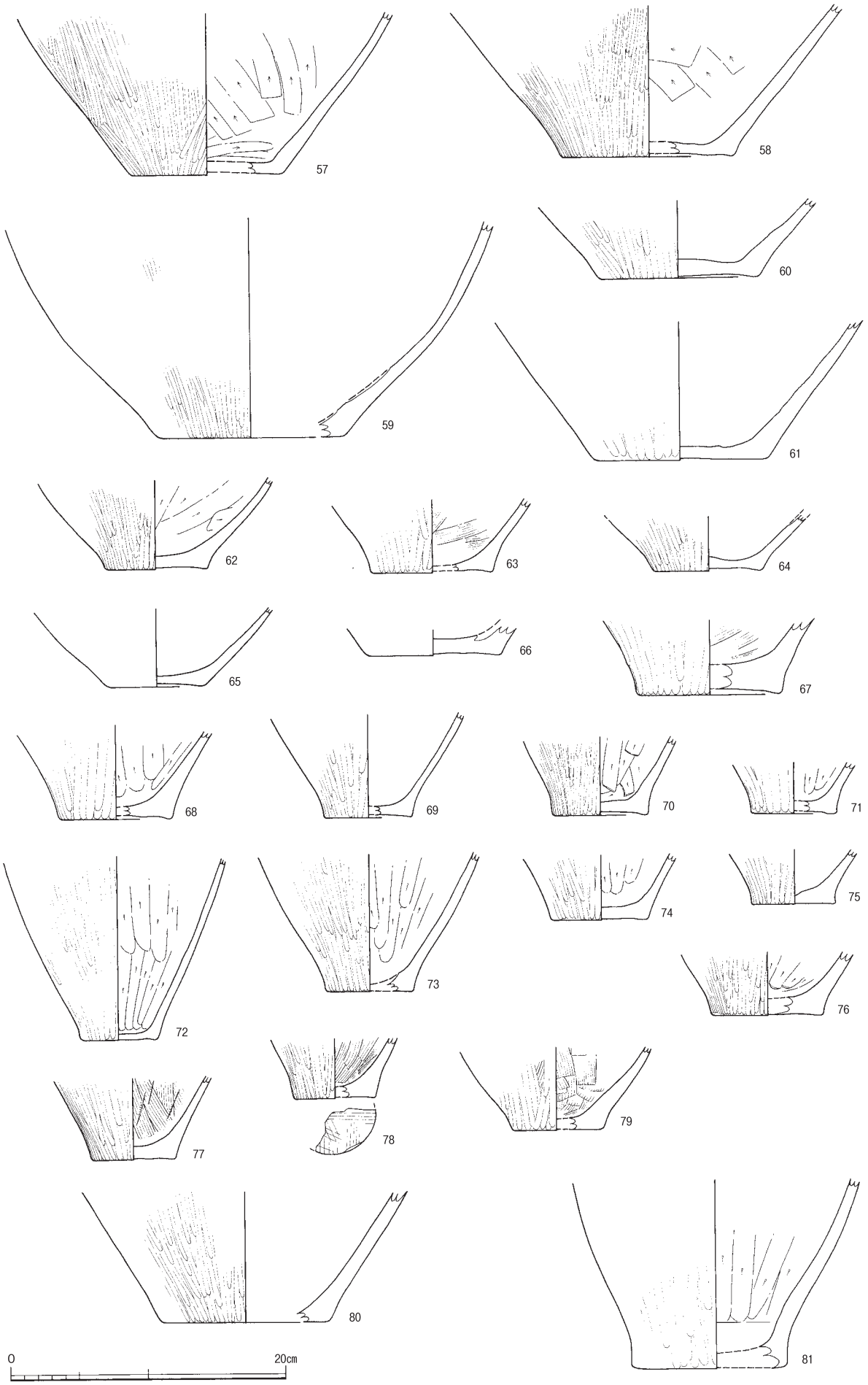
SX-6出土土器（3）



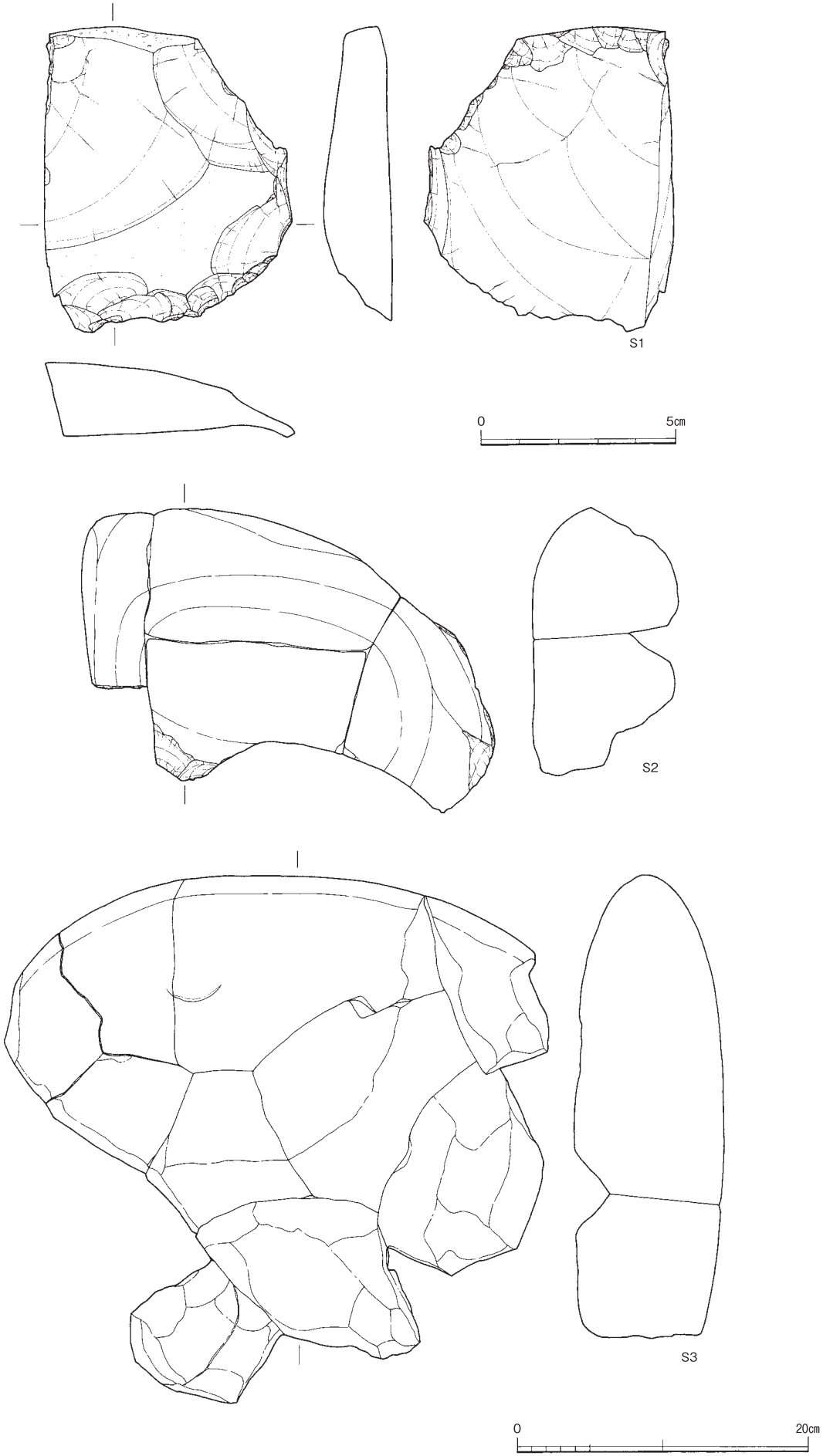
SX-6出土土器（4）



SX-6出土土器（5）

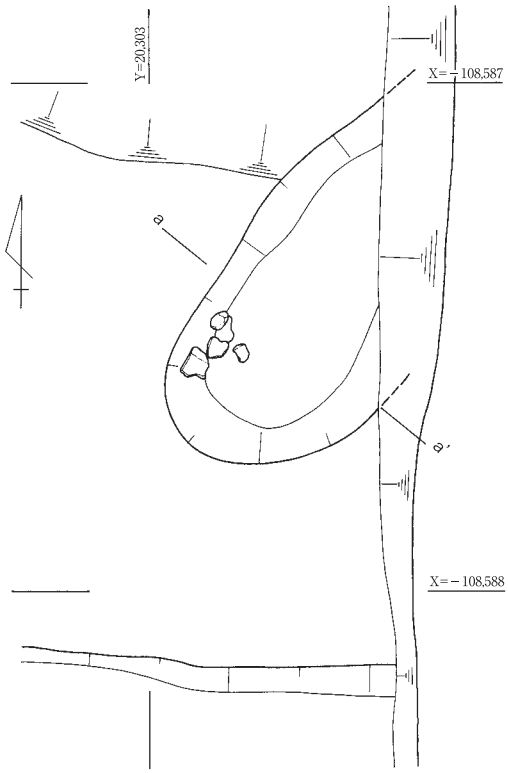

57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
0
20cm

SX-6出土土器（6）

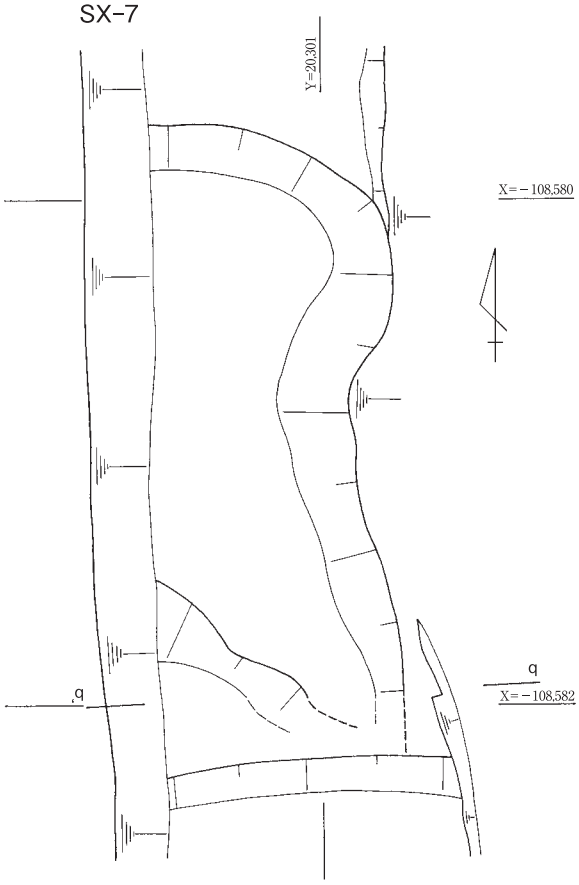


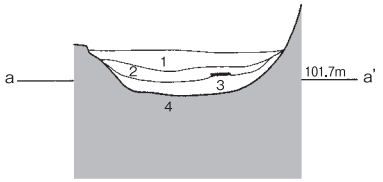
SX-6出土石製品

SX-1

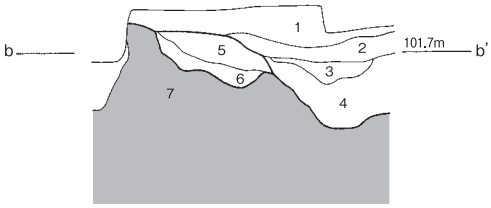


SX-7

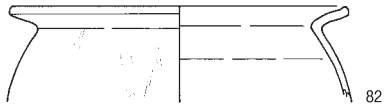




1. 5YR3/2 暗赤褐色　極細砂質細砂　炭化物多く含む
   φ１㎜内外の礫含む
2. 7.5YR3/2 黒褐色　シルトを含む細砂　土器含む
3. 7.5YR3/4 暗褐色　極細砂含む細砂　地山ブロック含む
4. 10YR3/4 暗褐色　細砂　遺構ベース土　細片土器含む

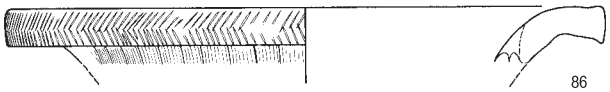


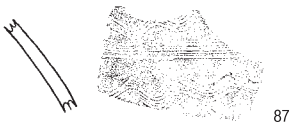
1. 7.5YR3/4～10YR3/4 暗褐色　極細砂まじり細砂
2. 7.5YR3/2 黒褐色～ 5YR3/2 暗赤褐色　極細砂質細砂
3. 7.5YR3/2 黒褐色　極細砂まじり細砂
4. 5YR3/1～7.5YR3/1 黒褐色　細砂質極細砂
5. 7.5YR3/1 黒褐色　極細砂まじり細砂　φ２～３㎜の礫多く含む
6. 7.5YR3/2 黒褐色　シルト質極細砂　マンガン・炭化物含む
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色　極細砂質細砂　マンガン含む　遺構ベース土
8. 5YR3/2 暗赤褐色～ 7.5YR3/2 黒褐色　細砂まじりシルト　撹乱埋土



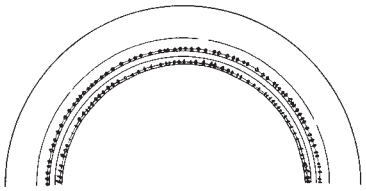
SX-１・７ 平面・断面図、出土土器

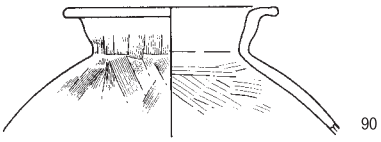
SD-1

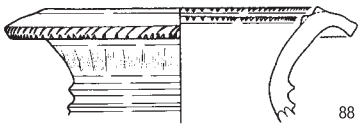


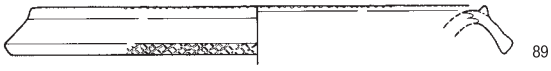


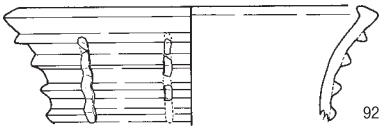
SD-2

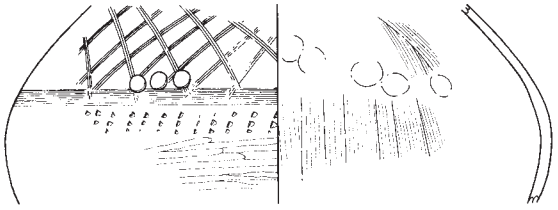


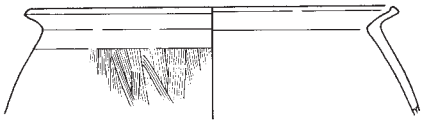


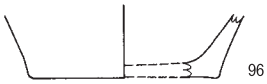


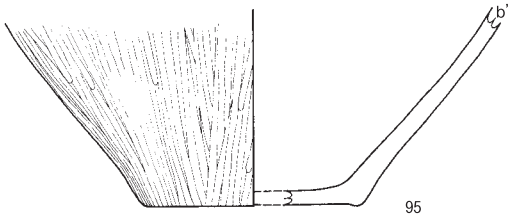




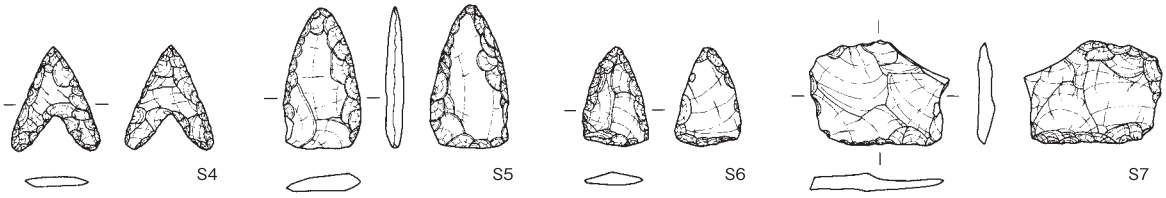






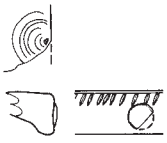


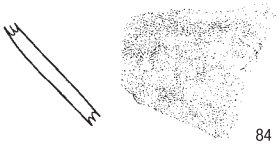
0 20cm

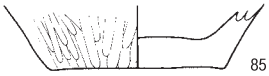


0 5cm

SX-3

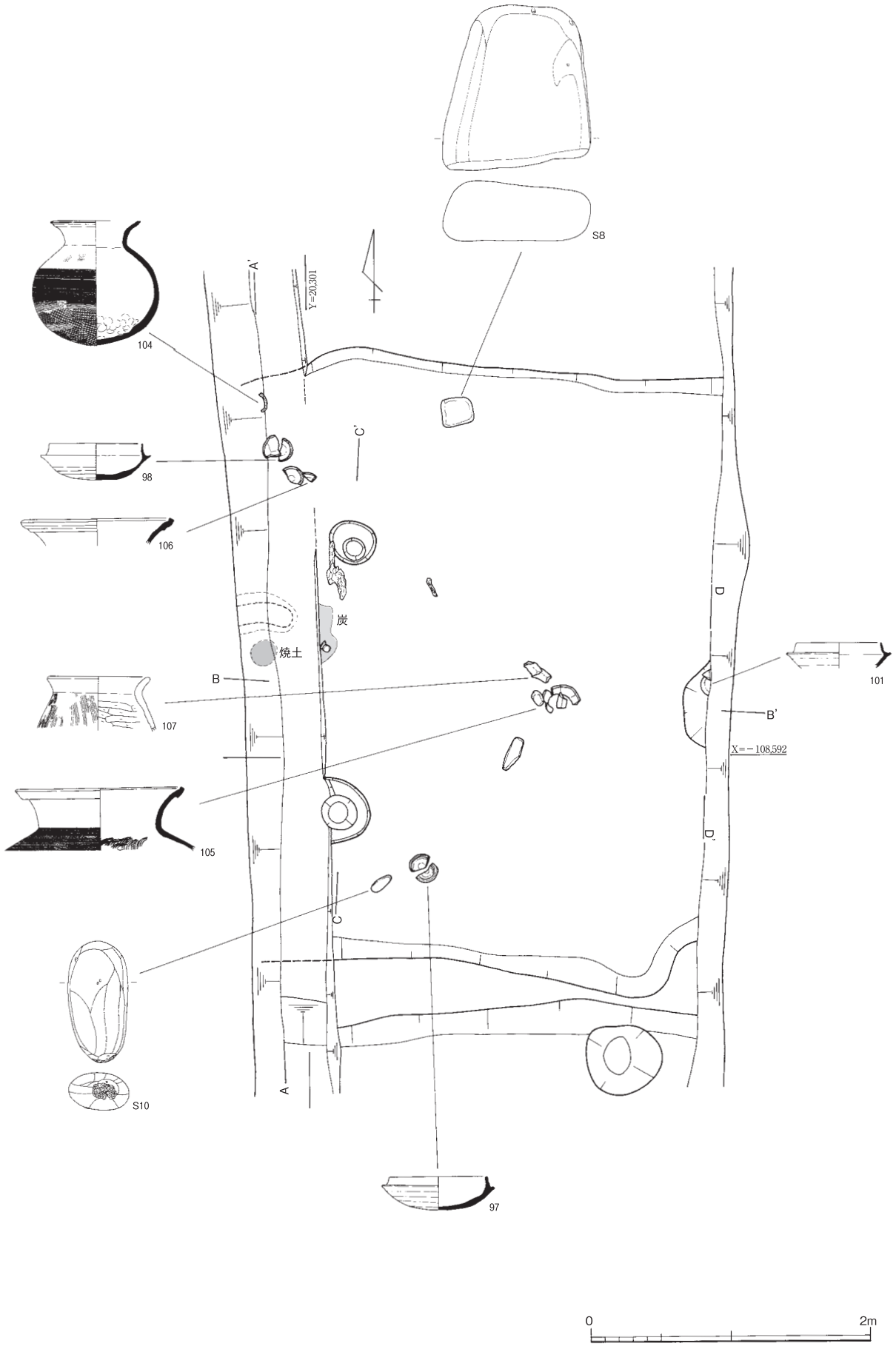




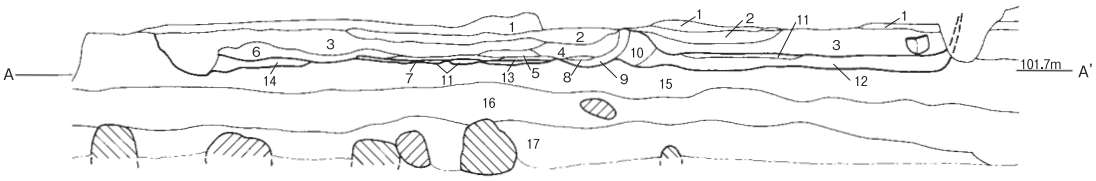


0 20cm

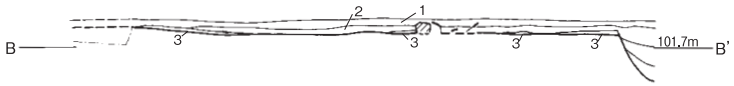
SD-１・２、SX-３出土遺物


S8
104
98
106
107
105
S10
97
101
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
Y=20,301
X=−108,592
焼土
炭
0
2m

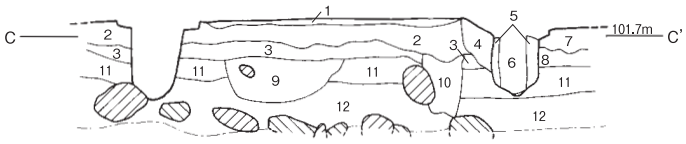
SH−２平面図



1. 10YR4/4 褐色～ 2.5Y4/4 オリーブ褐色　極細砂　旧床土
2. 10YR4/2 灰黄褐色　極細砂質細砂
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト・極細砂含む細砂
4. 5YR4/3 にぶい赤褐色　シルトまじり細砂　竈壁片を多量に含む
5. 7.5YR4/2 灰褐色　細砂まじり極細砂　φ１㎜内外の砂粒含む
6. 10YR4/2 灰黄褐色～ 4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂
7. 10YR4/2 灰黄褐色　極細砂　炭・灰含む
8. 2.5YR4/6 赤褐色　竈内燃焼部　中砂質細砂　朱色を呈する
9. 2.5YR3/3 暗赤褐色　竈内壁　細砂～中砂
10. 5YR4/2 ～ 7.5YR4/2 灰褐色　シルト若干含む細砂　中砂に近い
11. 7.5YR3/2 黒褐色　床面（硬化面）　貼床
12. 7.5YR3/3 暗褐色　極細砂まじり中砂質細砂　褐色極細砂ブロック含む
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂　上面に炭顕著
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂
15. 7.5YR3/3 暗褐色　極細砂まじり中砂質細砂　褐色極細砂ブロック含む
16. 7.5YR3/3 暗褐色　シルトまじり細砂質極細砂　φ１㎝内外の礫含む
17. 10YR3/4～7.5YR3/4 暗褐色　細砂まじり極細砂　マンガン多く含む
旧中州礫はφ30～50㎝大　旧中州礫北側ではシルトまじり細粒砂

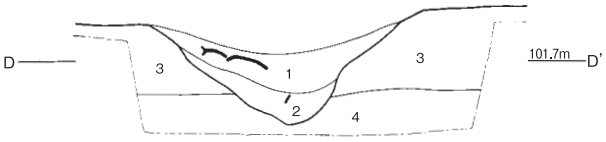


1. 7.5YR4/3 褐色～ 10YR4/3 にぶい黄褐色　極細砂まじり細砂
2. 7.5YR3/3 暗褐色　細砂まじりシルト質極細砂
3. 7.5YR3/2 黒褐色　シルト質極細砂　炭化物含む



1. 10YR4/4 褐色　若干極細砂を含む細砂　床面
2. 10YR3/4 暗褐色　極細砂まじり細砂
3. 10YR3/2 黒褐色　極細砂まじり細砂
4. 7.5YR3/3 暗褐色～ 3/2 黒褐色　中砂質細砂
5. 5YR3/2 暗赤褐色　シルトまじり細砂　柱穴掘形埋土
6. 7.5YR3/3～10YR3/3 暗褐色　極細粒砂まじり細砂　柱痕
7. 7.5YR3/2 黒褐色～ 2/3 極暗褐色　極細砂まじり細砂
8. 7.5YR3/3 暗褐色～ 3/2 黒褐色　中砂質細砂
9. 7.5YR4/3 褐色　シルトまじり極細砂質細砂　土壙？
10. 7.5YR3/2 黒褐色　極細砂まじり細砂　柱穴？
11. 7.5YR3/2 黒褐色　シルトまじり細砂　マンガン含む
12. 7.5YR3/4 暗褐色　細砂まじり極細砂質シルト

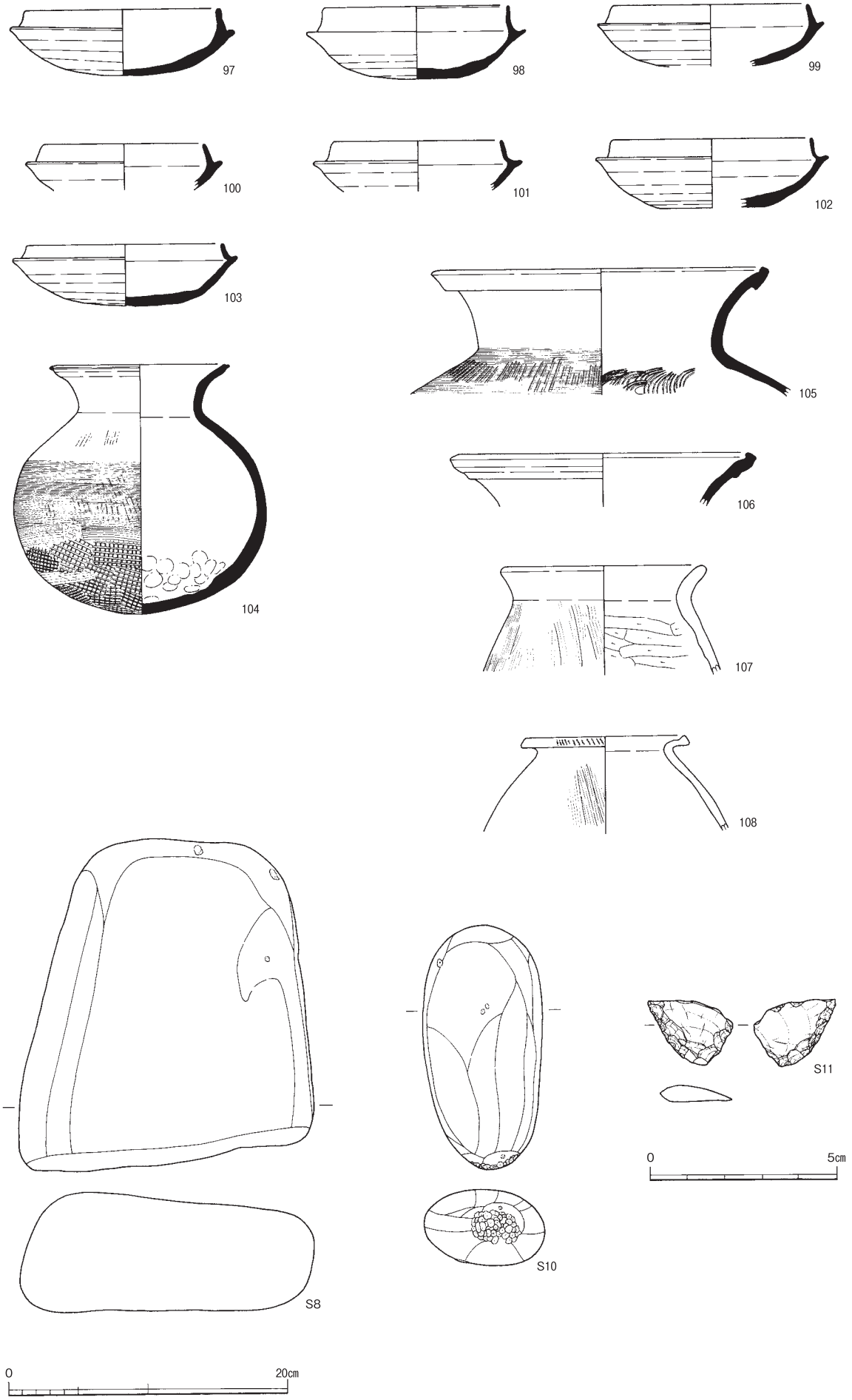
0　2m



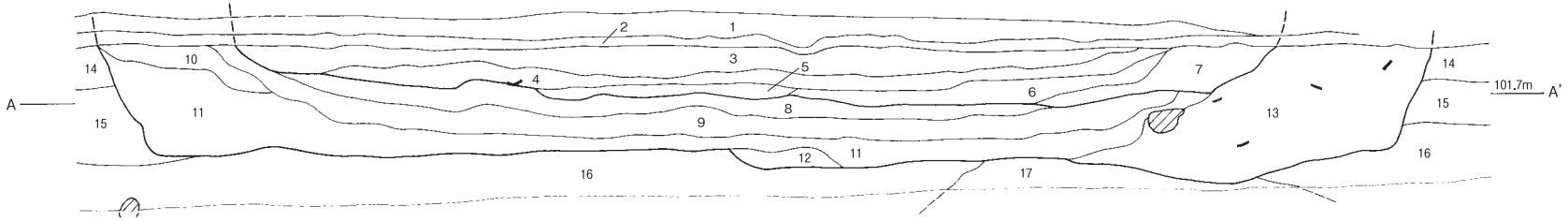
1. 7.5YR3/4 暗褐色　シルトまじり細砂　炭・焼土含む
2. 7.5YR3/2 黒褐色　細砂　３層の再堆積層
3. 7.5YR3/4 暗褐色　極細砂含む細砂
4. 7.5YR3/4 暗褐色　細砂　シルト分まじる　やや粘質

0　1m

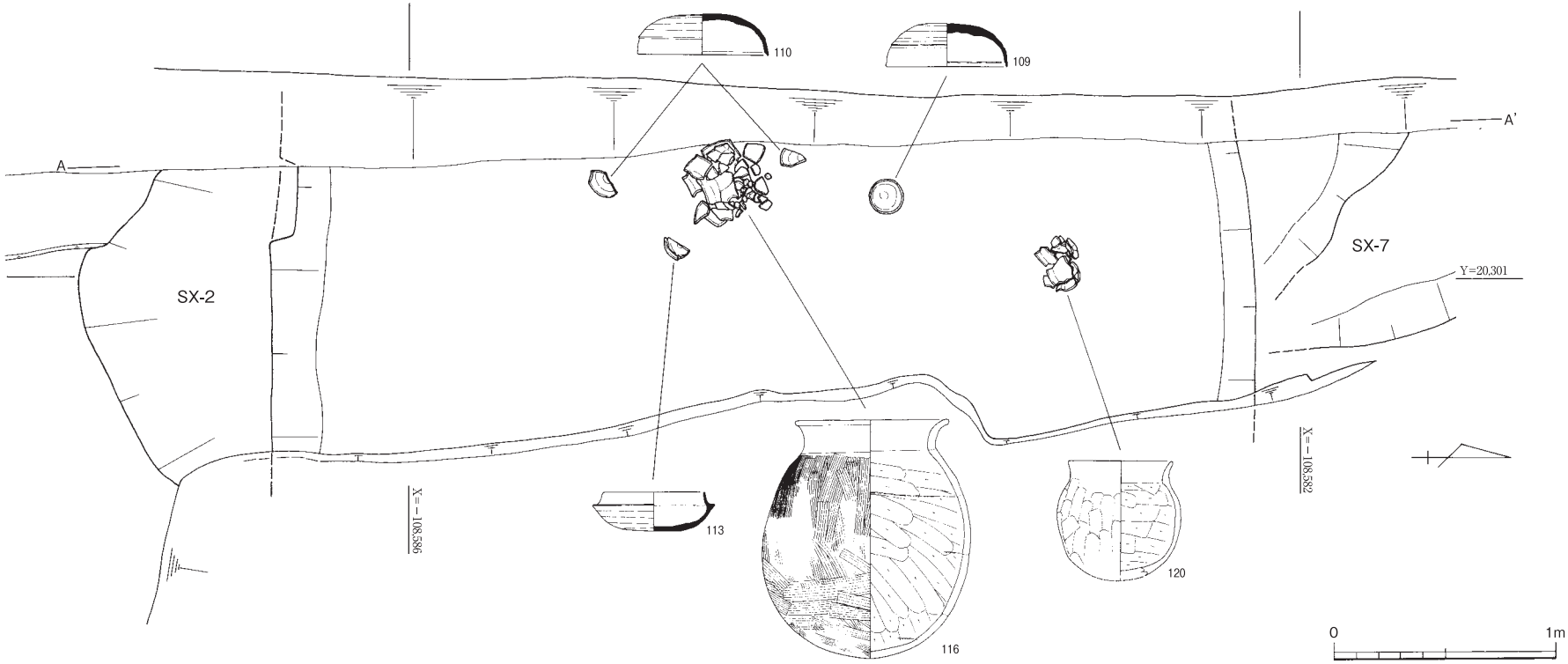
SH-２断面図


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
S8
S10
S11
0
20cm
0
5cm

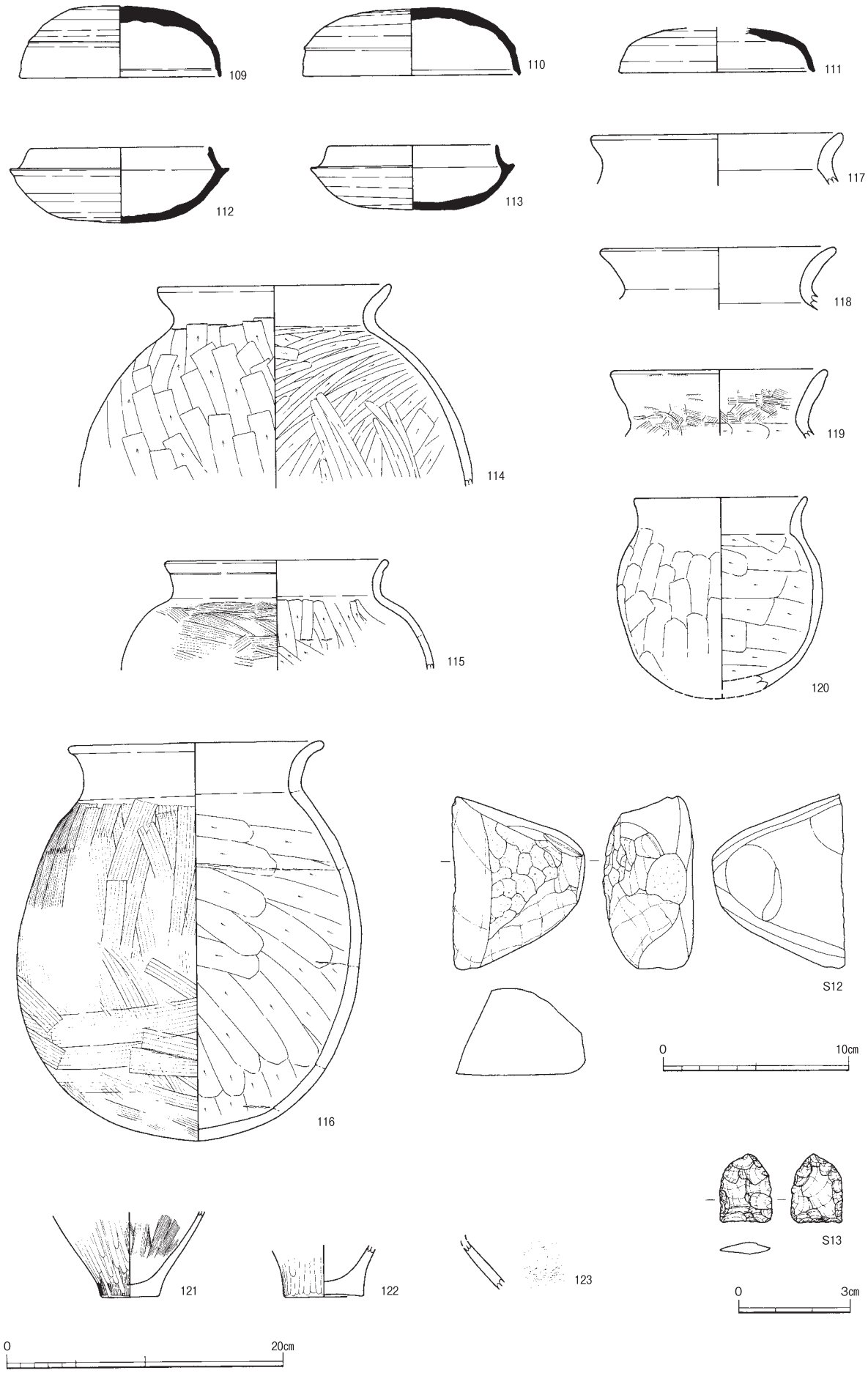
SH-2出土遺物



1. 2.5YR4/2 暗灰黄色　極細砂　旧耕土
2. 10YR4/4 褐色～2.5Y4/4 オリーブ褐色　極細砂　鉄分集積　旧床土
3. 7.5YR3/4 暗褐色　細砂まじり極細砂　マンガン含む　ＳＨ－04 埋土
4. 10YR3/2 黒褐色～3/3 暗褐色　シルト・細砂まじり極細砂　炭化物を多く含む　ＳＨ－04 埋土
5. 7.5YR3/3 暗褐色　シルトを含む極細砂　ＳＨ－04 埋土
6. 10YR4/4 褐色　極細砂　若干炭含む　ＳＨ－04 埋土
7. 10YR4/4～4/6 褐色　極細砂質シルト　ＳＨ－04 埋土
8. 10YR4/4～4/6 褐色　極細砂質シルト　精良　掘形埋め土（床構成土）
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色　極細砂質細砂　掘形埋め土
10. 7.5YR4/3 褐色　細砂まじり極細砂　φ１㎜弱の砂粒含む　掘形埋め土
11. 7.5YR3/2 黒褐色～3/3 暗褐色　細砂まじり極細砂　マンガン・有機物・炭化物含む　掘形埋め土
12. 5YR3/2 暗赤褐色　シルト含む細砂　掘形埋め土
13. 5YR3/2 暗赤褐色　シルト・極細砂まじり細砂　炭化物含む　掘形埋め土
14. 10YR4/4 褐色～4/3 にぶい黄褐色　細砂まじり極細砂　マンガン多く含む　鉄分含む
15. 10YR4/4 褐色　細砂質中砂
16. 7.5YR3/3 暗褐色　シルトまじり細砂質極細砂　φ１㎝内外の礫含む　マンガン多く含む
17. 7.5YR4/4 褐色　極細砂質細砂　基盤層



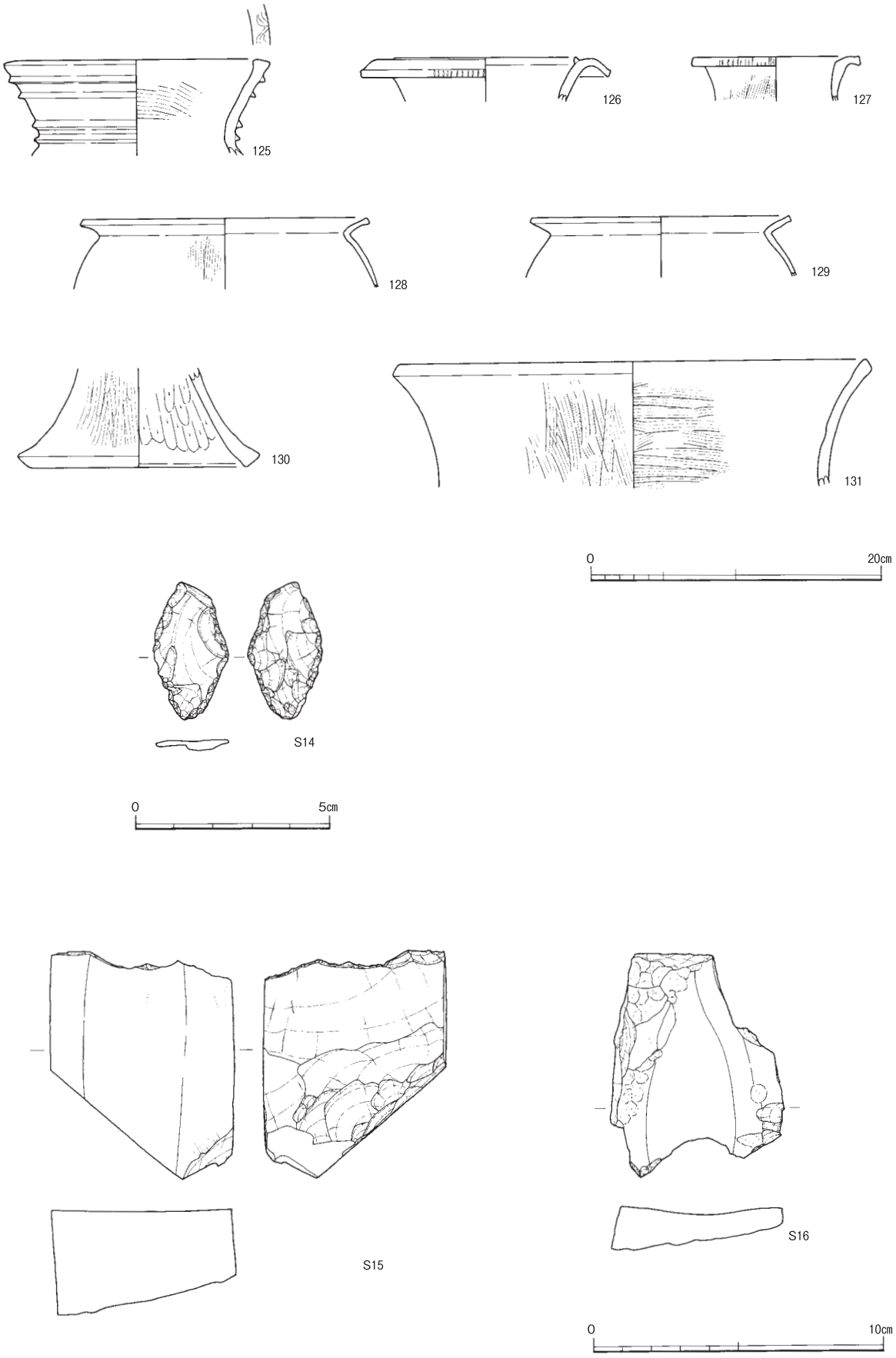
SH-４平面・断面図


109
110
111
112
113
117
118
114
119
115
120
116
S12
0
10cm
121
122
123
S13
0
3cm
0
20cm

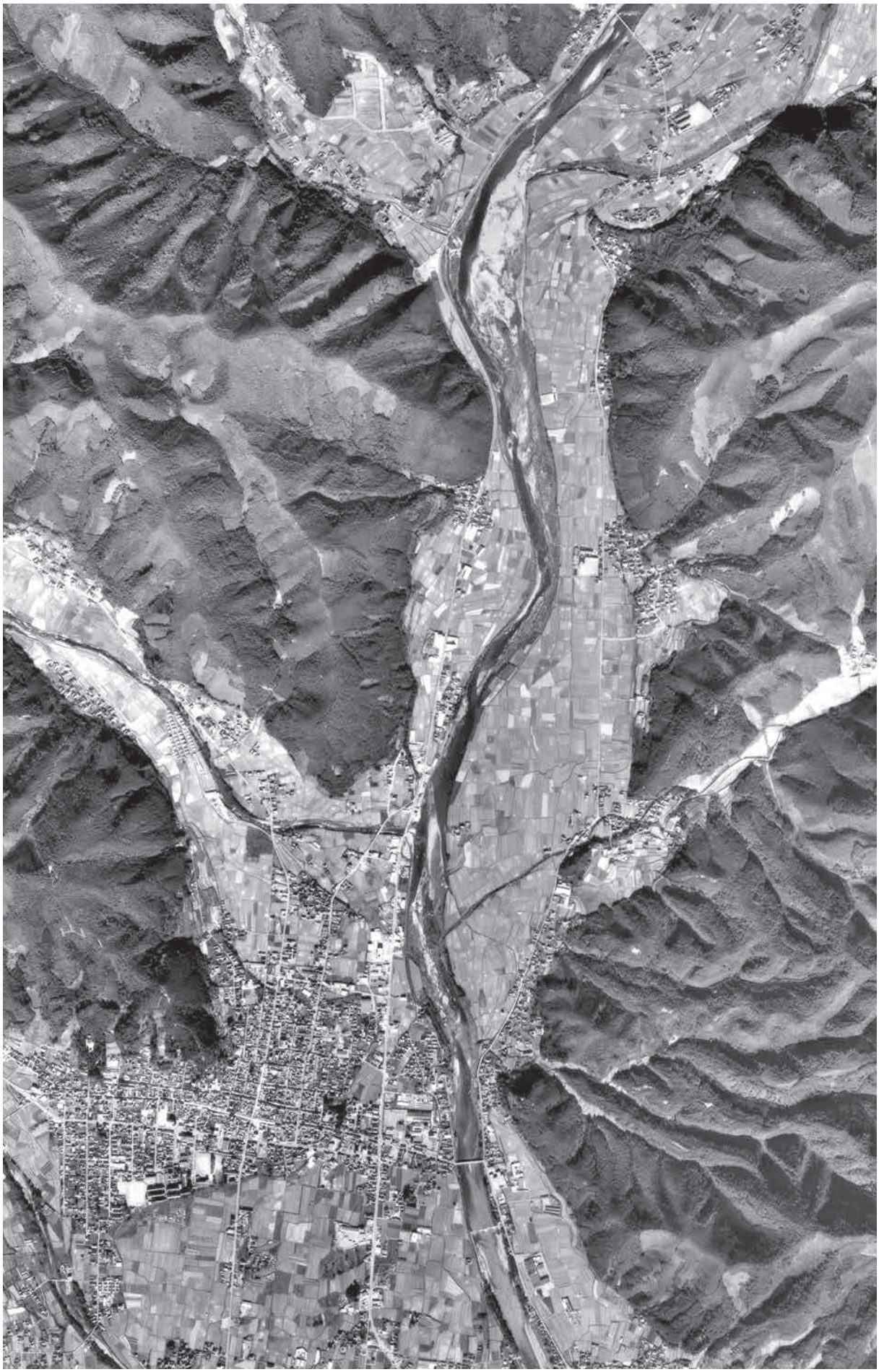
SH-4出土遺物

Y=20,301
Y=20,303
124
0
10cm
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
P-12
X=−108,552
X=−108,555
X=−108,558
0
2m

調査区北部中世遺構



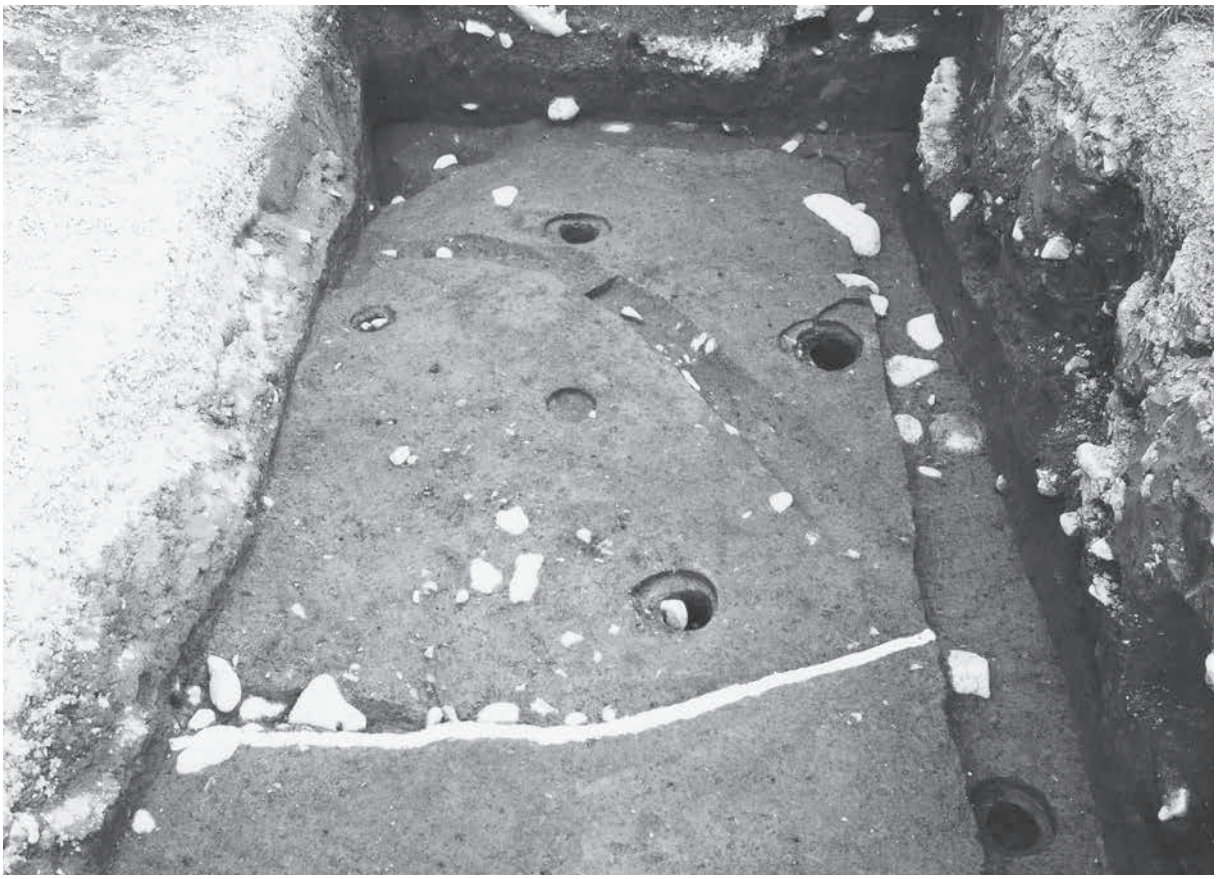
包含層出土遺物



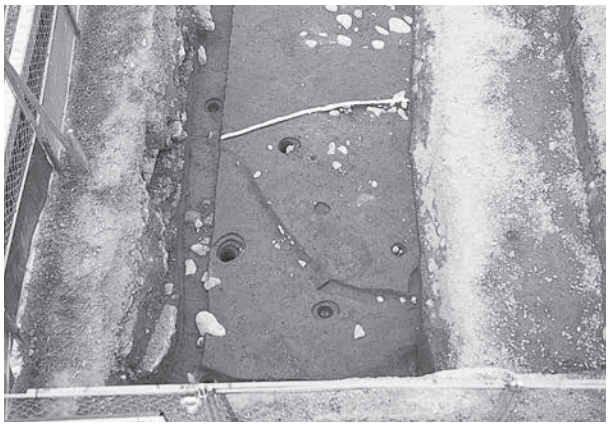
航空写真

調査区全景（北から）

調査区南部全景（北から）



SH-１全景（北から）



①　SH-１全景（南から）

②　SH-１内屋内溝（北西から）

③　SH-１内地床炉断割断面（西から）

④　調査区南半部全景（北から）

SX-６土器出土状況（東から）

SD-２土器・礫出土状況（南西から）

SX-３土器出土状況（南から）

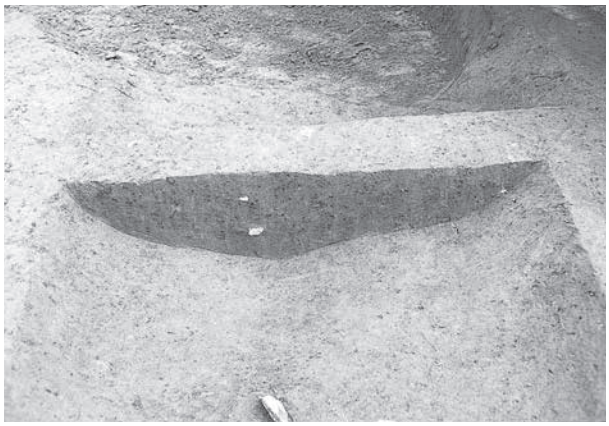
SD-１中央部土器出土状況（北から）

① SX-６埋土断面（北から）

② SX-１埋土断面（南西から）

③ SX-１土器出土状況（北東から）

④ SX-３埋土断面（南から）

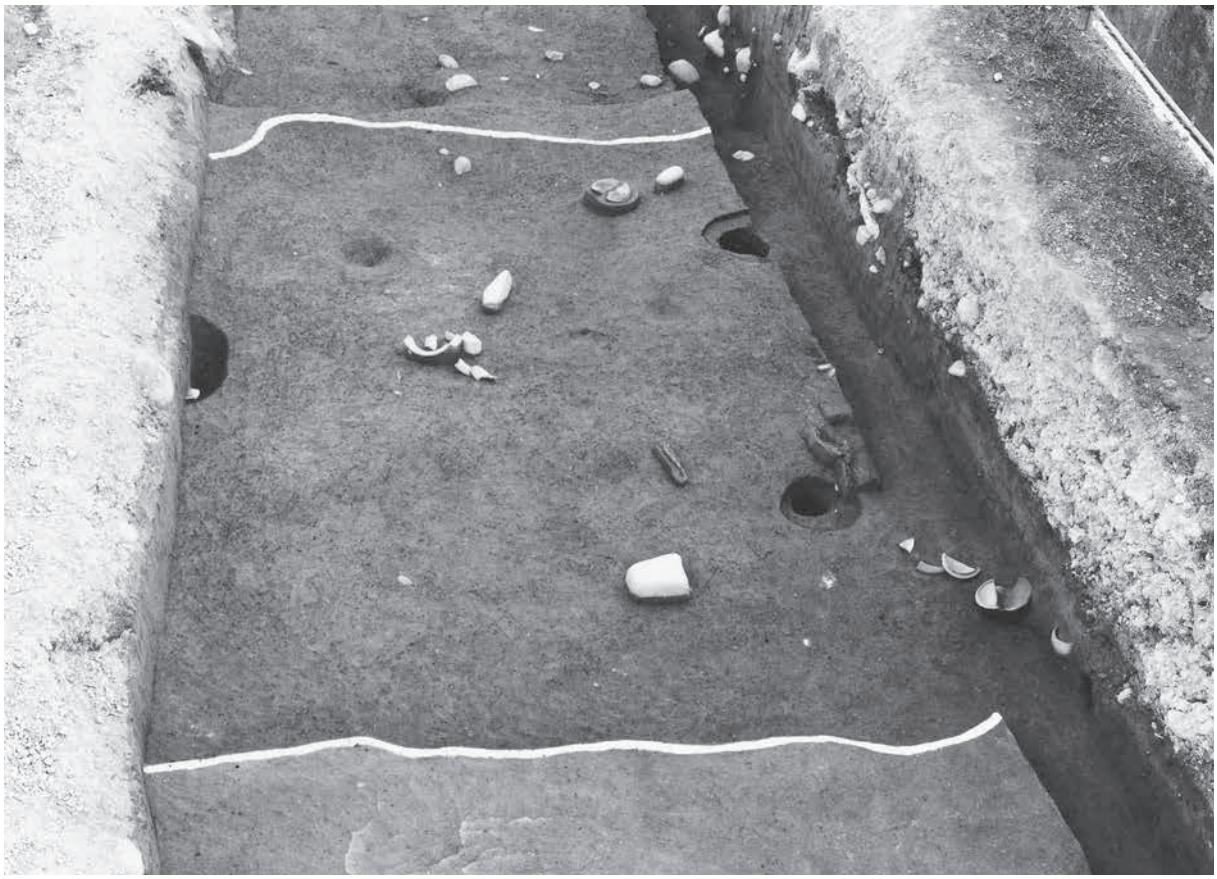


⑤ SD-１埋土断面（南から）

⑥ SD-２埋土断面（南から）

⑦ SD-２下層礫出土状況（北西から）

⑧ SD-２完掘状況（北から）

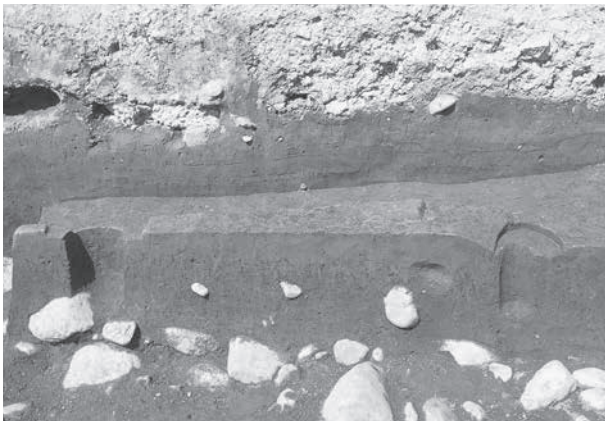


SH-２全景（北から）

①　SH-２埋土断面（南東から）

②　SH-２内土壙埋土断面（西から）

③　SH-２埋土断面（東から）



④　SH-２柱穴部分土層断面（東から）

SH−２床面北西部土器出土状況（東から）

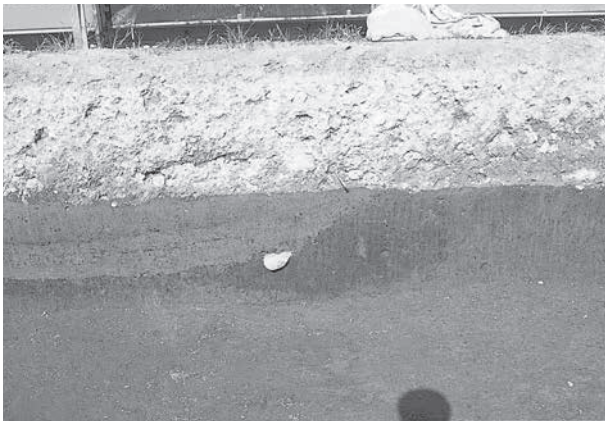
SH−２床面中央部土器等出土状況（南から）

SH-４床面中央部土器出土状況（東から）

①　SH-４全景（東から）

②　SH-４床面土器出土状況（南から）

③　SH-４埋土断面（東から）



④　SH-４北部埋土断面（東から）

① 調査区北端部柱穴等（北から）

② 調査区北端部柱穴等（南西から）

③ 調査区全景（下層掘削後・北から）

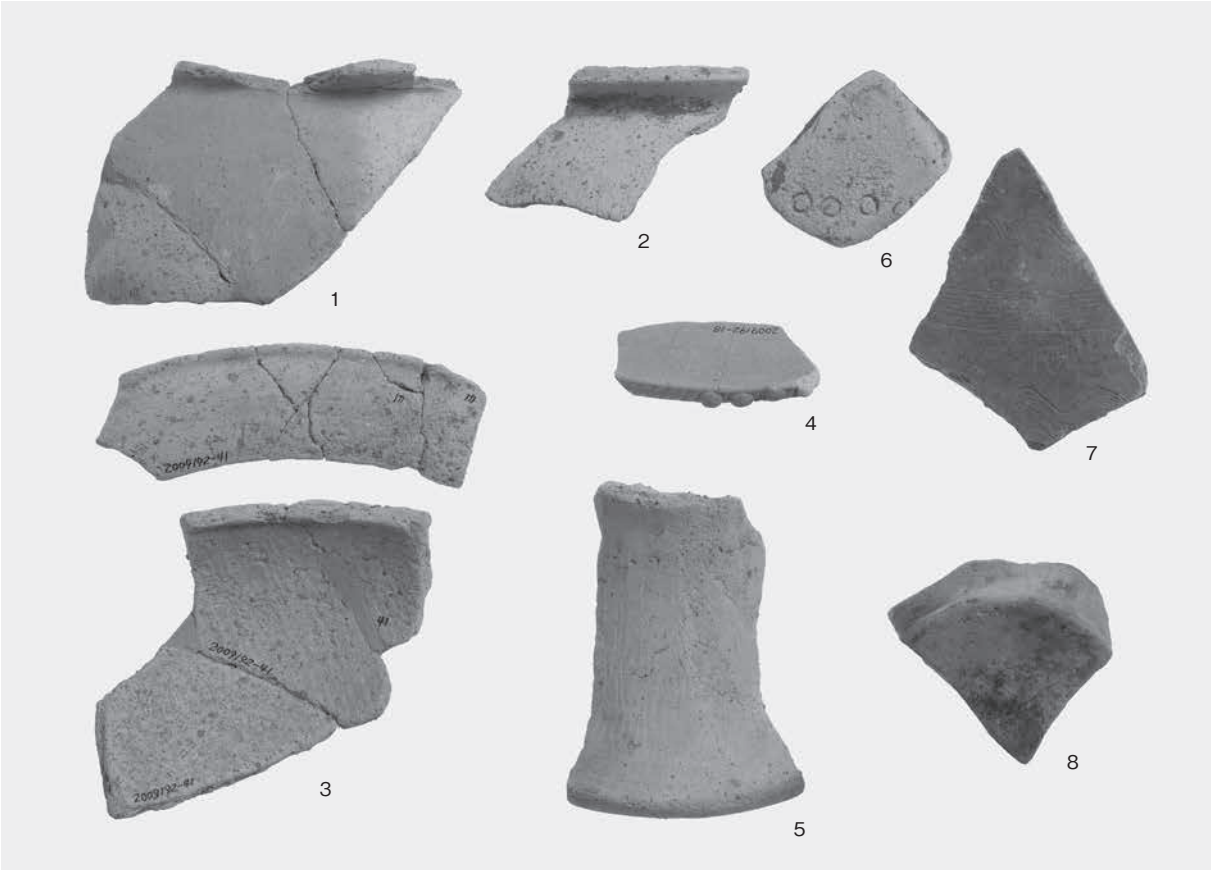
④ 調査区全景（下層掘削後・南から）

⑤ 調査区西壁土層断面１（南東から）

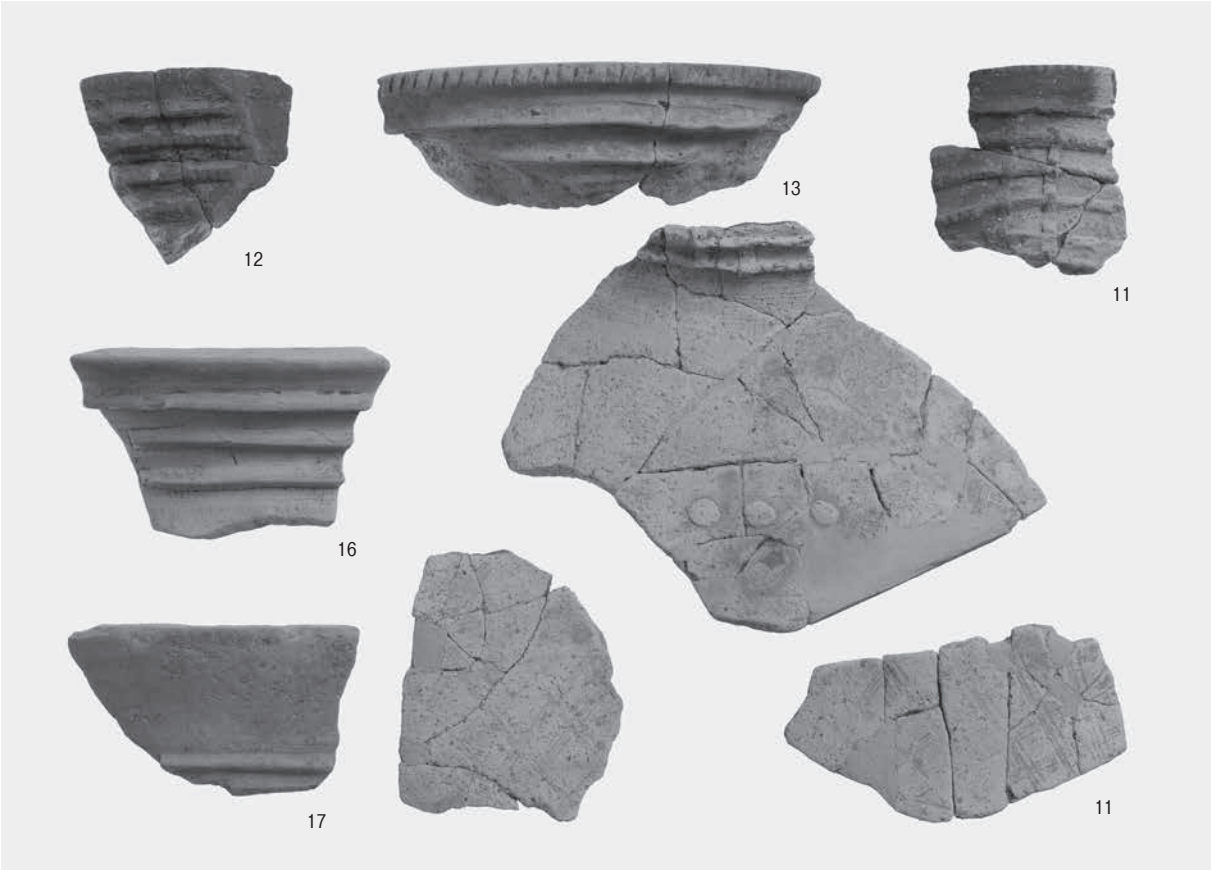
⑥ 調査区西壁土層断面２（南東から）

⑦ 調査区西壁土層断面３（南東から）

⑧ 調査区西壁土層断面４（南東から）



SH-1出土土器



SX-6出土壺（1）

9

10

11

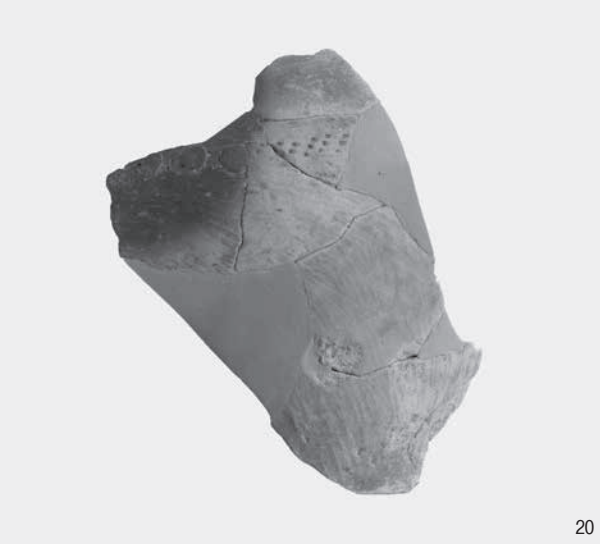
15

21

14

18

19


20

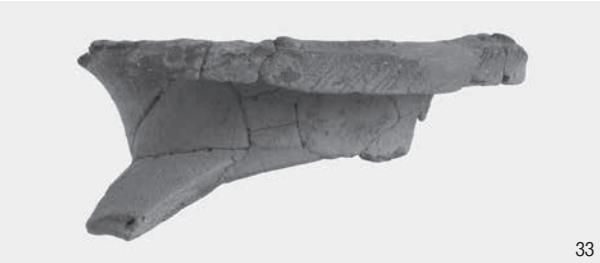
SX-６出土壺（２）

22

25

26

30


33

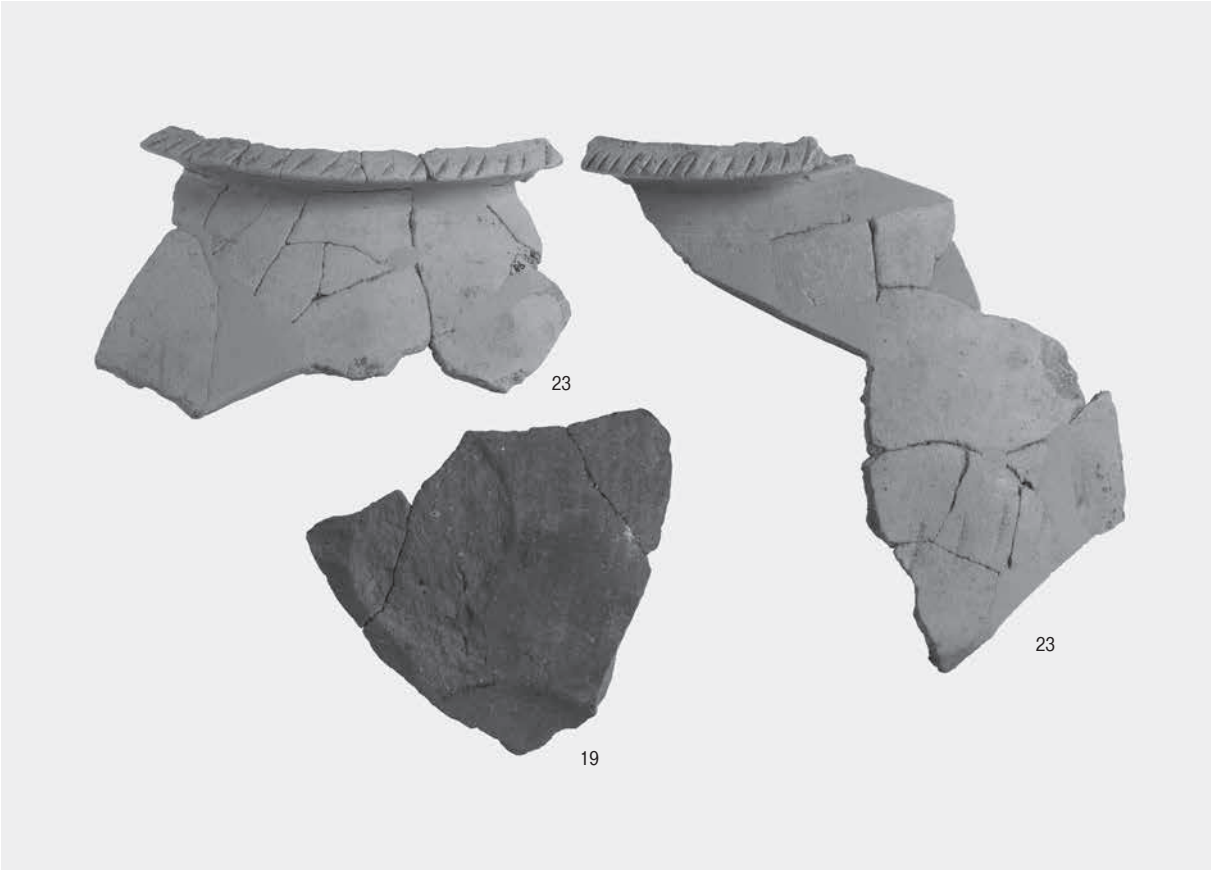
34

36

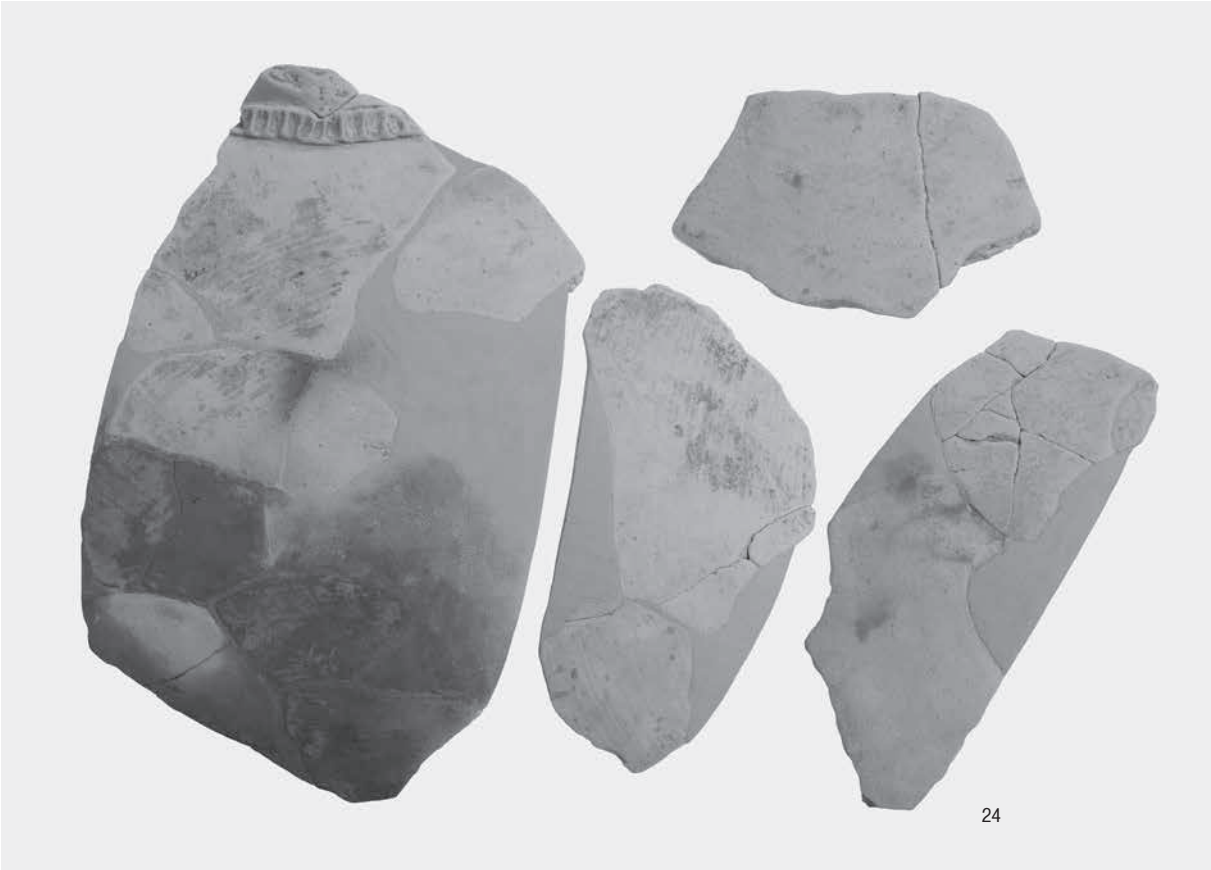
37

38

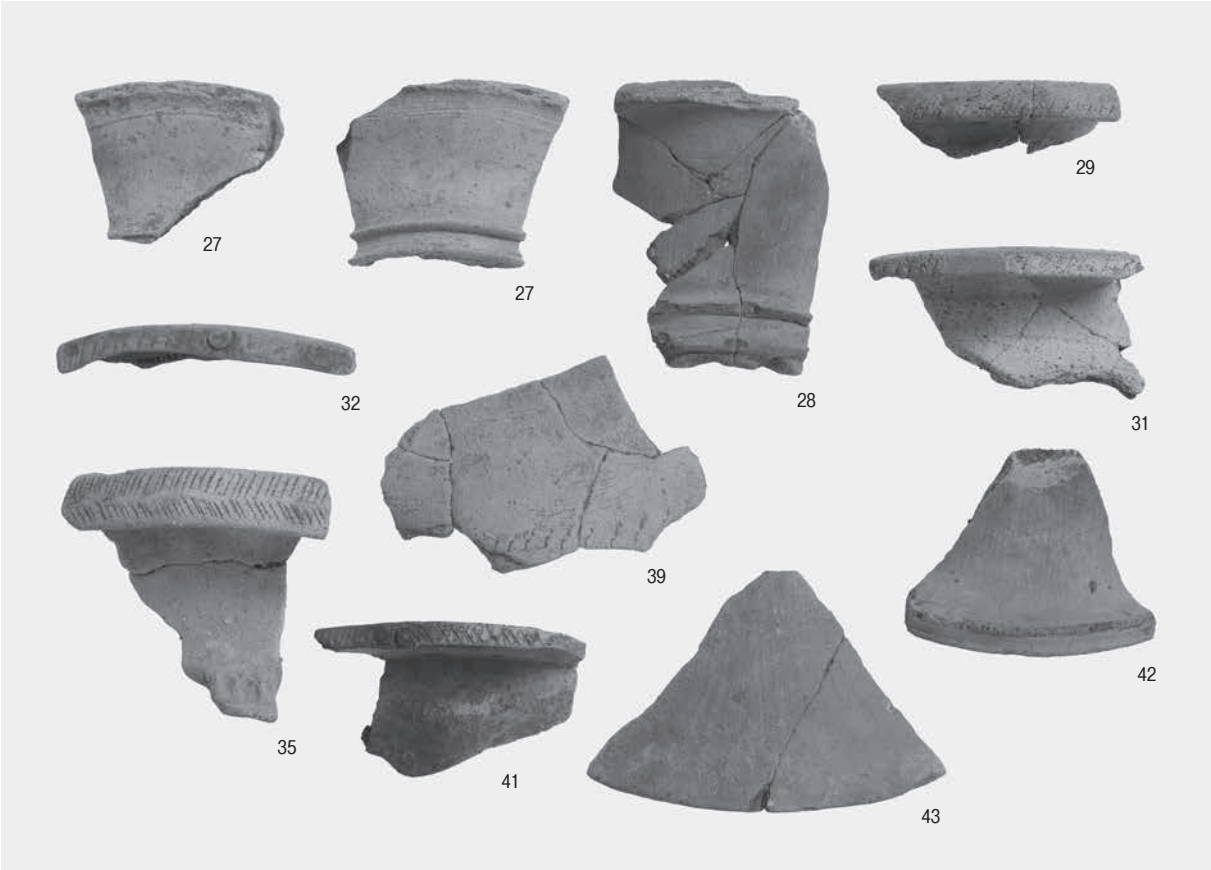
SX-6出土壺（3）



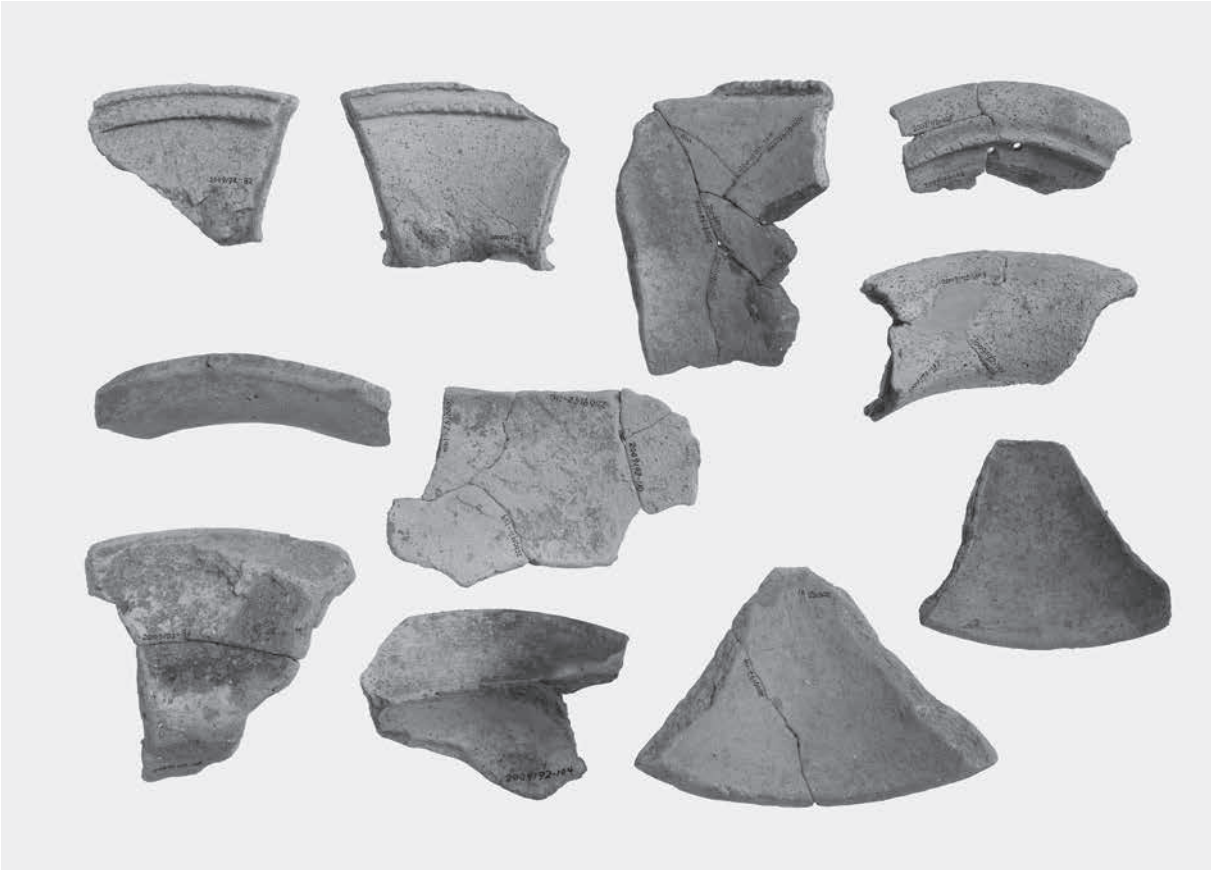
SX-６出土壺（４）



SX-６出土壺（５）



SX-６出土土器（外面）



SX-６出土土器（内面）

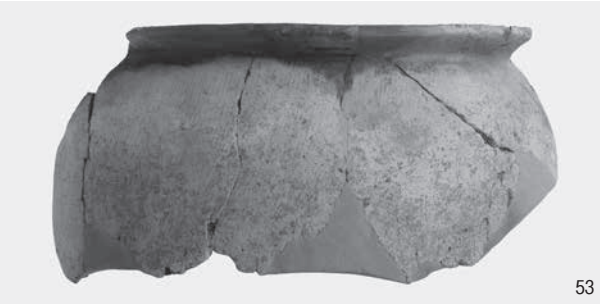
40

45

46

50

51


53

54

58

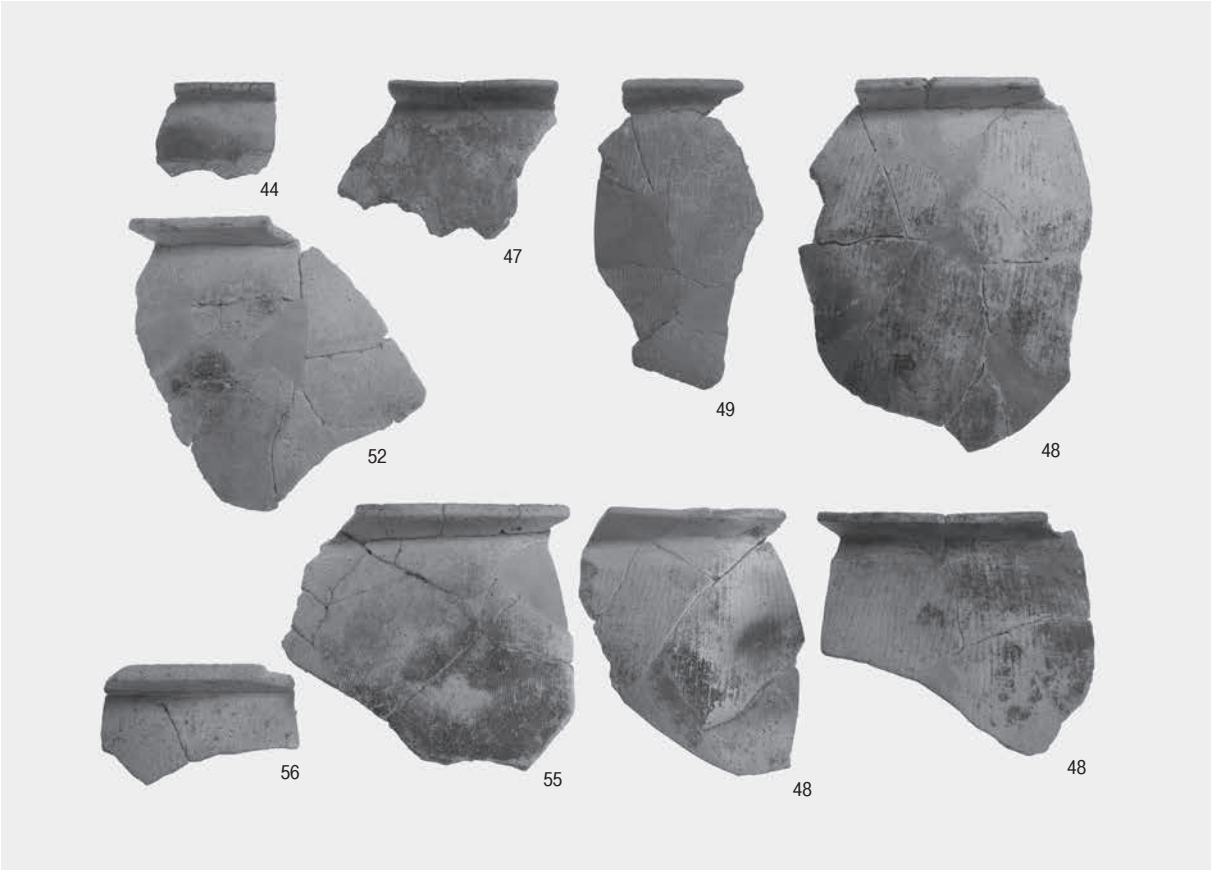
65

67

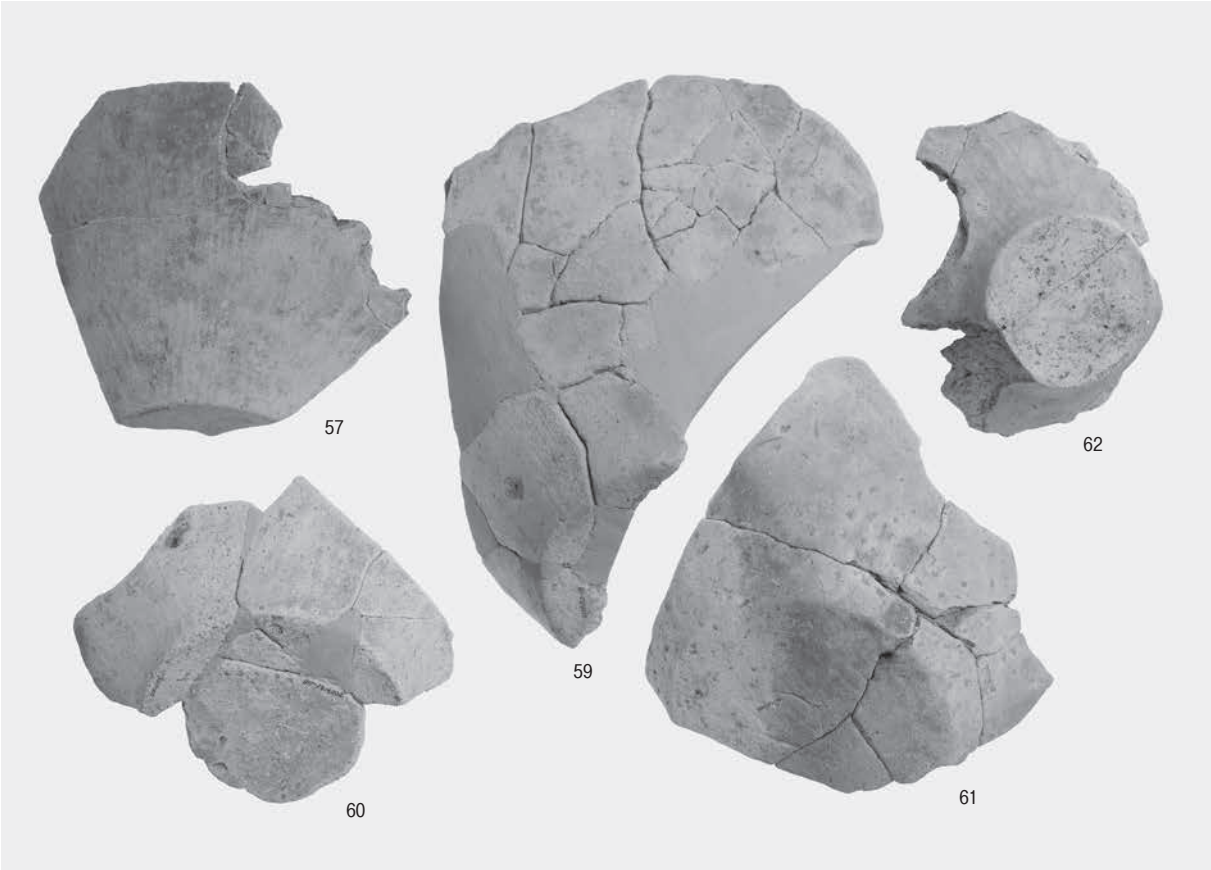
72

SX-６出土高坏・甕（１）・底部（１）

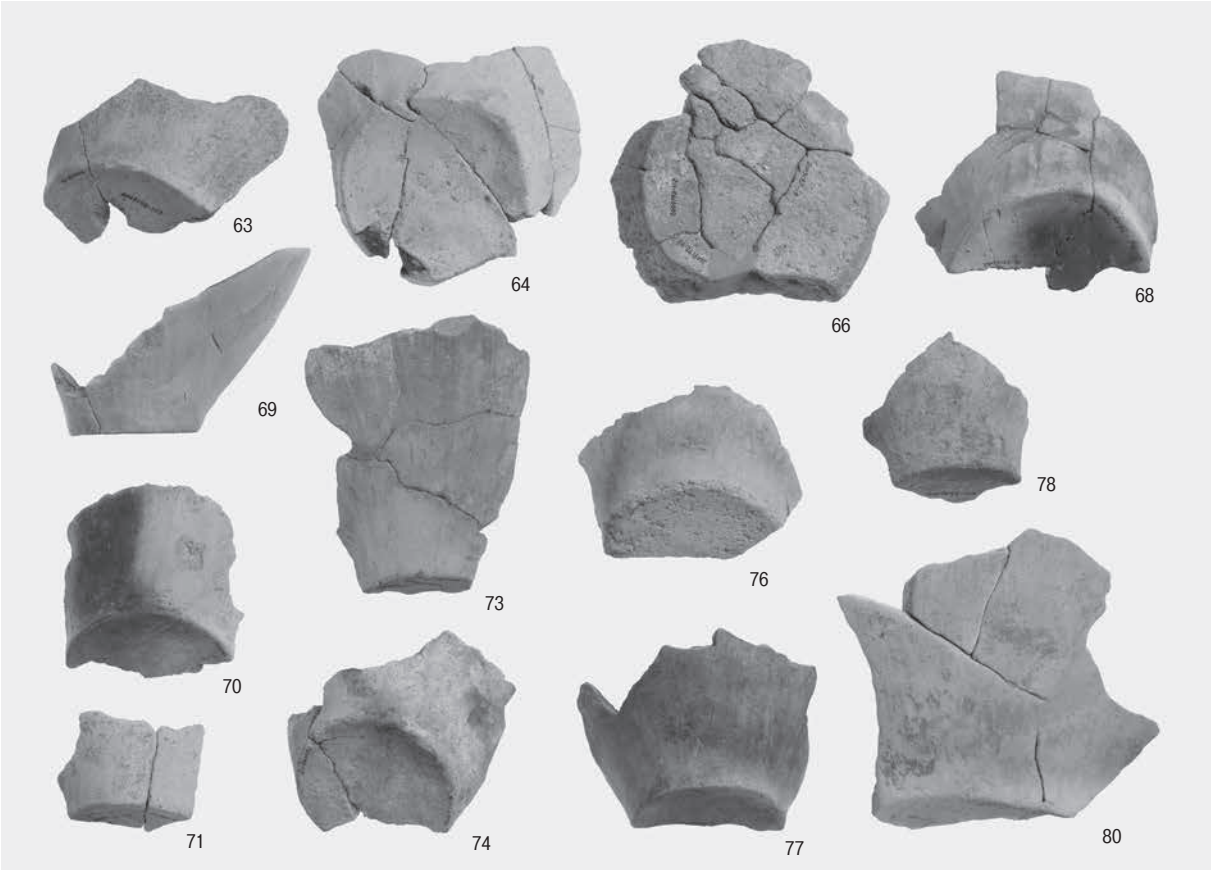
SX-６出土底部（２）



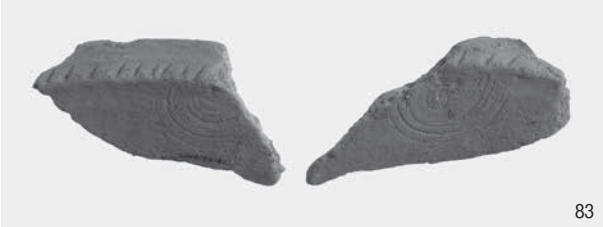
SX-６出土甕（２）



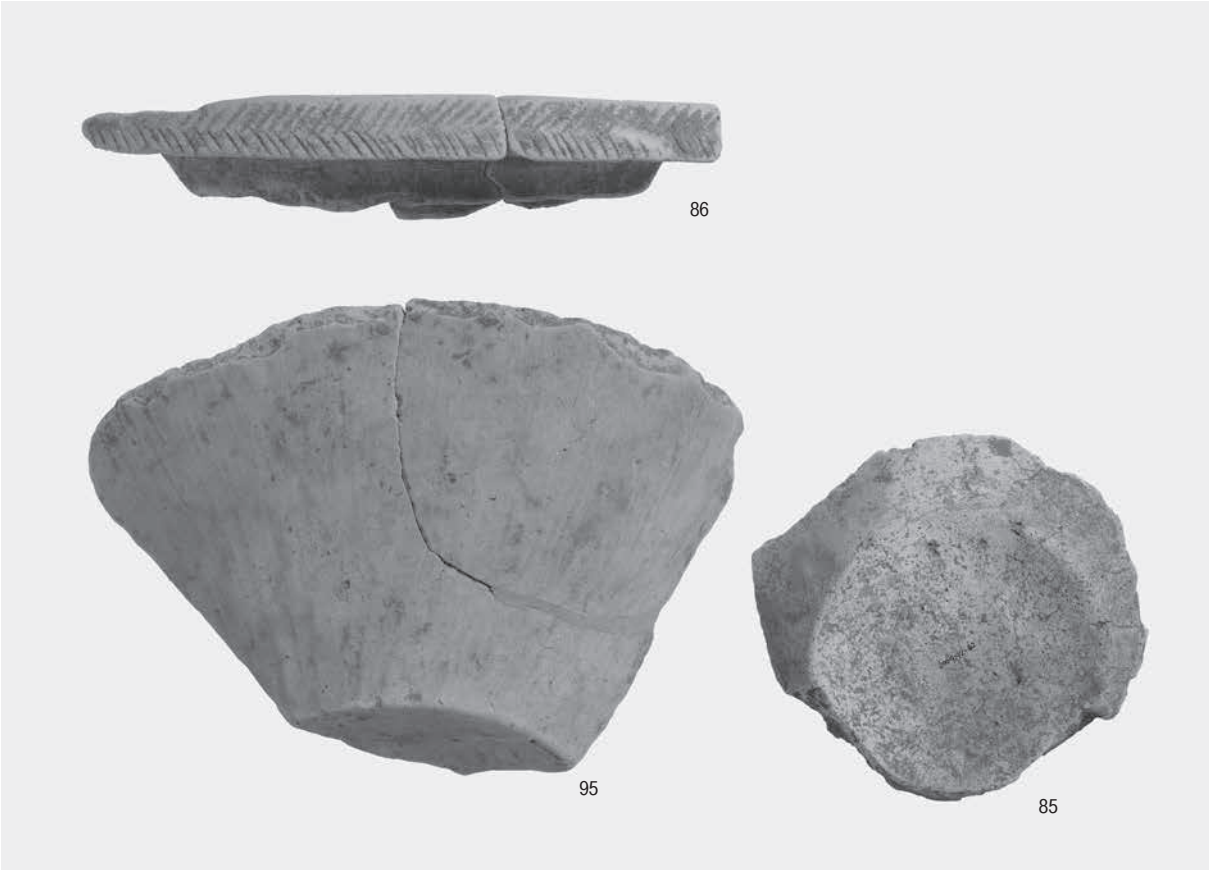
SX-６出土底部（３）



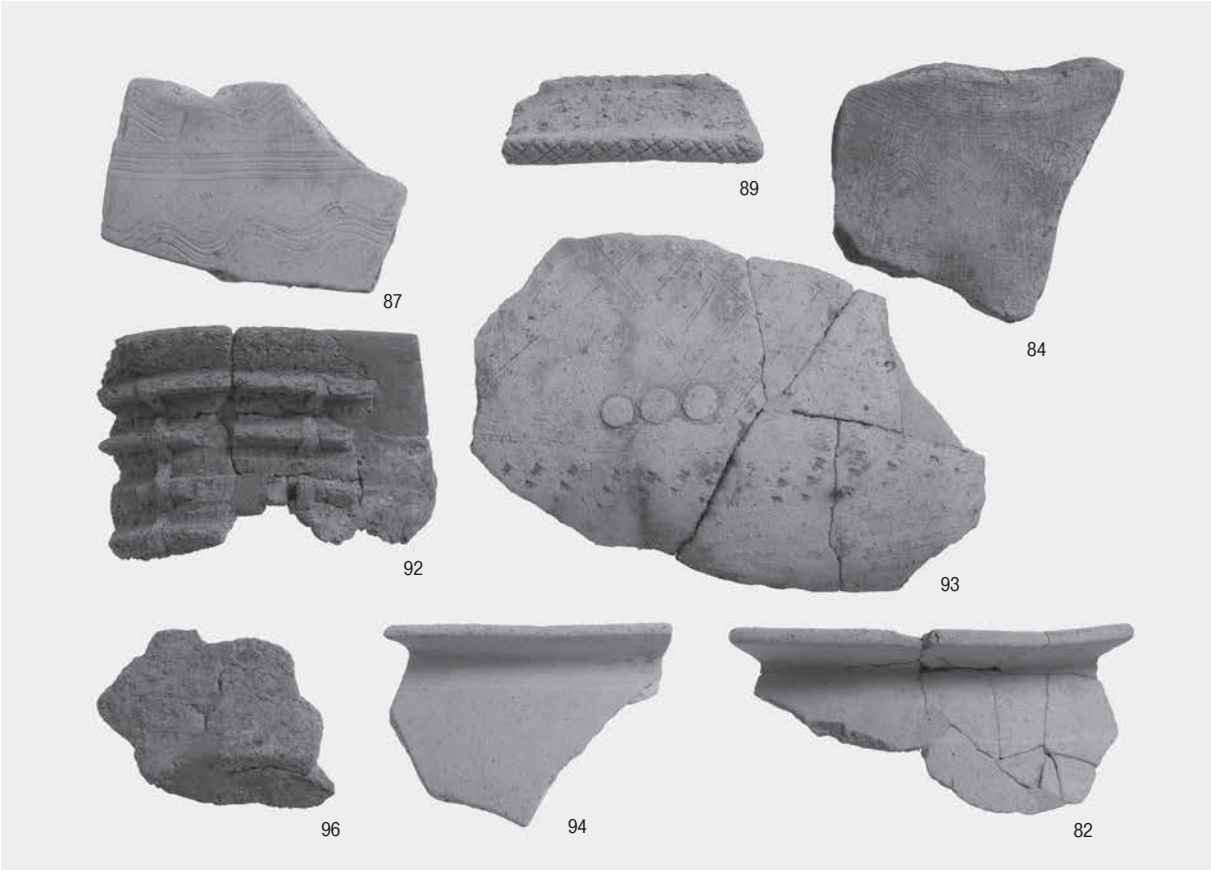
SX-６出土底部（４）



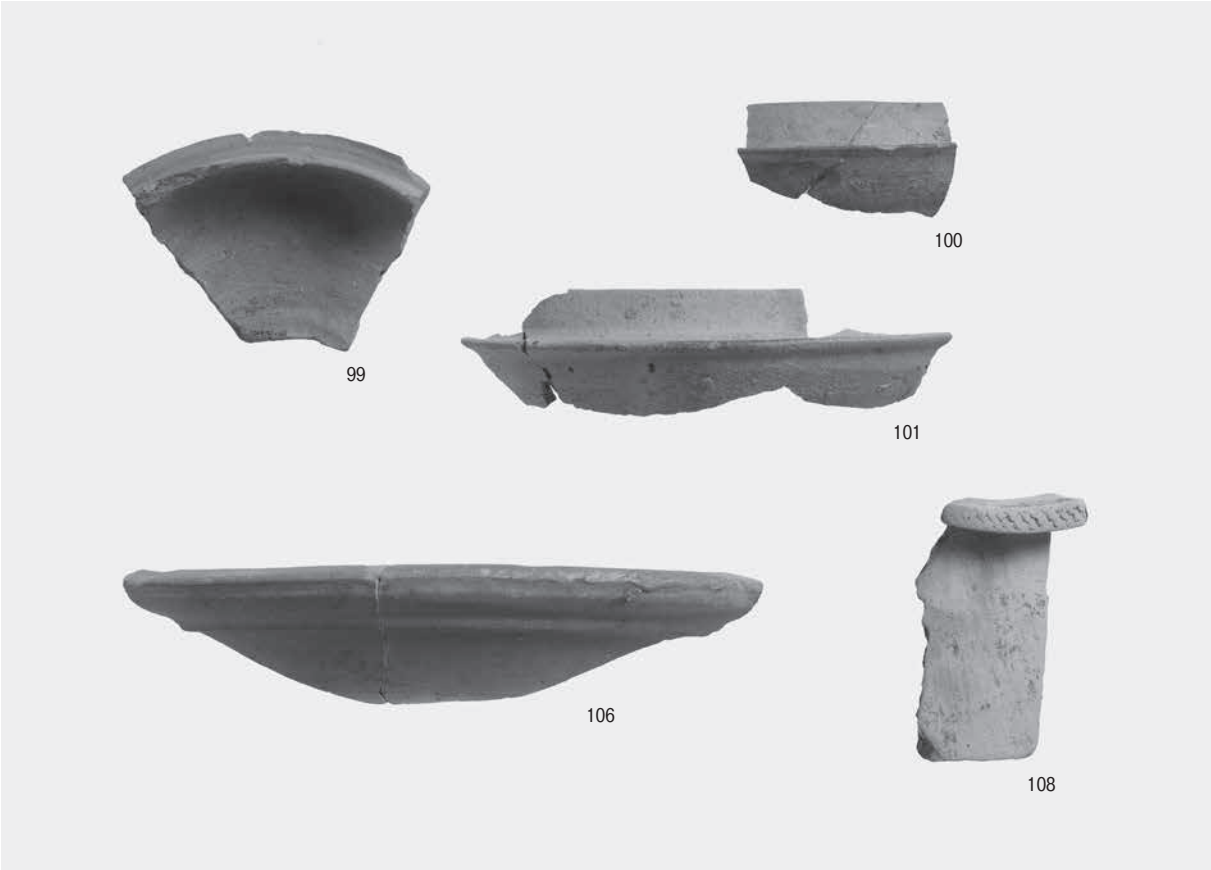
SD-２・SX-３出土壺



SD-１・SD-２・SX-３出土土器



SD-１・２、SX-１・３出土土器



SH-２出土土器

97

98

102

103

104

105

109

110

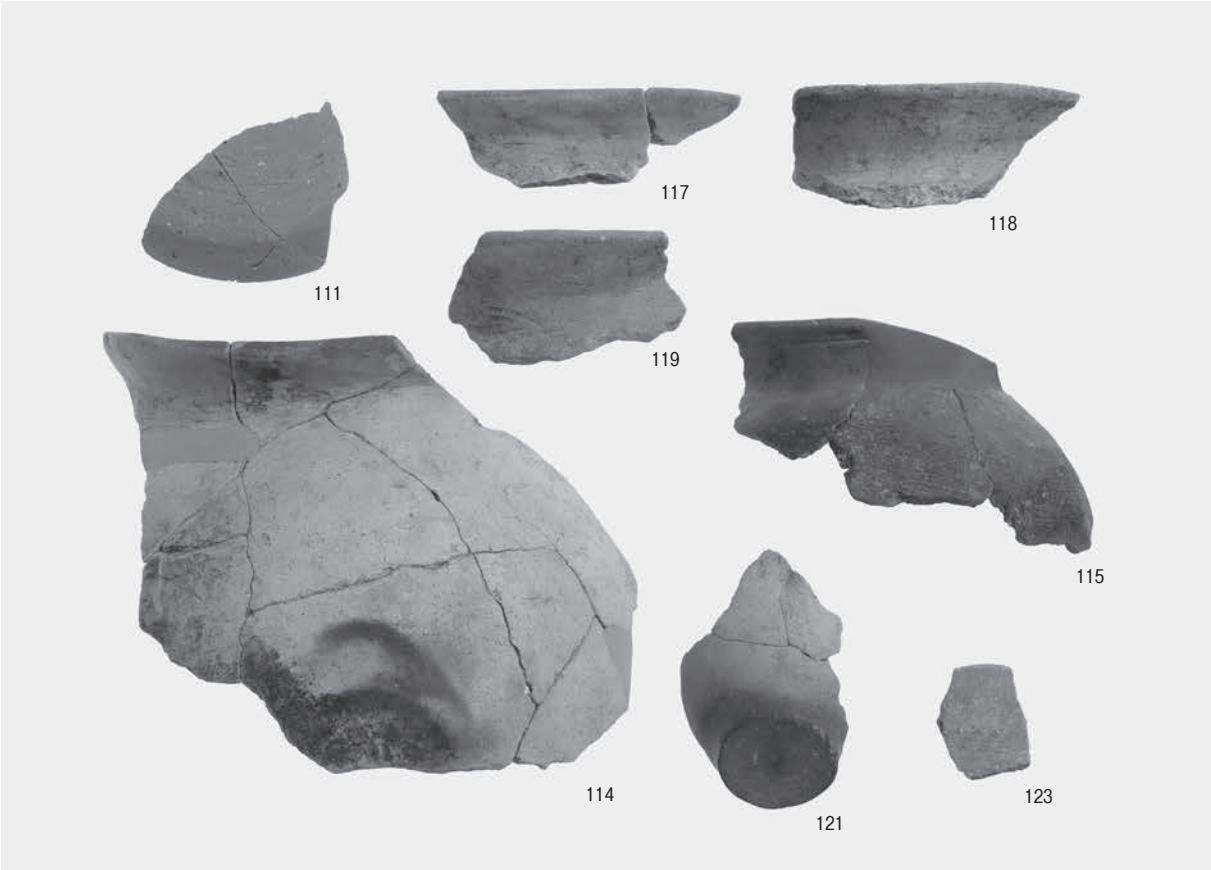
112

113

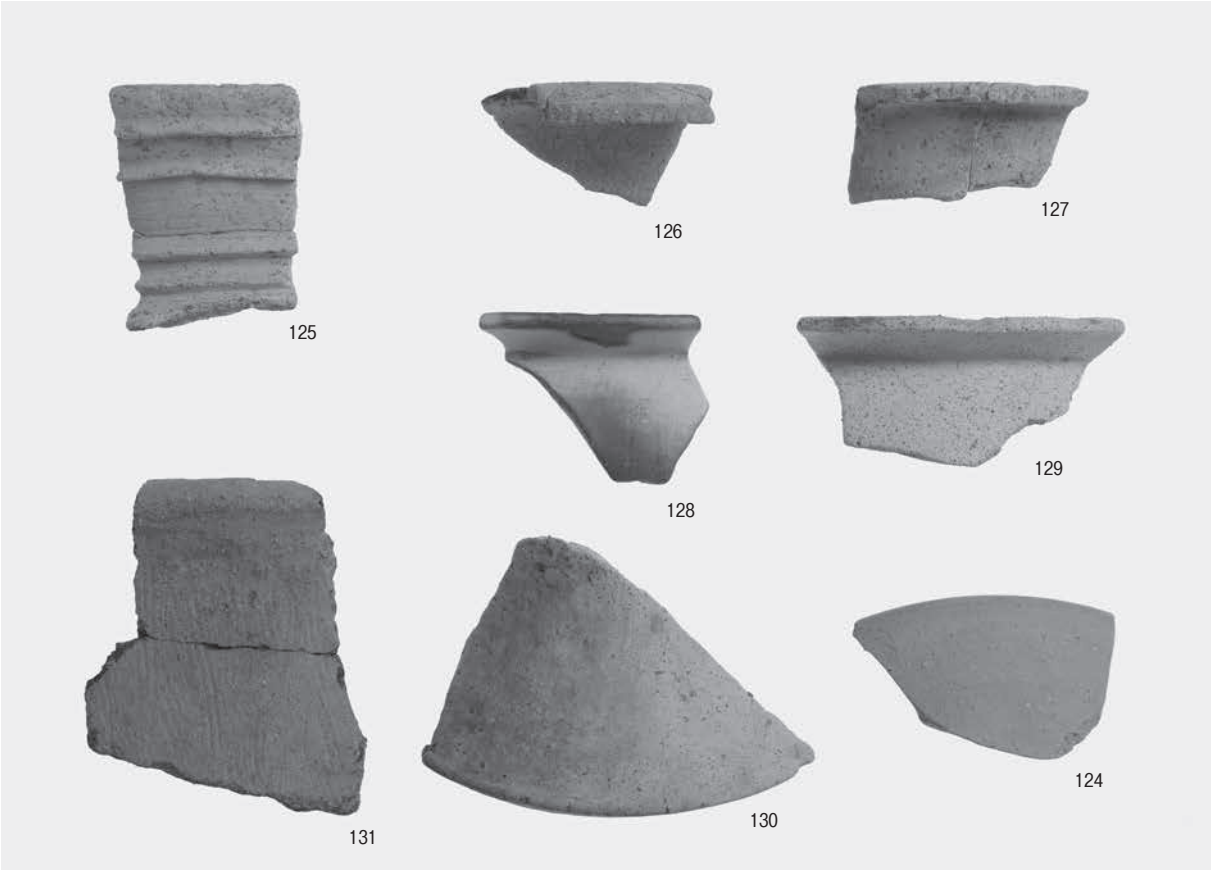
116

SH-２・SH-４出土土器（１）

SH-２・SH-４出土土器（２）

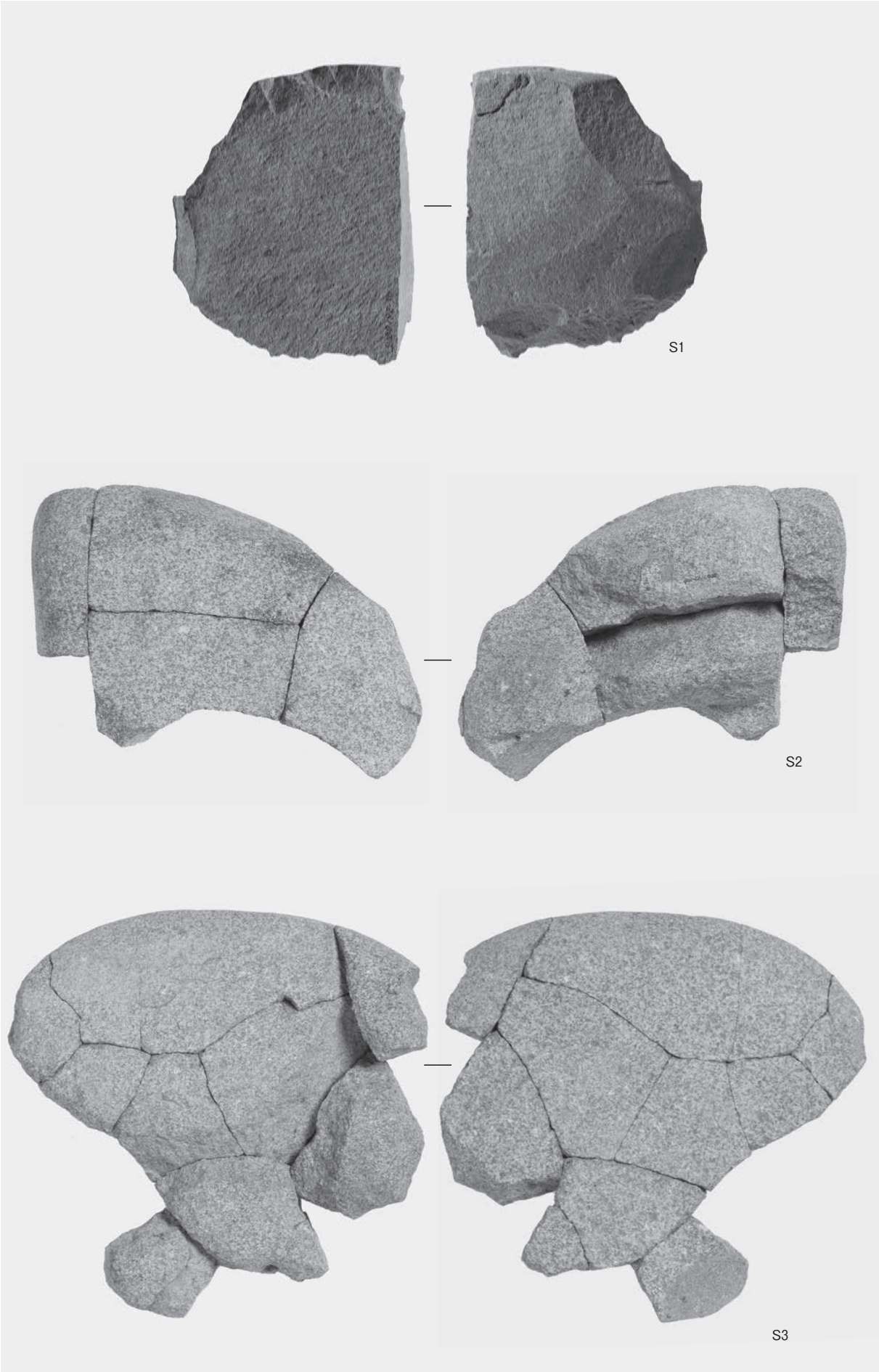


SH-４出土土器

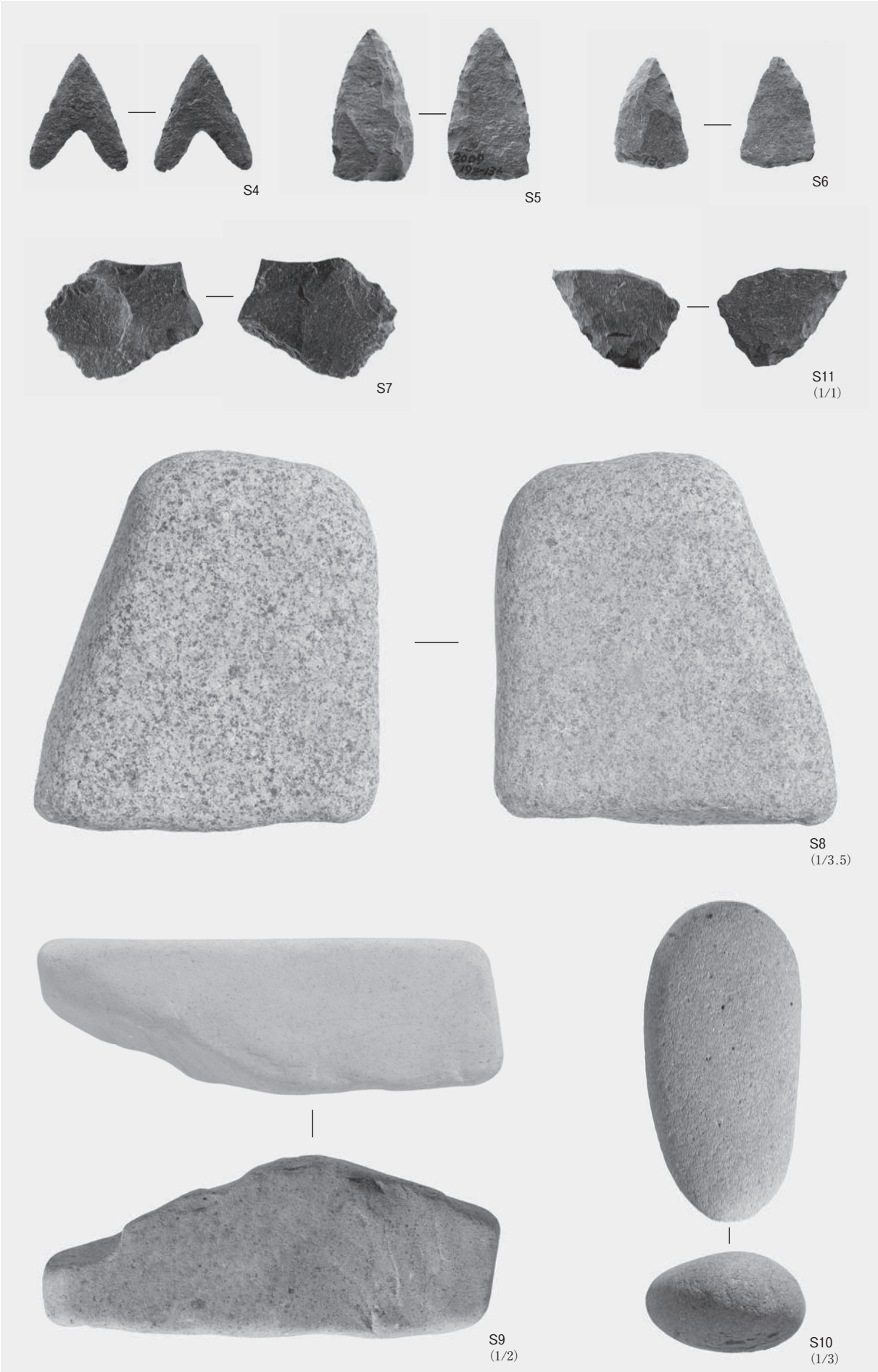


包含層出土土器（外面）

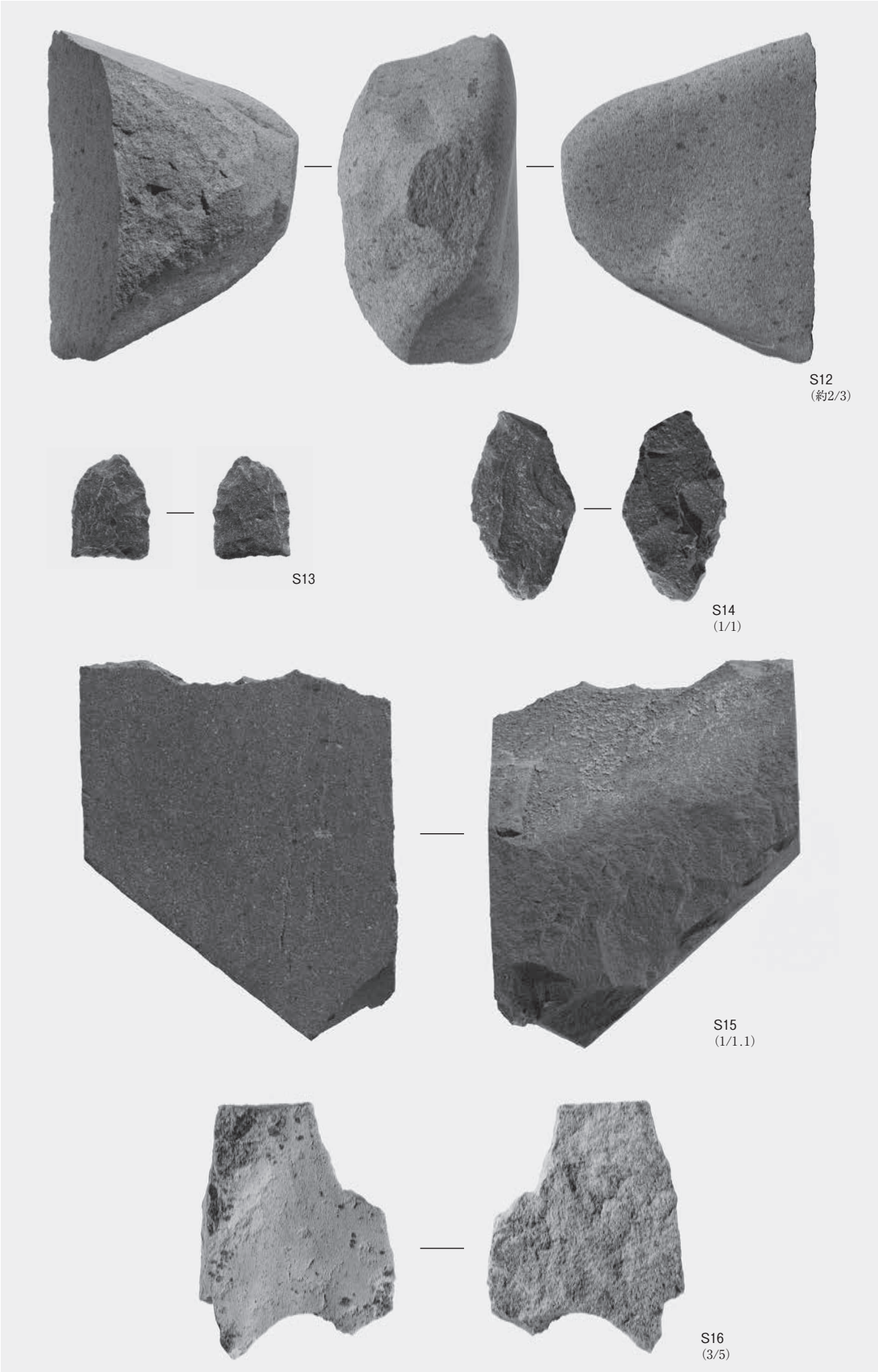
包含層出土土器（内面）



SX-6出土石器類



SD-２・SH-２出土石器類



SH-４・包含層出土石器類

兵庫県文化財調査報告　第449冊

宍粟市

神谷戒現行遺跡

－(一)田井中広瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成25(2013)年３月28日　発行

編　集　公益財団法人
兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
(兵庫県立考古博物館内)

発　行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウ　ニ　ス　ガ　印　刷　株　式　会　社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39